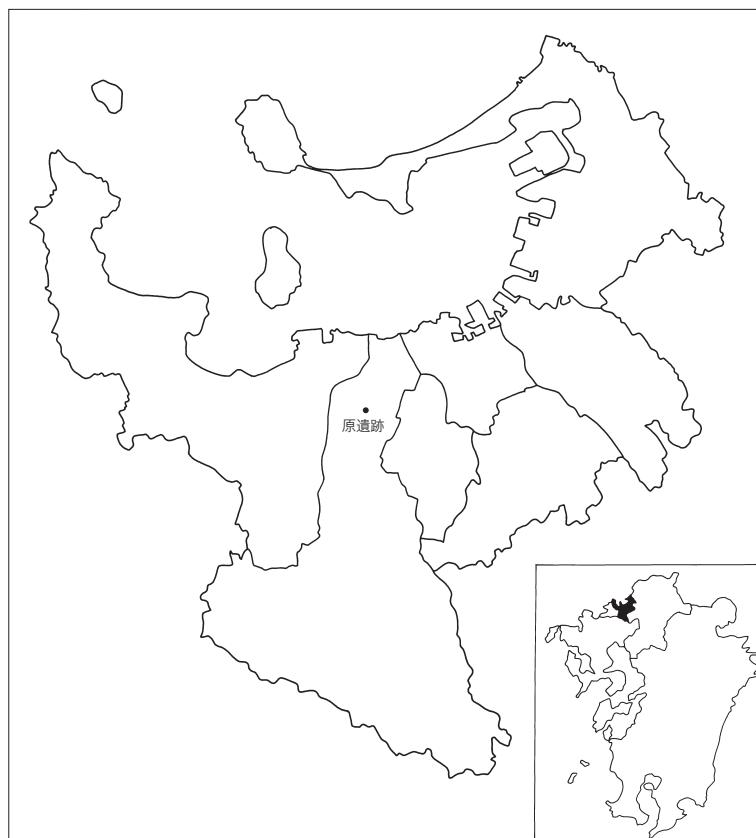


# 原遺跡16

—第28次・30次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1199集



遺跡略号 HAA-28・30

調査番号 1126・1134

2013

福岡市教育委員会







# 序

古くからさまざまな地域との文化交流を通じて発展を遂げてきた福岡市には、数多くの歴史的遺産があります。それらを保護し、後世へと伝えていくことはわれわれの義務であります。

しかし、近年の都市開発によって貴重な文化財が失われていることも事実です。本市では開発によりやむを得ず破壊されていく遺跡の記録保存を行い、広く公開するよう努めています。

本書は、都市計画道路長尾橋本線建設に伴い平成23年度に調査を実施した原遺跡第28次および30次調査の成果を報告するものです。28次調査では弥生時代および中近世の集落遺構を確認しました。特に古代末から中世にかけては多くの貿易陶磁や土師器が出土し、11世紀後半から12世紀にかけての拠点集落が存在した可能性が出てきました。

また、30次調査においては弥生時代および中世から近世の遺物・遺構が確認され、当時は微高地の端に位置する集落の一部であったことがわかりました。

今後、本書が文化財保護への理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料としても活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、多大なご理解とご協力を賜りました関係者の方々に、心から謝意を表します。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦

## 例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が都市計画道路長尾橋本線建設に伴い、福岡市早良区原6丁目および7丁目地内において平成23年度に発掘調査を実施した原遺跡第28次・30次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、令達事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構および遺物実測図の作成、写真撮影、挿図の製図は屋山洋・福菌美由紀・濱石正子が行った。
5. 本書で用いた方位は、すべて磁北を示す。
6. 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系によるものである。
7. 遺構の呼称は、井戸をSE、掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
8. 遺物の番号はそれぞれの調査次数での通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
9. 本書で記述する陶磁器の分類については、次の文献を参考とした。  
『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会 2000年
10. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 本書の執筆は屋山・福菌が、編集は福菌が行った。

遺跡名	原遺跡	調査次数	28次	調査略号	HAA-28
調査番号	1126	分布地図図幅名	原82	遺跡登録番号	020311
申請地面積	4,455 m <sup>2</sup>	調査対象面積	1,150 m <sup>2</sup>	調査面積	628 m <sup>2</sup>
調査地	福岡市早良区原6丁目868-1、869-1、870-1			事前審査番号	21-2-225
調査期間	平成23(2011)年9月20日～平成24(2012)年3月7日				

遺跡名	原遺跡	調査次数	30次	調査略号	HAA-30
調査番号	1134	分布地図図幅名	原82	遺跡登録番号	020311
申請地面積	4,455 m <sup>2</sup>	調査対象面積	600 m <sup>2</sup>	調査面積	543 m <sup>2</sup>
調査地	福岡市早良区原7丁目1190番・1187番 の一部			事前審査番号	21-1-225
調査期間	平成23(2011)年11月21日～平成24(2012)年3月7日				

# 本文目次

I . はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II . 遺跡の立地と環境	2
III . 第 28 次調査の記録	
1. 概要	4
2. I 区の調査	4
3. II 区の調査	14
4. 出土動物遺存体	41
5. 小結	41
6. 原遺跡第 28 次調査出土井戸枠材の樹種同定（パレオ・ラボ）	46
7. 原遺跡第 28 次調査から出土した大型植物遺体（パレオ・ラボ）	48
8. 原遺跡第 28 次調査出土葉の同定（パレオ・ラボ）	55
IV . 第 30 次調査の記録	
1. 概要	64
2. 遺構と遺物	65
1) 溝 (SD)	
2) 掘立柱建物 (SB)	
3) 自然流路 (SR)	
4) その他の出土遺物	
3. 結語	67

## 挿図目次

第1図 原遺跡と周辺遺跡 (1/50,000) .....	2
第2図 原遺跡調査区位置図 (1/6,000) .....	3
第3図 I・II区関係図 (1/400) .....	5
第4図 I区遺構配置図 (1/100) .....	6
第5図 弥生時代遺構実測図1・出土遺物実測図1 (1/40・1/30・1/3) .....	8
第6図 土坑出土遺物実測図2 (1/3) .....	9
第7図 弥生時代遺構実測図2 (1/50・1/30・1/3) .....	10
第8図 井戸遺構・遺物実測図 (1/40・1/30・1/3) .....	11
第9図 井戸出土遺物実測図 (1/3) .....	12
第10図 SD086 遺構・遺物実測図 (1/40・1/3) .....	13
第11図 その他遺構実測図 (1/30・1/10) .....	14
第12図 II区遺構配置図 .....	折り込み
第13図 井戸遺構実測図1 (1/40・1/30) .....	16
第14図 井戸遺構実測図2 (1/40・1/30) .....	17
第15次 井戸出土遺物実測図 (1/3) .....	18
第16図 SE287 遺構実測図・遺物実測図1 (1/40・1/3) .....	19
第17図 SE287 遺物実測図2 (1/3) .....	20
第18図 SE287 井筒実測図 (1/30)・遺物実測図3 (1/3) .....	21
第19図 SE287 井戸枠木材実測図 (1/6)・遺物実測図4 (1/3) .....	22
第20図 SE287 井戸枠柱実測図1 (1/4) .....	23
第21図 SE287 井戸枠柱実測図2 (1/4) .....	24
第22図 SE287 井戸枠柱実測図3 (1/4) .....	25
第23図 SE287 井戸枠柱実測図4 (1/4) .....	26
第24図 SE287 井戸枠横木実測図 (1/6) .....	27
第25図 SE297・SE320 遺構実測図 (1/40) .....	28
第26図 SE297 遺物実測図1 (1/3・1/4) .....	29
第27図 SE297・SE320 遺物実測図 (1/3) .....	30

第28 図 SD203 遺構実測図 (1/40)・遺物実測図1 (1/3) .....	32
第29 図 SD203 遺物実測図2 (1/3) .....	33
第30 図 SD203 遺物実測図3 (1/3) .....	34
第31 図 SD203 遺物実測図4 (1/3) .....	35
第32 図 SD203 遺物実測図5 (1/3・484 のみ1/4) .....	36
第33 図 溝出土遺物実測図 (1/3) .....	37
第34 図 SD295 遺構実測図 (1/40)・遺物実測図 (1/3) .....	38
第35 図 土坑実測図 (1/40) .....	39
第36 図 SK288 出土遺物実測図 (1/3・1/4) .....	40
第37 図 30 次調査区位置図 (1/1,000) .....	64
第38 図 30 次調査遺構配置図 (1/200) .....	折り込み
第39 図 SB070 実測図 (1/60) .....	65
第40 図 SB071 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3) .....	66
第41 図 その他の出土遺物実測図 (1/3、1/1) .....	67

## 表目次

表 1 原遺跡発掘調査一覧 .....	3
表 2 原遺跡第28 次出土動物遺存体 .....	41
表 3 第28 次調査遺構一覧1 .....	42
表 4 第28 次調査遺構一覧2 .....	43
表 5 第28 次調査遺構一覧3 .....	44
表 6 第28 次調査遺構一覧4 .....	45
表 7 樹種同定結果 .....	46
表 8 原遺跡から出土した大型植物遺体1 .....	49
表 9 原遺跡から出土した大型植物遺体2 .....	50
表 10 原遺跡から出土した葉遺体 .....	55
表 11 葉遺体の同定結果一覧 .....	56

## 図版目次

図版1 1. I 区全景（東から） 2. SK004（東から） 3. SK008 土層（西から）  
4. SK008（西から） 5. SK033（東から）

図版2 1. SK010 遺物出土状況（南から） 2. SK010 完掘（東から） 3. SK003（東から）  
4. SC080（東から） 5. SE007（北から） 6. SE078 遺物出土状況（西から）  
7. SE078 底面遺物出土状況（東から） 8. SD086（西から）

図版3 1. SD086 土層（西から） 2. SD086 土器集中出土（東から） 3. SD144（北から）  
4. SD144 土層（西から） 5. II 区東側全景（東から）

図版4 1. II 区西側全景（東から） 2. SE235（南西から） 3. SE235 井筒半裁（北から）  
4. SE236（南から） 5. SE236（左）・SE238（右） 北から

図版5 1. SE248（北西から） 2. SE280（東から） 3. SE317（東から）  
4. SE287・325（東から） 5. SE287 井筒（北から） 6. 井筒（東から）  
7. 横木出土状況 8. 木器出土状況（北から）

図版6 1. SE318（南から） 2. SE297（左）・320（右）西から 3. SD203（西から）  
4. SD304（東から） 5. SK287 遺物出土状況（南から） 6. SK244 土層（北から）  
7. SK261 土層（北東から） 8. SK282（南から）

図版7 1. I 区西側全景（東から） 2. I 区東側全景（西から）

図版8 1. II 区全景（東から） 2. I 区SD およびSB071（西から）  
3. I 区SB070（北から） 4. I 区SD025 土層断面（南から）  
5. II 区SR 周辺（南から）

## I . はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成 22 年 3 月 17 日付で、福岡市道路下水道局道路整備部西部道路整備課（現 建設部西部道路課）より福岡市教育委員会に対し、福岡市早良区飯倉 4 丁目～原 8 丁目地内における都市計画道路長尾橋本線外 1 線（飯倉工区）建設に伴う埋蔵文化財の事前調査依頼が提出された（事前審査番号：21 - 1 - 225）。

これを受けた教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課（現 埋蔵文化財審査課）は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である原遺跡および原東遺跡に含まれていることから、平成 23 年 7 月 6 日、8 月 11 日および 9 月 9 日に工区内の一部において確認調査を実施した。その結果、道路建設予定地（早良区原 6 丁目および 7 丁目地内）の地表下約 45 ～ 80cm において土坑・溝・ピット等を確認した。この成果をもとに両者で協議を行い、遺跡が確認された約 1,150m<sup>2</sup> (28 次調査) と 600m<sup>2</sup> (30 次調査) については、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。28 次調査は、平成 23 年 9 月 20 日より開始し、平成 24 年 3 月 7 日に終了した。30 次調査は、平成 23 年 11 月 21 日より開始し、平成 24 年 3 月 7 日に終了した。

発掘調査から報告書作成に至るまで、関係者各位には多大なご協力とご理解を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

### 2. 調査の組織（平成 23 年度）

委託：福岡市道路下水道局建設部西部道路課

主体：福岡市教育委員会

総括：埋蔵文化財第 2 課長 田中壽夫

同課調査第 1 係長 米倉秀紀

同課調査第 2 係長 菅波正人

庶務：埋蔵文化財第 1 課

同課管理係 古賀とも子

### 整理・報告書作成（平成 24 年度）

主体：福岡市教育委員会

総括：経済観光文化局

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

同課調査第 1 係長 常松幹雄

同課調査第 2 係長 菅波正人

庶務：埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子

調査・整理担当：埋蔵文化財調査課調査第 1 係 屋山洋（28 次調査・30 次調査Ⅱ区）

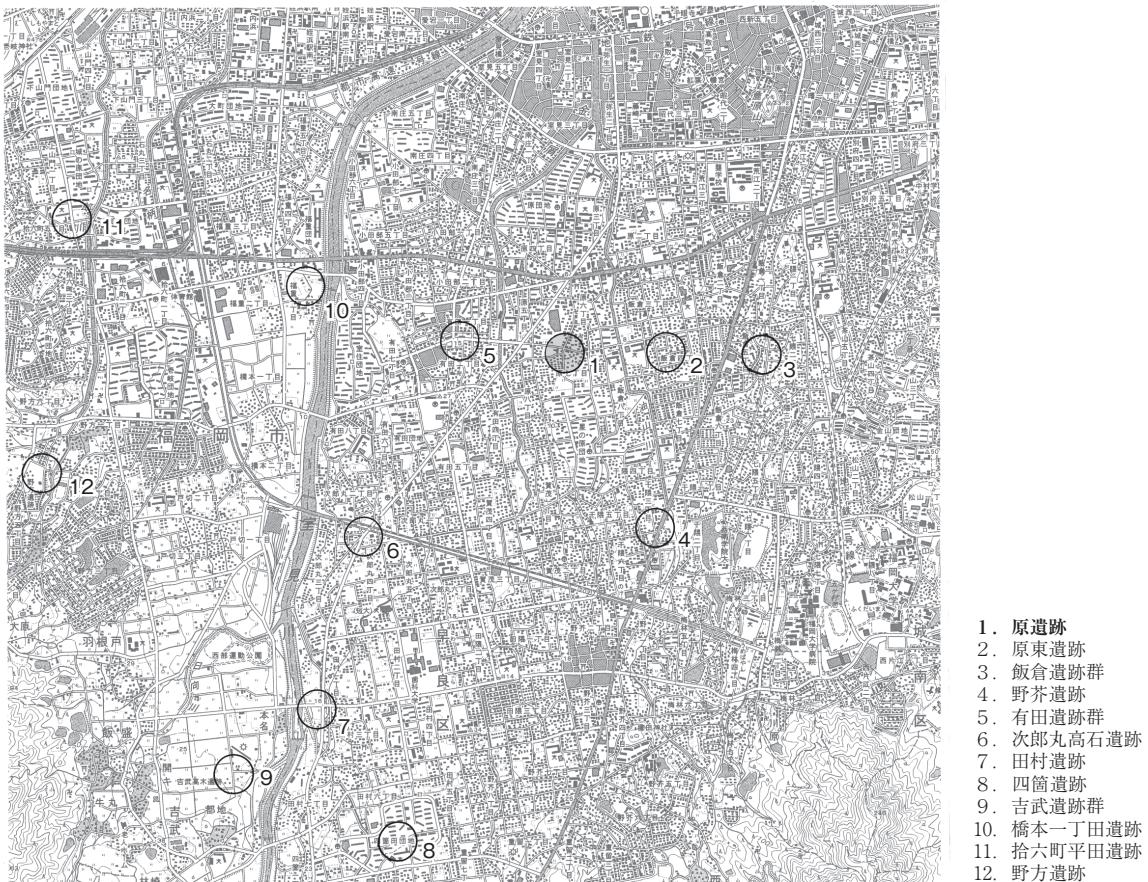
埋蔵文化財調査課調査第 2 係 福蘭美由紀（30 次調査 I 区）

## II . 遺跡の位置と環境

北に玄界灘を臨み、南に背振・三郡山系がひかる福岡市には、西から今宿、早良、福岡、糟屋といった4つの平野が拡がっている。今回報告する原遺跡は、沖積扇状平野である早良平野の中央を流れる室見川中流の東岸に位置し、金屑川と油山川に挟まれた標高6～7mの低位段丘上に拡がる遺跡である。周辺には多くの遺跡が存在する（第1図）。近隣の遺跡としては、油山川を挟んで東側に位置する原東遺跡、金屑川を挟んで西側に八手状に拡がる有田遺跡群がある。原東遺跡では弥生時代前期の環濠、中期の甕棺墓が検出され、有田遺跡群においては、弥生時代初頭の拠点集落や古墳時代後期から奈良時代にかけての群衙関連施設が認められる。

原遺跡は、古地図やこれまでの調査成果、現在の水路等から、原遺跡は南北に延びる2つの微高地とその間に挟まれた低地で形成されていることが推定される。今回調査を行った28次調査は、微高地Bの中央に位置し、微高地の中でも最も高い標高に位置する。30次調査は、微高地Bの西端に位置し、調査区の西側にむかって緩やかに傾斜している。

平成24年度までに、原遺跡では32次の調査が行われ（第2図、第1表）、旧石器時代から中近世に至るまでの遺構・遺物が確認されている。縄文時代は明確な遺構や縄文土器は確認されていないが、石鏃等の石器が出土している。弥生時代から古墳時代前期にかけては、竪穴住居や貯蔵穴などの集落跡や甕棺墓地が見られるようになる。古代の遺構は少ないが、10次調査北端で検出された溝は条里の東西方向に一致し、有田遺跡群の溝と繋がる可能性が指摘されている。その後の中世前半においては掘立柱建物や井戸、輸入陶磁器が多く見られ、中世後半には方形区画溝に囲まれた屋敷地が認められるようになる。

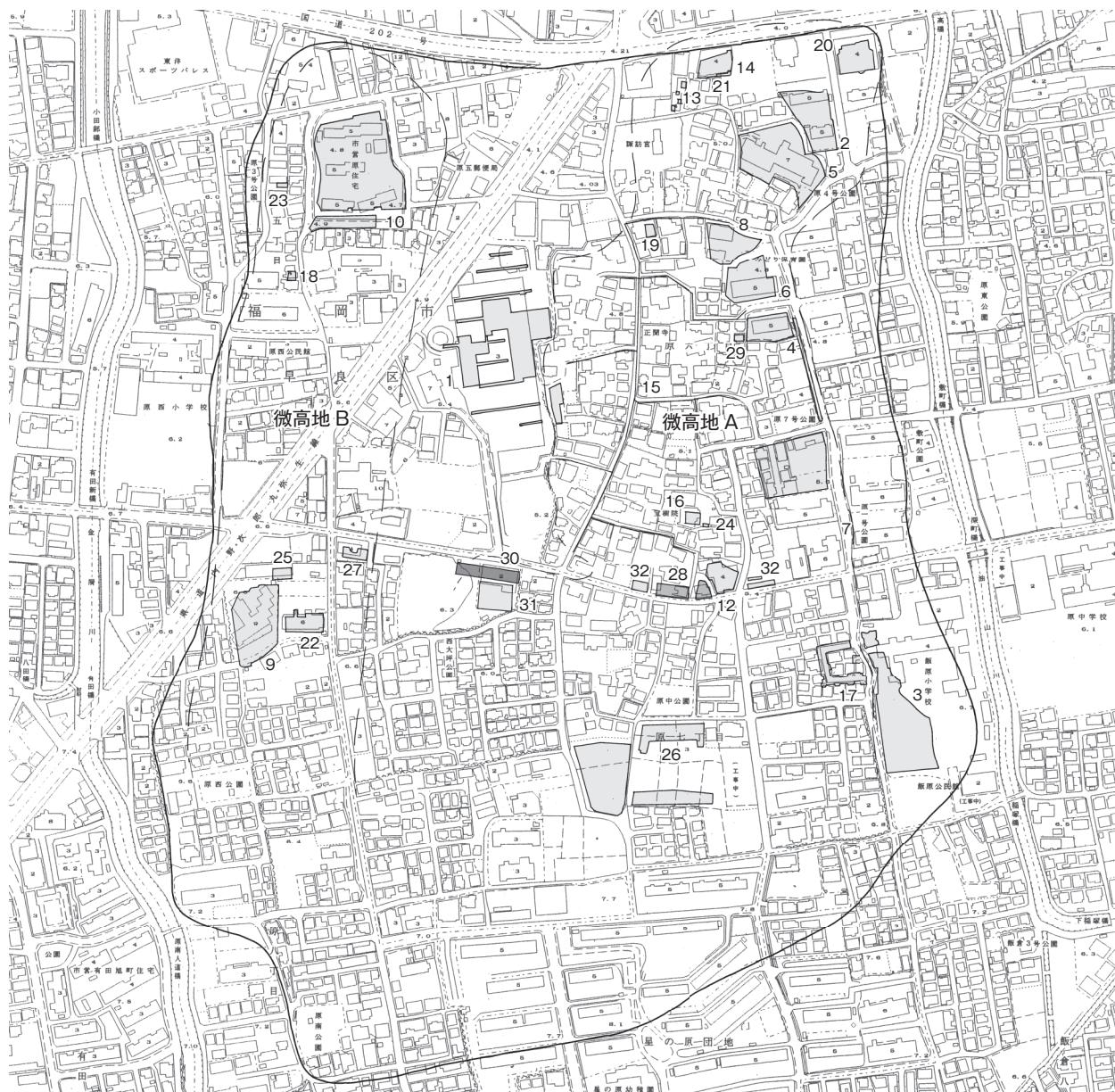


第1図 原遺跡と周辺遺跡 (1/50,000)

第1表 原遺跡発掘調査一覧

年度	主な遺構	報文
第1次 S50	杭列(弥生早～中期)、水田(古代)、溝(中世後期)	市報492集
第2次 S54	溝(弥生中期)、溝・建物・井戸(中世前期)	市報544集
第3次 S54	溝(弥生前～中期)、溝・杭列(古墳前期)	市報71集
第4次 S55	土坑(中世前期)	市報64集
第5次 S56	集落跡(弥生中期、古墳)	
第6次 S57	土坑(古墳前期)、建物・溝・井戸(中世前期)	市報213集
第7次 S57	井戸・土坑(中世前期)	『文化財だより』3
第8次 S59	甕棺墓(弥生中期)、溝(古墳)、井戸・土坑墓(中世)	
第9次 S59	竪穴住居・溝(弥生)、溝(古墳前期)、館跡(中世後期)	市報140集
第10次 S62	建物・溝・井戸(中世前期)	市報215集
第11次 S63		市報266集
第12次 S63	掘立柱建物・溝・井戸(中世後期)	市報233集
第13次 S63	竪穴住居(弥生中期)、土坑(中世前期)	市報233集
第14次 H1	竪穴住居・土坑(弥生中期)、建物・柵列・溝・井戸(中世前期)	市報295集
第15次 H1	溝・土坑(中世前期)	市報266集
第16次 H3	竪穴住居・建物・貯蔵穴(弥生早期)、建物・井戸(中世後期～)	市報337集

年度	主な遺構	報文
第17次 H7	土坑(弥生前期)、竪穴住居(古墳)、溝(中世)	市報444集
第18次 H7	建物・溝(古代～中世)	『年報』10
第19次 H8	溝・井戸・土坑(中世前～後期)	市報917集
第20次 H11	竪穴住居・建物(弥生中期)、溝(中世前期)	市報688集
第21次 H12	建物・井戸(中世)	『年報』15
第22次 H15	溝・土坑(弥生中～後期)、溝(中世前期)、建物・溝(中世後期～)	市報818集
第23次 H18	土坑(中世前期)	『年報』21
第24次 H20	溝(中～近世)	『年報』23
第25次 H21	土坑(弥生後期)、建物・溝(中世後期)	市報1129集
第26次 H22	竪穴住居・建物・貯蔵穴(弥生早期)、建物・井戸・柵列(中世前期)	市報1167集
第27次 H22	溝(中世後期)	市報1168集
第28次 H23	竪穴住居・土坑(弥生前期)、溝・井戸(中世)	市報1168集
第29次 H23	溝・土坑(中世)	市報1200集
第30次 H23	溝(弥生)、掘立柱建物(中世)	市報1199集
第31次 H23	溝(弥生)、掘立柱建物(中世)	市報1201集
第32次 H24	土坑(弥生・古墳)、溝(中世前半・近世)	



第2図 原遺跡調査区位置図 (1/6,000)

### III. 原 28 次調査の記録

#### 1. 概要

調査は2011年9月20日に機材を搬入し、21日にI区の表土剥ぎを行い調査を開始した。10月27日にI区の調査を終え、28日にII区東側(II-1区)の調査を始め、12月13・14日に打って返しを行い西側(II-2区)の調査を開始した。II-2区の調査を2月25日に終え、27・28日に埋め戻し、29日に機材の撤去を行い、その後は3月7日まで整理事務所で土器洗いを行った。

28次の調査では11世紀末～13世紀の遺構が数多く出土した他、縄文時代晚期～弥生時代前期、弥生時代中期、中世末から近世の集落の遺構を確認した。その他遺構を伴わない遺物として、6世紀後半の須恵器壺等が後世の遺構から出土している。出土した遺物についてはP42～45の一覧表に記載している。東側に隣接する12次調査では中世末～近世の遺構を主としており、弥生時代や古代の遺構は報告されていない。弥生時代の遺構は28次I区においても遺存状態が悪かったため削平の結果消滅したとしても、古代末の遺構が28次I区で数多く見られるのに12次調査区で見られないのは28次I区と12次調査の間になんらかの境界が存在したためと考えられる。今回は縄文時代晚期～中世の遺構について報告する。近世に属する遺構の報告とまとめは平成25年度に行う予定である。

#### 2. I区の調査

##### 1 縄文時代晚期から弥生時代前期の遺構と遺物

###### 1) 土坑

SK004(第5図) 調査区南側中央に位置する。平面形は隅丸の三角形を呈し、主軸をN-7°-Wにとる。南北136cm、東西97cm、深さ17cmを測る。覆土は黒色を呈し、底面の地山に近い部分では地山の黄褐色シルトの小ブロックを少量含む。遺物は突帯文の甕、浅鉢の他に赤色顔料の痕跡がある壺片が出土した。いずれも小片である。

SK008(第5図) 調査区の南西に位置する。平面形は楕円形を呈し主軸をN-20°-Eにとる。長径218cm、短径120cm、深さ30cmを測る。埋土は黒色土で一部に地山黄褐色粘質土のブロックを含む。遺物は突帯文期の甕、浅鉢の他、赤色顔料の痕跡が残る壺片などが出土した。

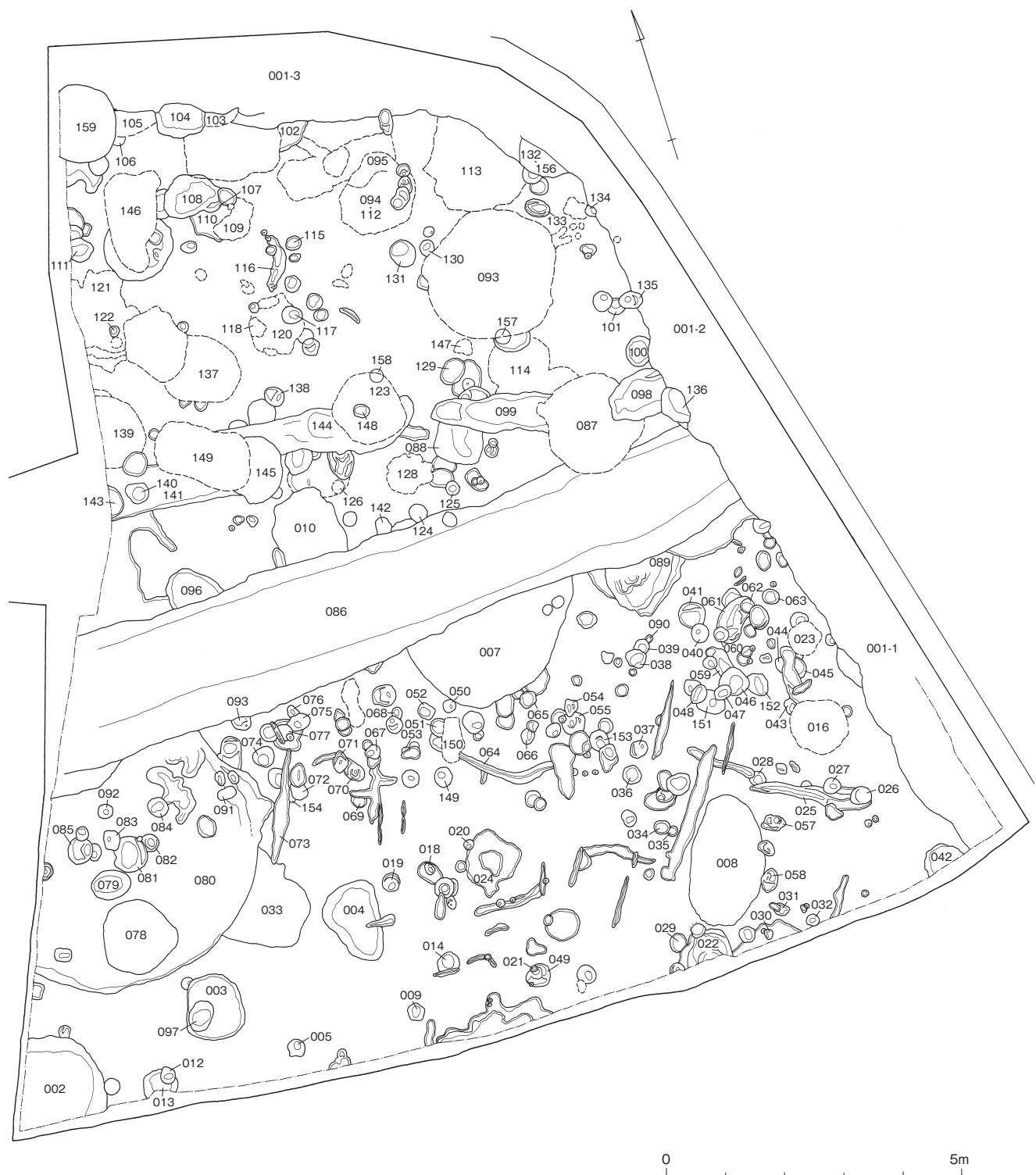
SK010(第5図) 調査区中央やや西寄りに位置する。SD086に遺構の南半を切られるが、現状で南北120cm、東西120cm、深さ31cmを測る。底面は凹凸が多く、中央に径40cm、深さ30cmの柱穴状の掘り込みがある。埋土は黒色を呈し締まりが弱い。遺物は突帯文の甕片が多く出土した。白磁碗片が1点出土しているが、混入と思われる。出土遺物(第6図010～023)。010～013は壺である。010は肩から胴部にかけて線刻を有す。破片が小さく径は不明瞭だが、図のように細身と思われる。011と012は口縁部でミガキを施し、013は底部で縦方向のハケを施す。014～018は浅鉢である。014・015は口縁、016は底部でいずれも丁寧なミガキを施す。017～023は甕である。

SK033(第5図) 調査区南東側に位置し、SC080に切られる。平面は歪な楕円形を呈す。南北209cm、東西183cm、深さ26cmを測る。断面は浅皿状を呈し、底面は平坦で柱穴等も確認できなかった。埋土は黒色で、遺物は突帯文の甕の他、浅鉢、丹塗壺等が出土した。轍の羽口が1点出土したが混入と思われる。出土遺物(第6図024～030)。024は壺口縁か。025・026は浅鉢である。025は完形に近く黒褐色を呈す。胎土は橙色を呈し、1mm以下の白色砂を多く含む。調整は内外面とも横方向のミガキを施す。027は甕口縁で028～030は甕か浅鉢の底部である。

2) 柱穴 調査区南側では埋土から縄文時代晚期～弥生時代初頭と思われる柱穴群を数基検出したが、実際に遺物が出土したのは少ない。SP031から001・002(第5図)の甕がSP097からは003が出土した。



第3図 I・II区関係図(1/400)



第4図 I区遺構配置図(1/100)

## 2 弥生時代中期以降の遺構と遺物

### 1) 壴穴式住居

SC080(第7図) 調査区南西隅に位置し、平面形は円形を呈する。北側はSD086に切られ、西側は調査区外に延び、径は5m前後と推定される。床面は削平され、床面下の掘方のみの遺存である。炉や建物に伴う柱穴は確定できなかったが、中央部に掘込みがあり、これらが炉及び柱穴になる可能性がある。床面下の掘方から甕棺片(弥生時代中期前半)や甕などの他、焼けた粘土塊等が出土した。出土遺物(第7図031・032)。031は甕棺口縁である。口縁端部に刻み目を施す。頸部に三条の沈線が巡る。032は甕底部である。調整は摩滅のため不明である。

### 2) 土坑

SK003(第7図) 調査区南西隅に位置する。平面は歪な楕円形で長径110cm、短径98cm、深さ22cmを測る。埋土は黒色を呈し、地山である黄褐色シルトの粒を含む。弥生時代中期の甕片が出土した。

SK042(第7図) 調査区南東端に位置し、遺構の南半が調査区外に延びる。現状で平面は半円形を呈し、径70cm、深さ12cmを測る。埋土は黒色を呈す。遺物は無いが、埋土から弥生時代と推定される。

## 3 古代末から中世の遺構と遺物

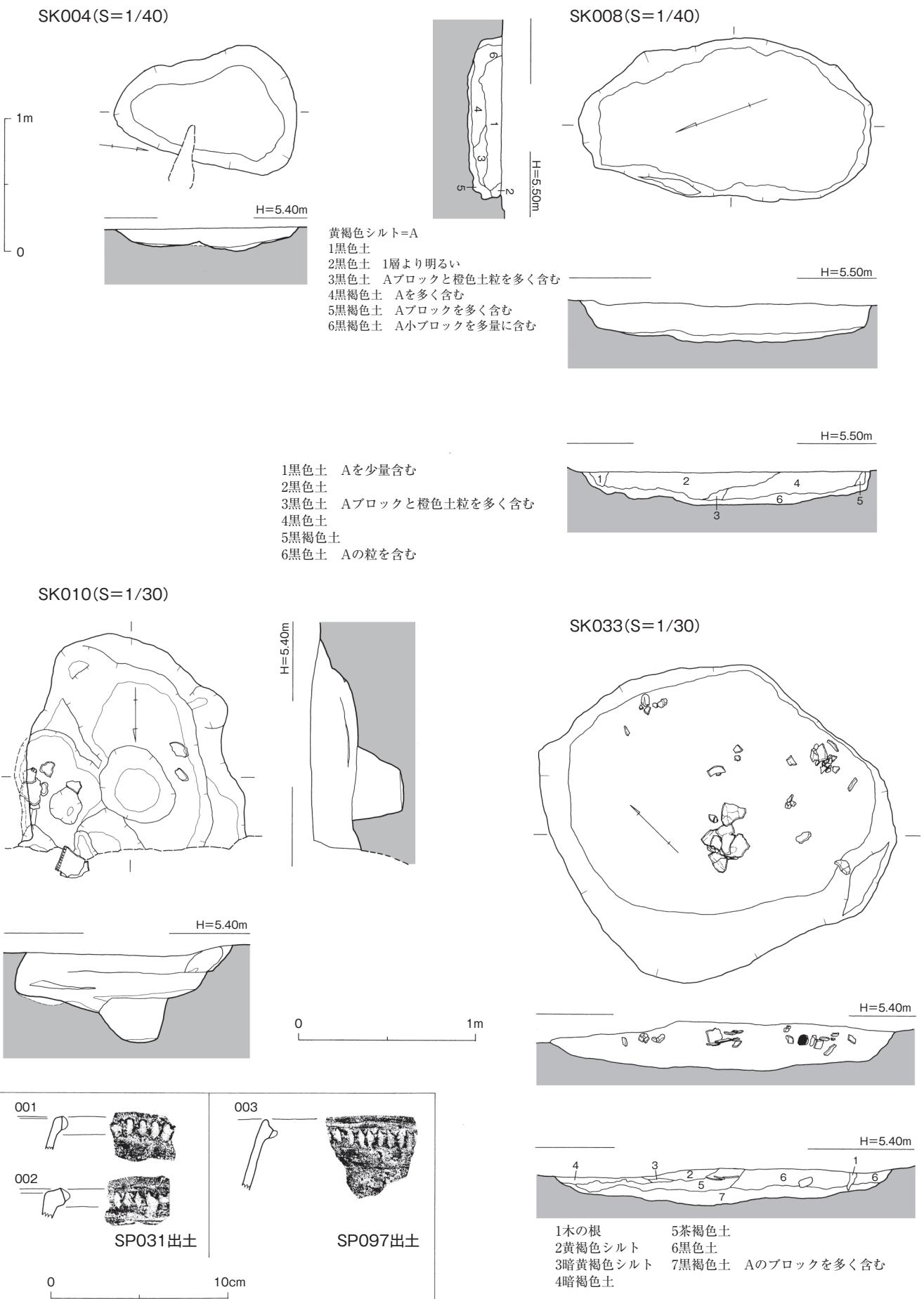
1) 井戸 調査区内で2基出土した。黄褐色シルト層の下の砂礫層は締まりが非常に固く、水が多く滲みでるため2基とも砂礫層まで掘り下げている。

SE007(第8図) 調査区中央やや南寄りに位置し、SD086に切られる。平面はほぼ円形で径2.3m、深さ1.4mを測る。断面は逆台形を呈す。南側壁面に数個の凹みがある。井戸枠は出土しなかったが、土層断面に一部版築状の堆積があり、廃棄時に井戸枠を抜いた可能性がある。埋土中から白磁碗IV類や陶器大甕、瓦器椀等が出土した。11世紀後半から12世紀前半頃か。出土遺物(第8図033～037)。033は白磁碗IV類である。034は黒色A類椀である。外面は摩滅のため不明、内面は全体にミガキを施す。035は瓦器椀で内面はミガキ、036は弥生前期の壺で頸部外面に赤色顔料が残る。037は木質である。厚さは1～2mmで、9～10cm毎に釘孔が残る。片面に刃物による切痕が見られる。曲げ物の側板か。

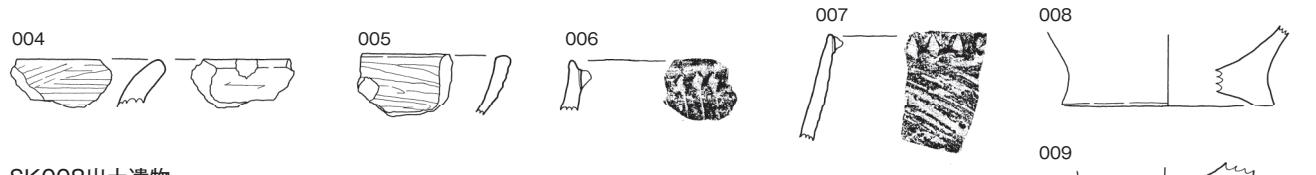
SE078(第8図) 調査区南西隅に位置し、SC080を切る。平面は不整円形で径1.2m、深さ1.5mを測る。断面は筒状を呈す。検出面から95cmで礫層に達し、その直上の壁面がやや抉れている。井戸枠の痕跡は見られず、素堀と推定される。検出面直下で白磁碗小片、土師椀、土師坏・皿、黒色土器椀、瓦器椀等が出土した。11世紀後半頃と思われる。出土遺物(第9図038～053)。038～040は土師椀、041は黒色A類坏で底部はヘラ切りで板状圧痕がみられる。042・043は土師坏で底部はヘラ切り、板状圧痕が残る。043は内面が黒っぽく黒色A類の可能性がある。044は瓦器皿、045～050は土師皿である。外底部はいずれもヘラ切りで板状圧痕が残る。049は口縁端に段がつく。051・052は土鍋である。底面直上でまとめて出土した。外面は厚く煤が付着、内面はヘラケズリを施す。053は土錘である。長さ3.8cm、幅2cmを測る。側面に長軸方向の溝を刻む。

### 2) 溝

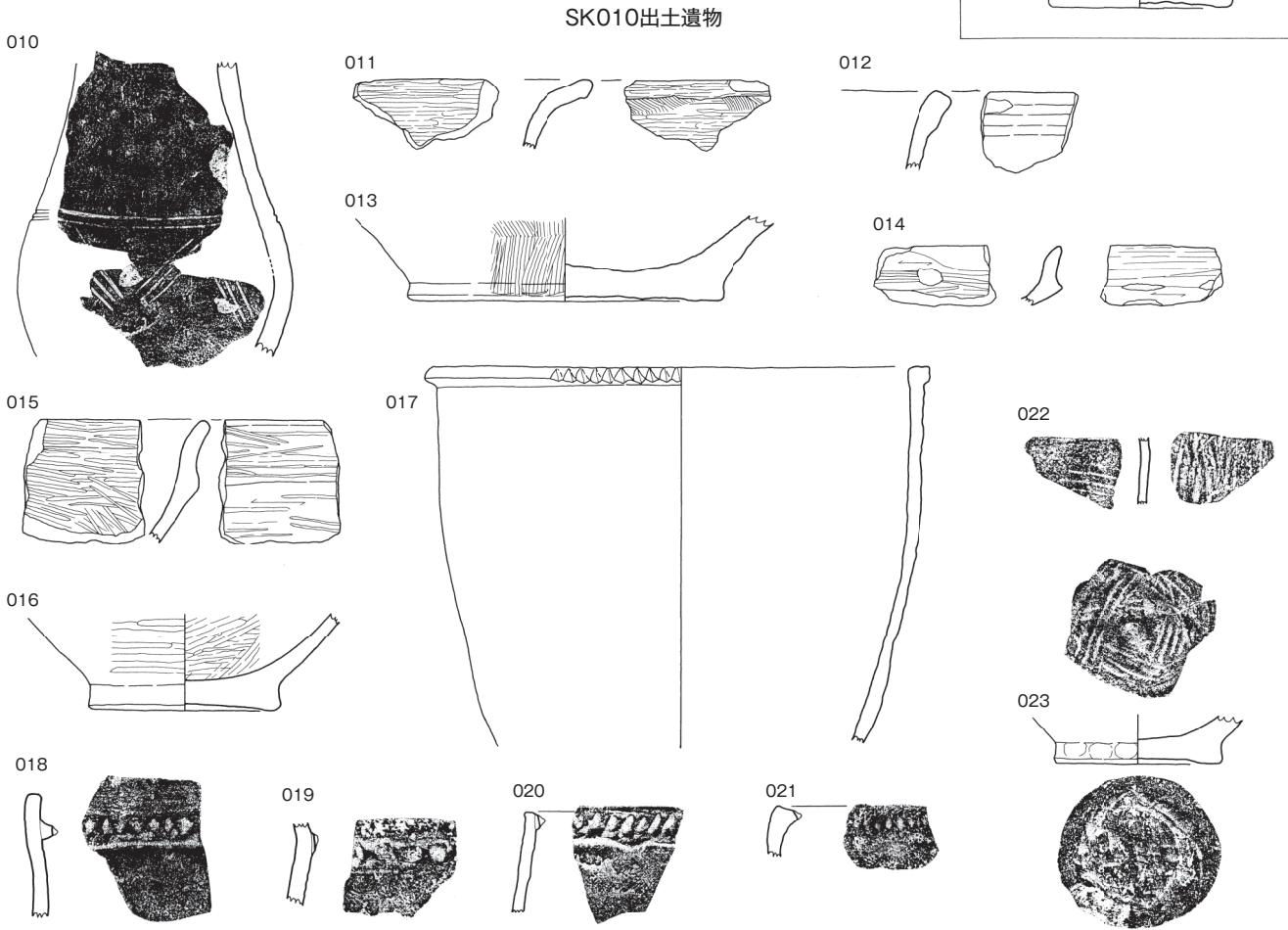
SD086(第10図) I区中央に位置する東西方向の溝で、長さ32.5mを測る。溝の西端はII区中央で立ち上がり、東端はI区東端で近世の溝であるSD001に切られる。東側隣接地の12次調査区には延びないため12次調査との境界で立ち上がるか、南北どちらかに屈曲する。溝は現状で幅が約2m、深さ約79cmを測り断面は逆台形に近い。壁面は北側が垂直に近いのに対し、南壁は緩やかな傾斜である。埋土の多くが南側からの流入みで、南側に土壘等が存在した可能性がある。12世紀中頃～後半の埋没である。出土遺物(第10図054～084)。054は越州窯青磁碗、055～062は白磁碗、063は白磁皿である。



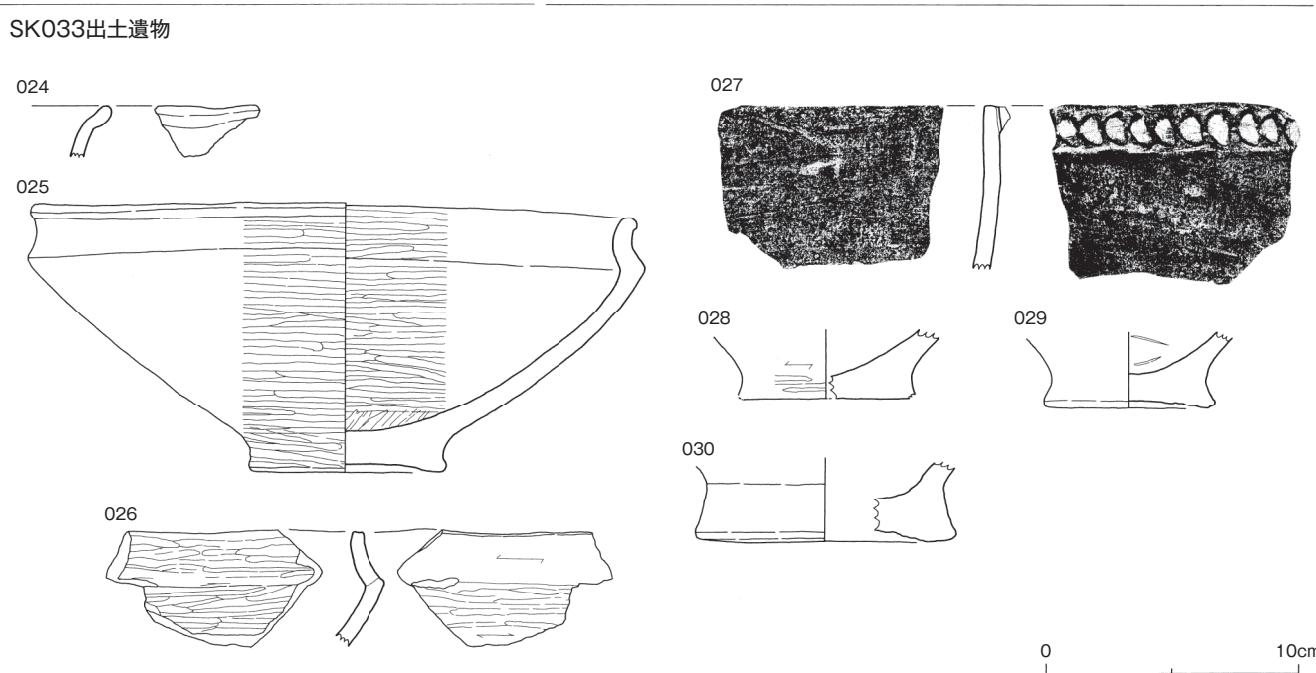
第5図 弥生時代遺構実測図1・出土遺物実測図1(1/40・1/30・1/3)



SK008出土遺物

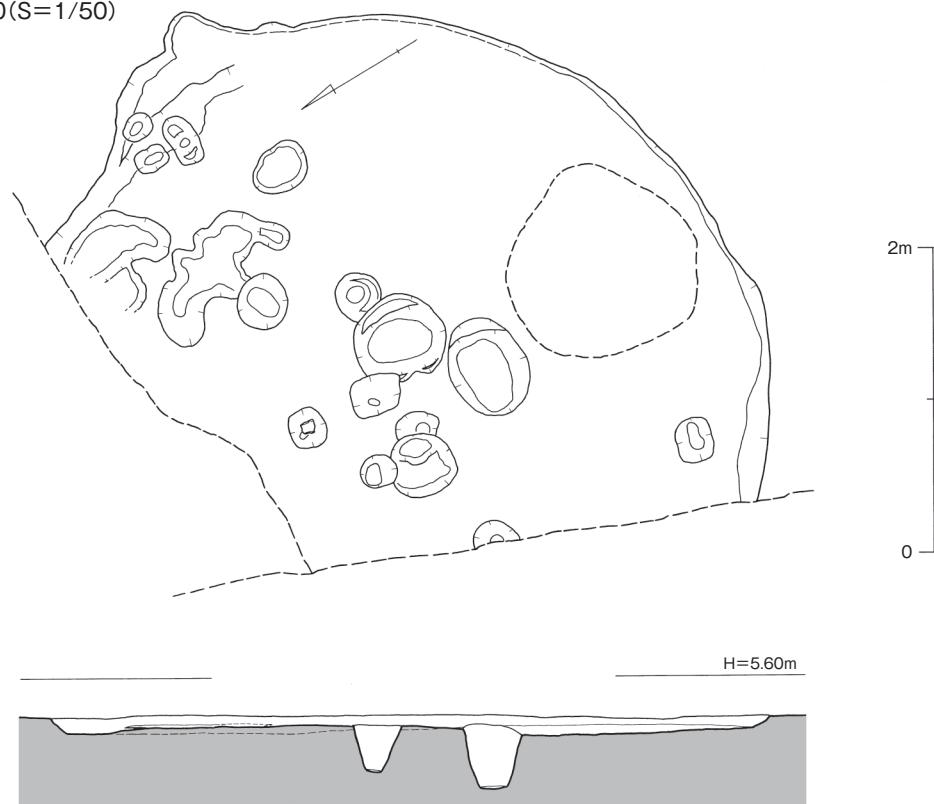


SK010出土遺物

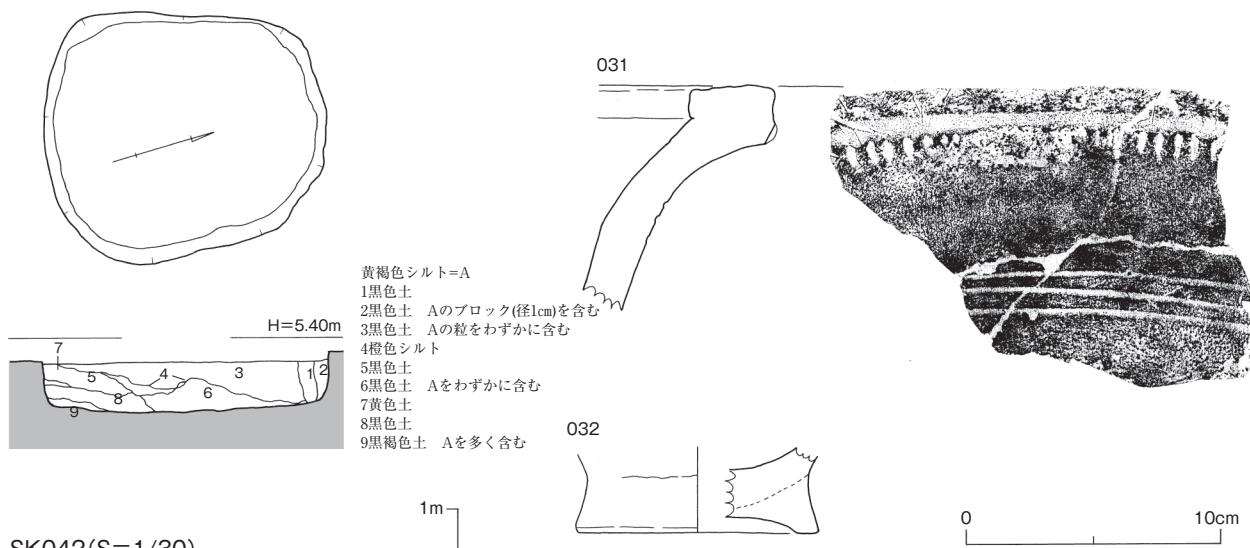


第6図 土坑出土遺物実測図2(1/3)

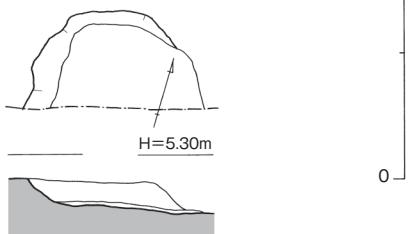
SC080(S=1/50)



SK003(S=1/30)

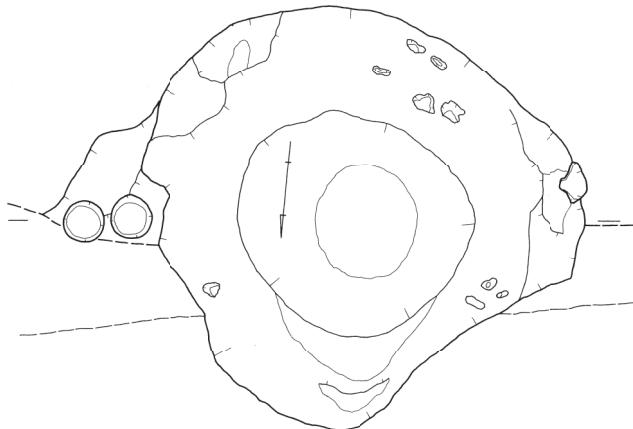


SK042(S=1/30)

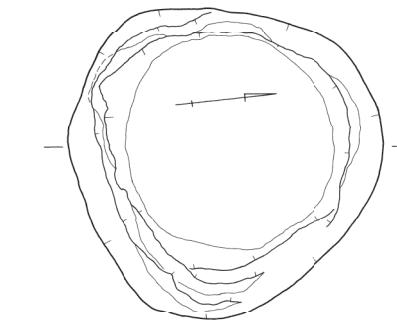


第7図 弥生時代遺構実測図2(1/50・1/30・1/3)

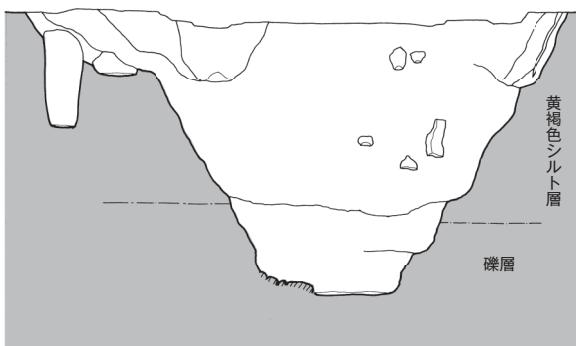
SE007(S=1/40)



SE078(S=1/30)

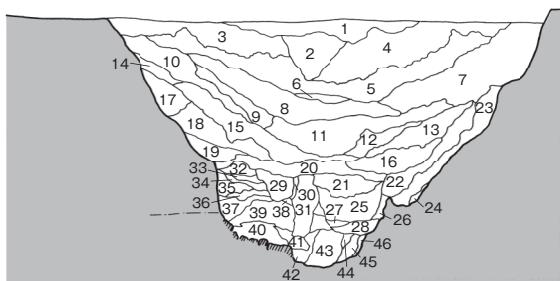


H=5.50m

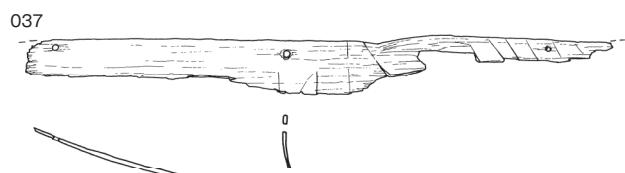
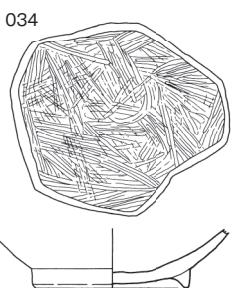
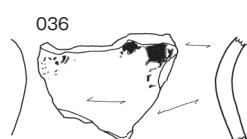
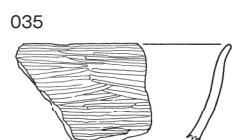
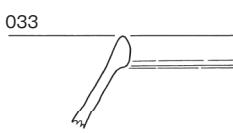


1m  
0

H=5.50m

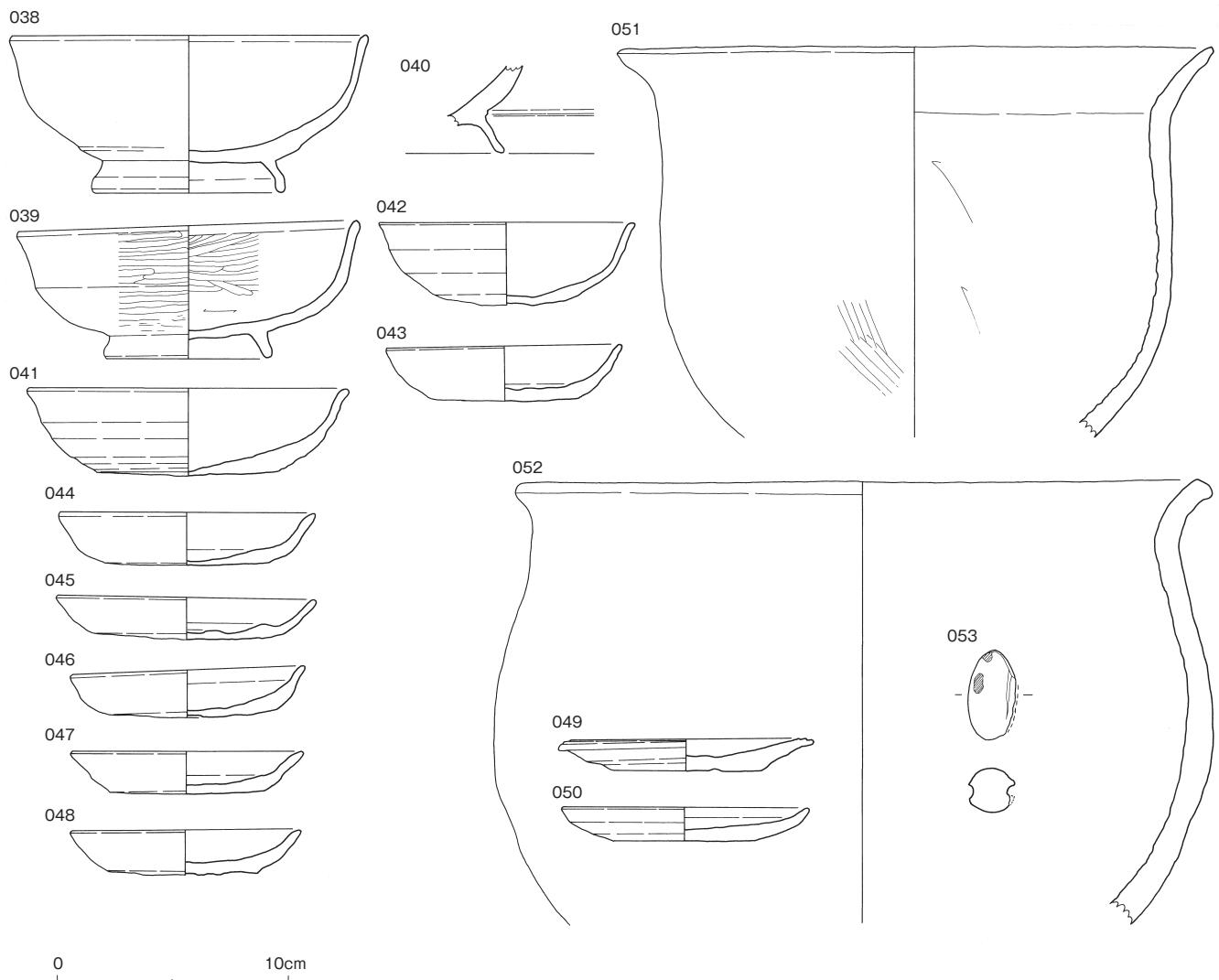


- A=黄褐色シルト  
 1暗茶褐色土  
 2暗茶褐色土 炭化物・赤褐色土を少量含む  
 3暗茶褐色土 Aを含む  
 4茶褐色土 Aを左下がりの層理状に多量に含む  
 5灰茶褐色土 焼土ブロックを全体的に含む  
 6黄褐色シルト  
 7暗茶褐色土 A(径5mm)を少量左下がりの層理状に含む  
 8暗茶褐色土 A(径1cm)を右下がりの層理状に含む  
 9暗茶褐色土 Aを少量含む  
 10暗茶褐色土  
 11黄褐色シルト  
 12暗茶褐色土  
 13茶褐色土 Aを少量含む  
 14茶褐色土  
 15茶褐色土 Aを右下がりの層理状に多量に含む  
 16黄褐色シルト  
 17暗茶褐色土 黒褐色土粒を含む Aを少量右下がりに含む  
 18茶褐色土  
 19暗茶褐色土 Aを水平な層理状に含む  
 20暗茶褐色土  
 21黒褐色土 A(5mm)を水平な層理状に含む  
 22褐色土  
 23暗茶褐色土 A(1cm以下)を左下がりに含む  
 24茶褐色土  
 25暗茶褐色土  
 26暗灰褐色粘質土  
 27暗灰褐色土  
 28暗灰褐色土  
 29暗褐色土 Aを少量含む  
 30黄褐色シルト  
 31暗茶褐色土  
 32黄褐色シルト  
 33黑褐色土  
 34黄褐色シルト  
 35暗灰褐色土 A(2~3mm)を多く含む  
 36黄褐色シルト  
 37暗灰褐色土  
 38黄褐色シルト  
 39黄褐色粘質土  
 40黑褐色土 炭化物含む  
 41青灰粘土  
 42黑褐色土 炭化物含む  
 43暗褐色粘質土  
 44暗灰褐色粘質土  
 45黄褐色シルト  
 46暗褐色粘質土



10cm  
0

第8図 井戸遺構・遺物実測図(1/40・1/30・1/3)



第9図 井戸出土遺物実測図(1/3)

064は瓦質の鉢で脚を貼り付けた痕跡が残る。全体に横方向のミガキを施す。065は陶器甕口縁である。釉は暗褐色を呈す。066は朝鮮陶器壺で484(第32図)と同一個体である。067～072は土師坏である。067・068はヘラ切り、069～071はヘラ切りで板状圧痕が残る。072は糸切りである。073～081は土師皿で073は切り離し後ナデを施す。074はヘラ切り、075～081は糸切りで077～081は板状圧痕が残る。082～084は弥生時代前期の土器で082が大型壺口縁、083は壺底部、084は壺もしくは甕底部である。

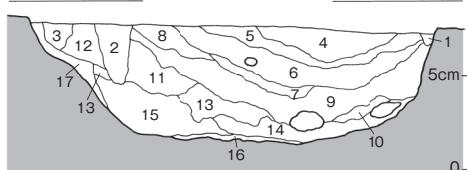
SD098(第11図 SD099・144) SD086の北側に位置する東西方向の溝でわずかに弧を描く。攪乱に3分割されたのを、SD099、SD144としたが本来は1本の溝である。長さ8m、幅80cm、深さ35cmを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は暗茶褐色～黒褐色で陶器片、土師椀、土師坏、鉄滓等が出土した。

#### 4) 土坑・その他

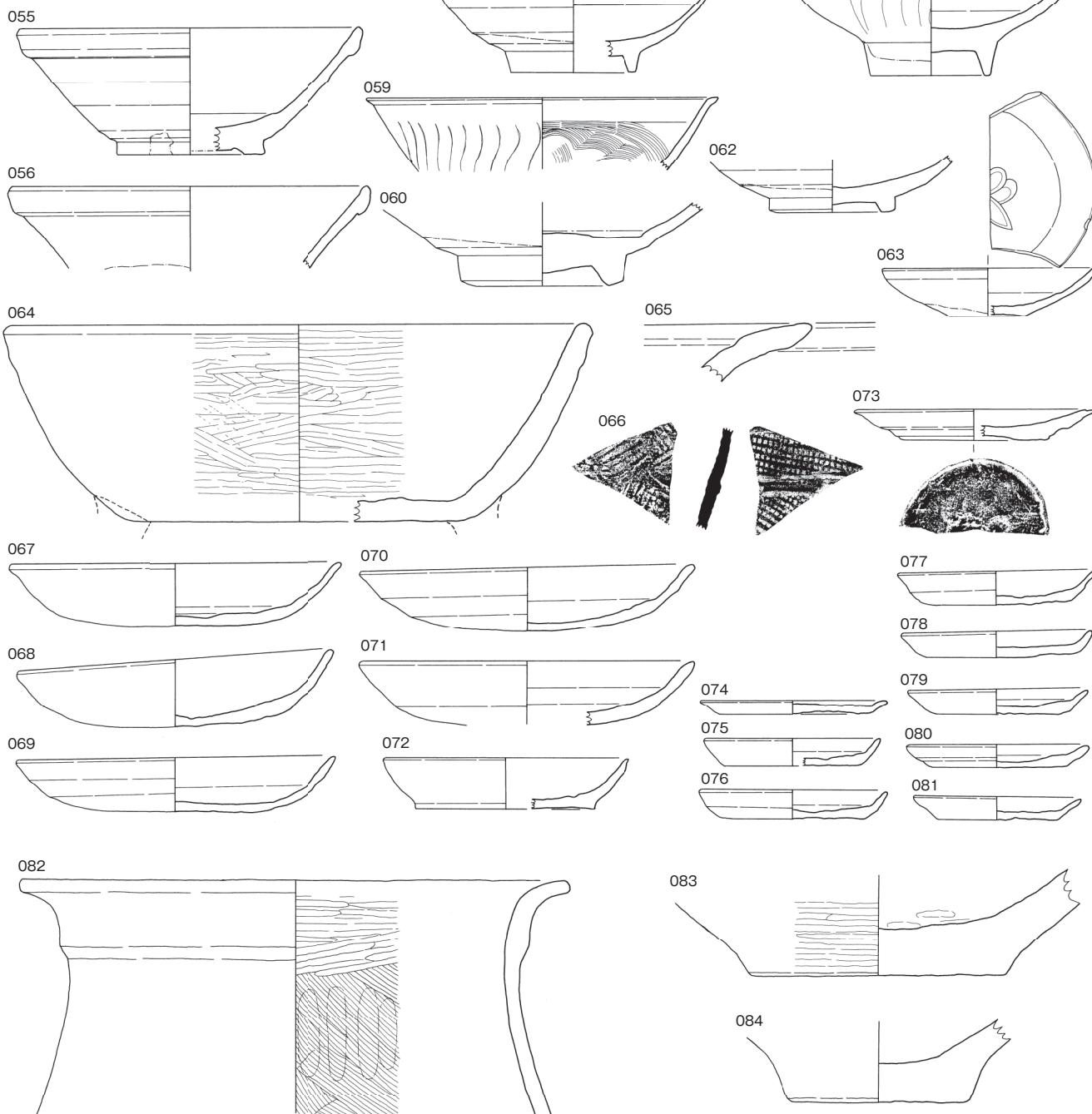
SK096(第11図) 調査区中央西寄りに位置し、遺構の南半をSD086に切られる。平面形は方形と推定され、現状で東西80cm、南北85cm、深さ39cmを測る。埋土は黒色で、糸切りの土師坏が出土した。SP091(第11図) 調査区の南東部に位置する。SC080を切る柱穴状遺構で長径23cm、深さ12cmを測る。底面近くで糸切りの土師坏が出土した。

SC086(S=1/40)

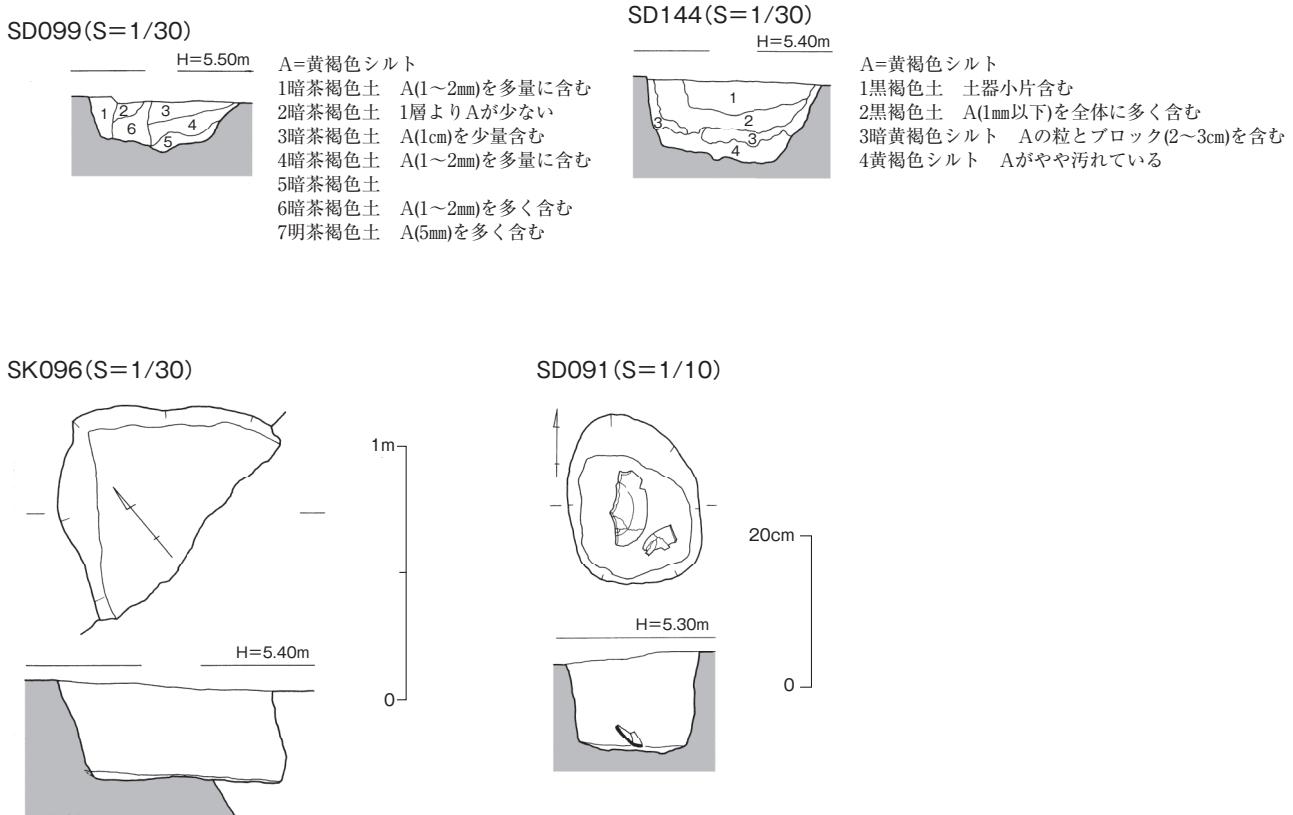
H=5.40m



- A=黄褐色シルト  
1黄褐色シルト  
2黒褐色土 A(径5mm)を少量含む  
3褐色シルト  
4黄褐色シルト  
5暗茶褐色土  
6黒褐色土 小礫を全体的に含む  
7暗褐色土  
8暗茶褐色土 土器片含む  
9暗茶褐色土 A(0.5~3cm)を層理状に多く含む  
10黄褐色シルト  
11黒褐色土 A(1cm)を右下がりの層理状に含む  
12褐色土 Aを少數含む  
13黄褐色シルト  
14黄褐色土 Aを少量含む  
15暗茶褐色土 Aを少量右下がりの層理状に含む  
16暗黄褐色シルト Aがやや黒ずむ  
17灰褐色土 Aのブロックを含む



第10図 SD086遺構・遺物実測図(1/40・1/3)



第11図 その他遺構実測図(1/30・1/10)

### 3. II区の調査

#### 1 弥生時代の遺物

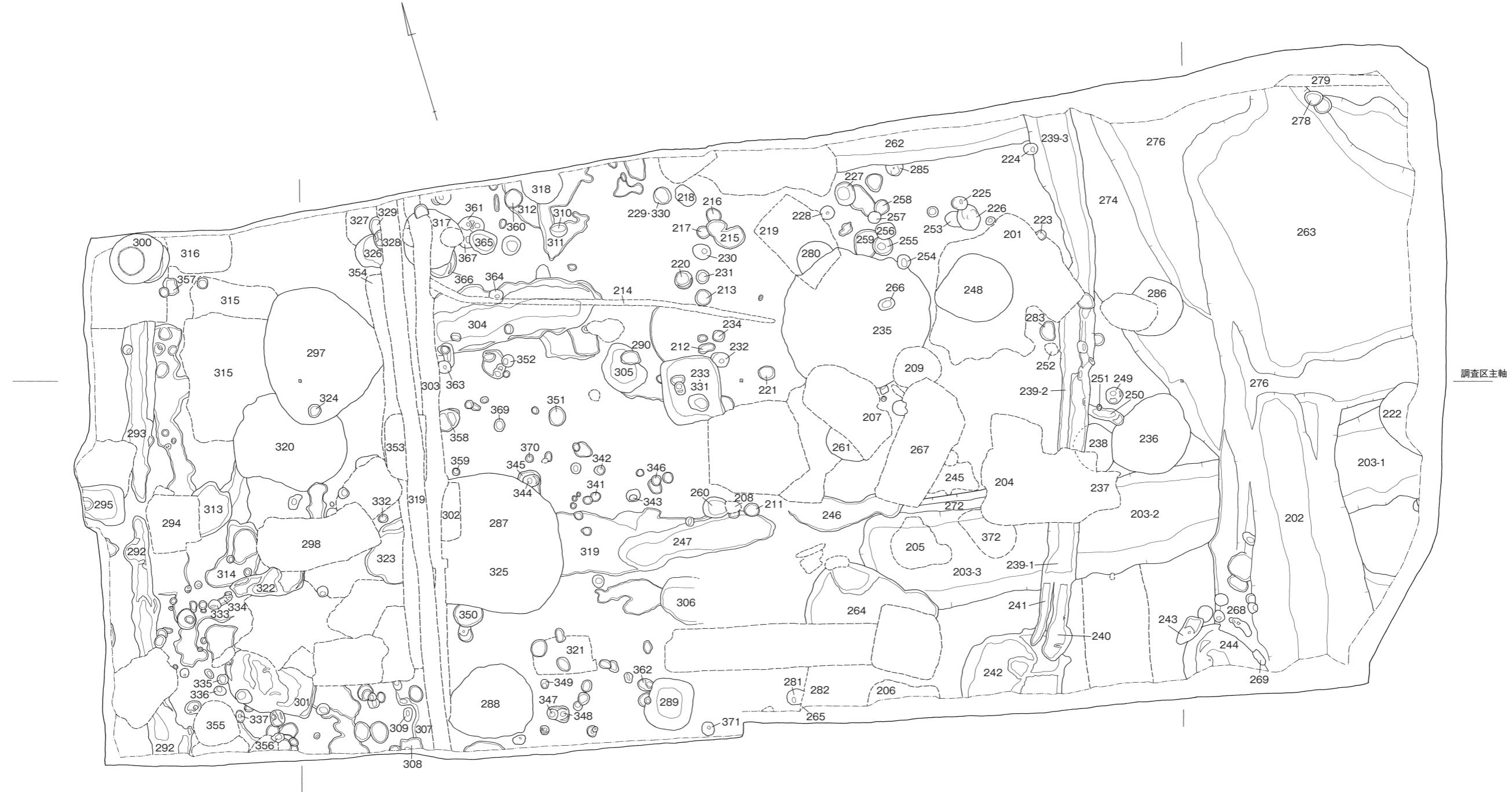
II区では弥生時代の確実な遺構を確認することはできなかった。土器、石器等の遺物は後世の遺構から数多く出土しているため I 区同様に遺構が存在したものの、後世の開発により消失したものと思われる。今回は古代末～中世で報告する遺構から出土した分に関してはその遺構から出土した遺物と一緒に記載したが、その他の遺構や包含層から出土した分に関しては 25 年度に報告する予定である。

#### 2 古代末から中世の遺構と遺物

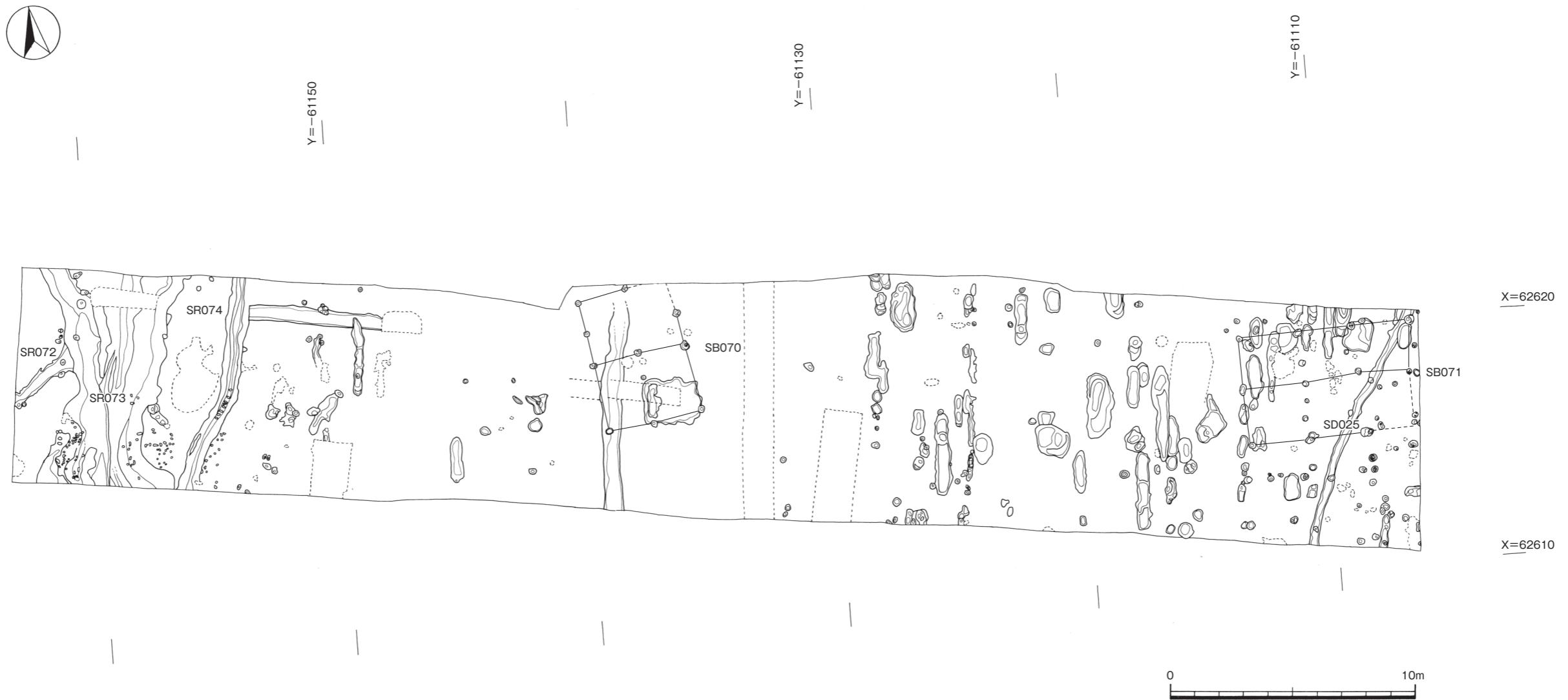
1) 井戸 古代末～中世にかけての井戸を 11 基確認した。このうち SE325 は遺構検出面では SE287 との間に明確な切り合いが見られたものの、掘り下げた結果井戸枠が確認できなかったため SE287 と同一の遺構として報告する。

SE235(第 13 図) 調査区中央に位置する。掘方は円形で径 3.5 m を測る。検出面から 80cm 下で平坦面を作りそれから 1.3 m 程掘り下げている。井筒は 1 段目は完全に残り、2 段目は下端部のみ遺存する。1 段目は径 55cm、高さ 101cm を測る。下端から 12cm、55cm、73cm の高さに箍があり、一番上の箍に 2 段目の井筒が乗る。井筒の材は杉を使用している。時期は 12 世紀中頃から後半か。出土遺物(第 15 図 085～096)。085・086 は曲物の側板、087 は底板で井筒から出土した。085・086 は内側に刃物で切目を入れている。088～092 は掘方から出土した。088 は龍泉窯系青磁碗 II 類、089 は白磁の合子である。090 は土師壺で糸切り後板状圧痕が残る。092 は土師皿でヘラ切り、板状圧痕が残る。092 は須恵器壺である。093～096 は井筒内出土である。093 は龍泉窯系青磁碗、094 は須恵質鉢、095・096 は土師器壺で糸切りである。

SE236(第 13 図) 調査区東側に位置する。SD203 を切る。平面は東西に長い楕円形を呈し、長径 198cm、深さ 132cm を測る。検出面から 60cm 程は断面逆台形に窄まり、それからは垂直に 75cm 程掘り下げてい



第12図 II区遺構配置図(1/100)



第38図 30次調査遺構配置図(1/200)

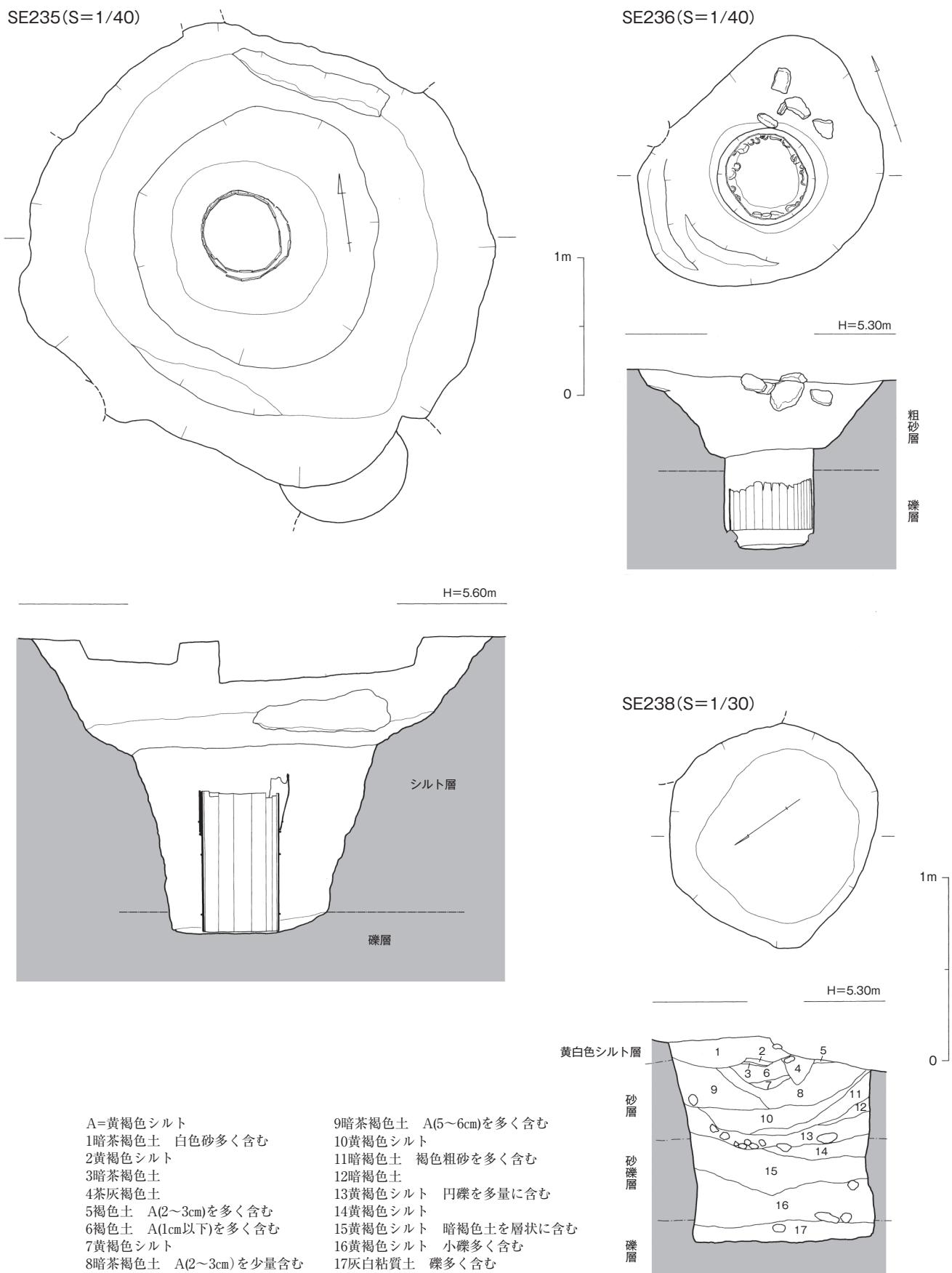
る。井筒は径 60cm 程で 1 段目下半の 35cm が遺存していた。礫層の礫を掘り残してその上に井筒を乗せている。時期は 12 世紀中～後半頃と思われる。出土遺物(第 15 図 097)は土師壺で掘方から出土した。口径 15.4cm を測り、糸切りで板状圧痕がある。青磁碗片の他、白磁碗や皿の小片、瓦器椀等が出土したがいずれも小片である。

SE238(第 13 図) 調査区東側に位置し、SE236 に切られる。平面形は円形を呈し、径 112cm、深さ 113cm を測る。井筒の痕跡は見られず、素堀と推定される。遺物は少ないが 11 世紀前半頃か。出土遺物(第 15 図 098)。098 は土師皿である。ヘラ切り後にナデを施す。

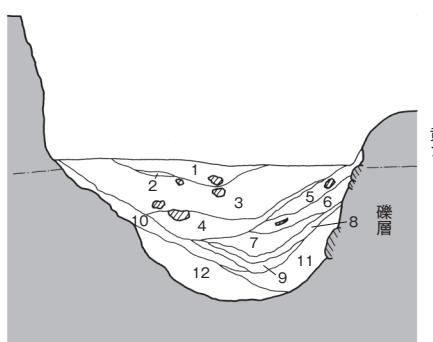
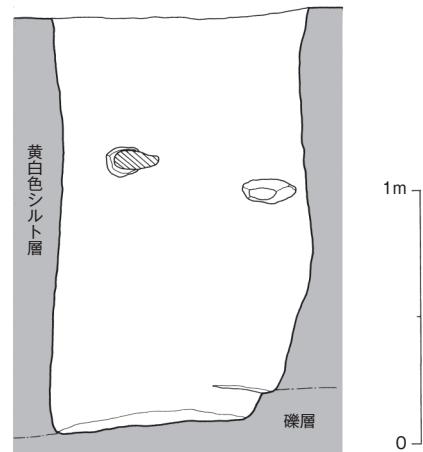
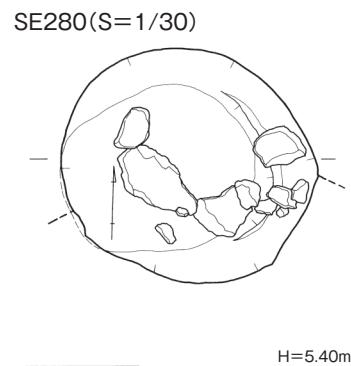
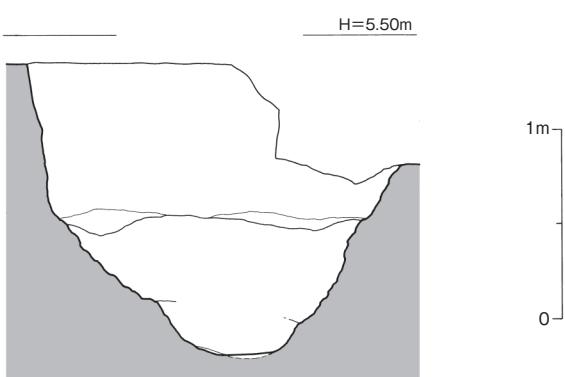
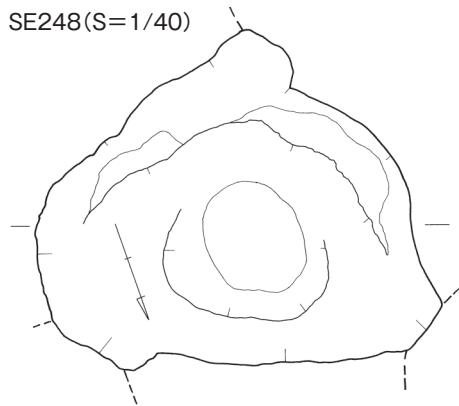
SE248(第 14 図) SE235 の東側に隣接する。攪乱の削平を受けているが元は径 2.5 m 以上の円形で、深さ 155cm を測る。検出面から 80cm 程下に平坦面がある。井筒の痕跡は見られず、素堀と推定される。12 世紀中頃か。出土遺物(第 15 図 101～106)。101 は白磁碗、102 は須恵器の底部である。103 は瓦器椀で内面にミガキを施す。104～105 は土師皿である。104 と 105 はヘラ切り後に指で底部を若干押し出し、その後ナデを施す。106 は糸切りで板状圧痕が残る。

SE280(第 14 図) 調査区中央部に位置し、SE235 に切られる。平面は円形で径 1 m、深さ 168cm を測る。井筒の痕跡は無く素堀である。出土した遺物は少なく、いずれも小片である。白磁などの貿易陶磁や糸切りの土師壺、皿を含まず 11 世紀後半以前と思われる。出土遺物(第 15 図 107)は土師椀の底部で高台の痕跡が残る。内面に文字を線刻している。文字は『連(むらじ)』の上半部と思われる。

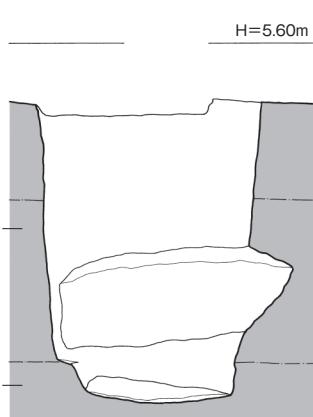
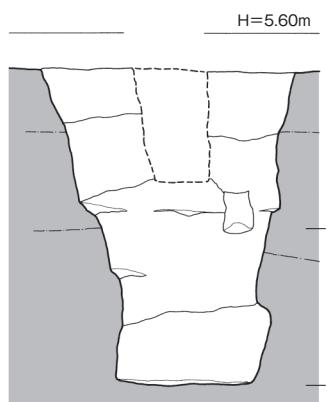
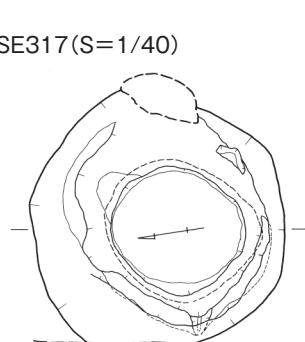
SE287・325(第 16 図) 調査区中央西寄りに位置する。検出時に切り合いから南北に 2 基が並んでいるように見え、北側の新しい井戸を 287、南側の古い井戸を 325 と名付けたが、287 の完掘後に 325 を掘り下げたところ井筒があった痕跡が見られず、検出面から 80cm 下の平坦面も連続していたため 1 基として報告する。遺物は 325 が白磁碗の V 類や青磁片を含まず、若干古い様相を示す。平面形は南北に長い楕円形で長径 3.6 m、深さ 1.7 m を測る。井筒は一辺 90cm の方形を呈し、4 隅に径 10cm 程の柱を立ててから臍孔に横棒を通し、側板を 2 重に打ち込んだもので、現状では下端から高さ 80cm 程遺存している。検出時は土圧のため上側の側板や横棒が多く崩落し、井筒内が埋まった状態であった。上側から崩落した部材を取り除いたのが第 19 図(図版 5-5)で東側の側板が横棒の上で折れて井筒内に倒れ込んでいる。12 世紀中頃～後半頃か。出土遺物(第 16～24 図 108～210)。108 から 157 は井筒上端より上層で出土した。108～110 は越州窯系青磁碗である。111 は白磁皿 IV-2 類、112～115 は白磁碗である。116 は陶器鉢底部、117 は陶器鉢口縁、118 は陶器甕である。119・120 は須恵器甕胴部、121 は黒色 B 類碗、122～127 は瓦器椀である。128～130 は瓦器皿、131～135 は土師壺で、131 はヘラ切り後ナデ、132～136 もヘラ切りで 133～135 は板状圧痕が残る。136～146 は土師皿である。136 はヘラ切りで板状圧痕が残り、137～146 は糸切りで 141～146 は板状圧痕が残る。147 は土師質で断面が円形の真っ直ぐな棒に粘土を巻き付け、ナデを施す。180 に似る。孔は器内まで突き抜けており、大型器台の脚である。148 は土師質の壺蓋、149 は須恵質の風字硯である。削り出しの低い脚が付く。150 は滑石製石鍋、151・152 は須恵質の平瓦で 151 は斜格子のタタキ、152 は縄目のタタキを施す。153 は土錘である。長さ 4.7cm、径 1.6cm を測る。155～157 は弥生時代の甕である。158～174 は井筒内から出土した。158 は白磁碗、159・160 は土師壺で底部は糸切りで板状圧痕が残る。160 は外面全体と内面口縁に煤が付着している。161～164 は土師皿で 161 はヘラ切り、162～164 は糸切りで 163・164 は板状圧痕が残る。165～168 は土錘である。165 は長さ 4.7cm、径 1.1cm、166 は長さ 4.2cm、径 0.9cm を測る。169 は棒状土製品である。170・171 は須恵質の瓦で縄目タタキを施す。172 は滑石で石鍋の再加工品である。温石石か。173・174 は木製品で 173 は取手状を呈す。用途は不明である。174 は板状を呈し、長さ 28.5cm、幅 3.6cm、厚さ 2～4mm を測る。井筒の横木と側板に挟まれて出



第13図 井戸遺構実測図1(1/40・1/30)

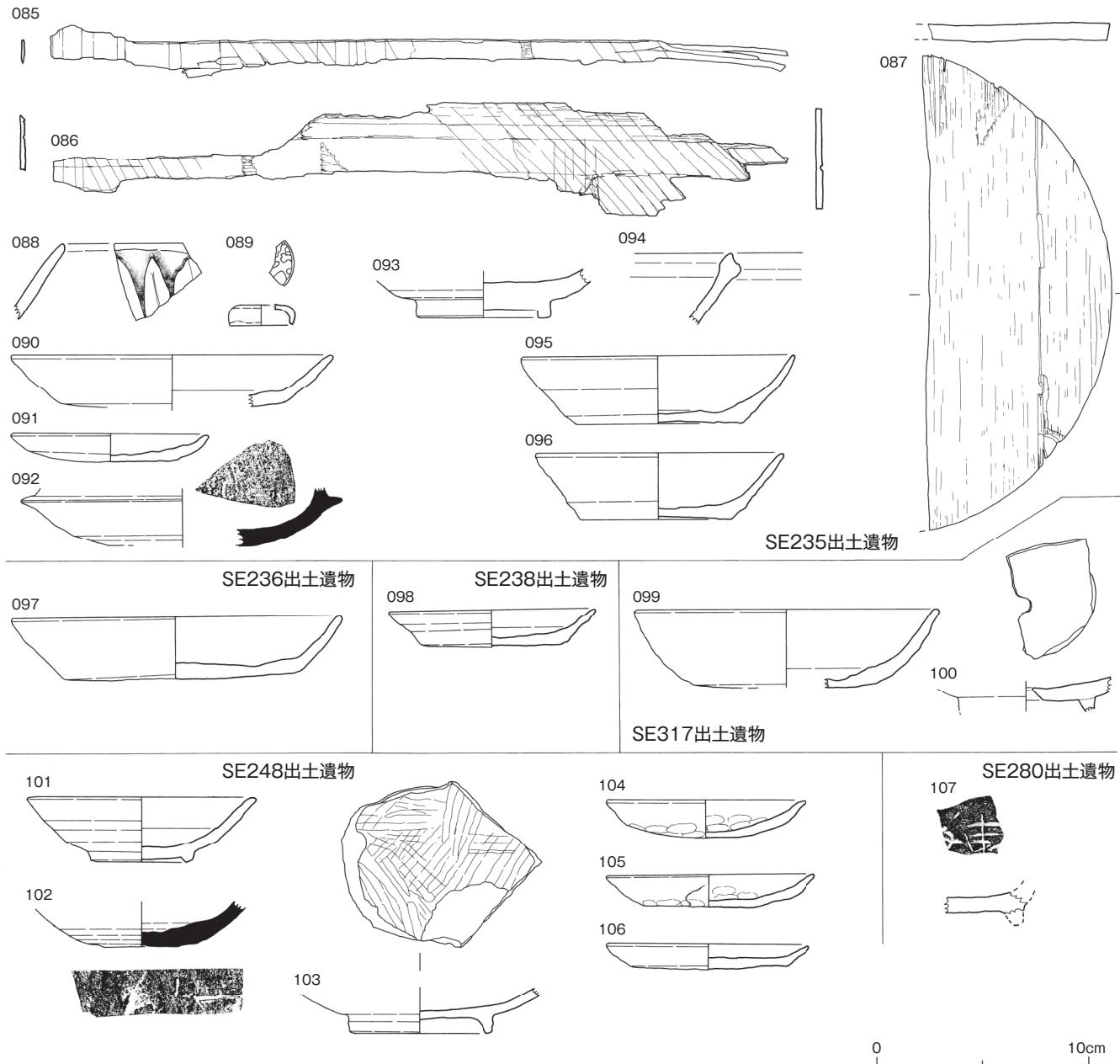


- A=黄褐色シルト  
 1茶灰褐色土 Aと炭化物含む  
 2茶褐色土 A(1cm以下)を多量に含む  
 3茶灰褐色土 A(2~3mm)を少量含む 土器片多い  
 4暗灰褐色粘質土  
 5茶灰褐色土  
 6灰褐色粘質土  
 7黒褐色土 白色砂を多量に含む  
 8灰白色粗砂  
 9灰色粘質土  
 10暗灰色粘質土  
 11黑褐色土 植物片を少量含む  
 12暗灰色土 小礫多く含む



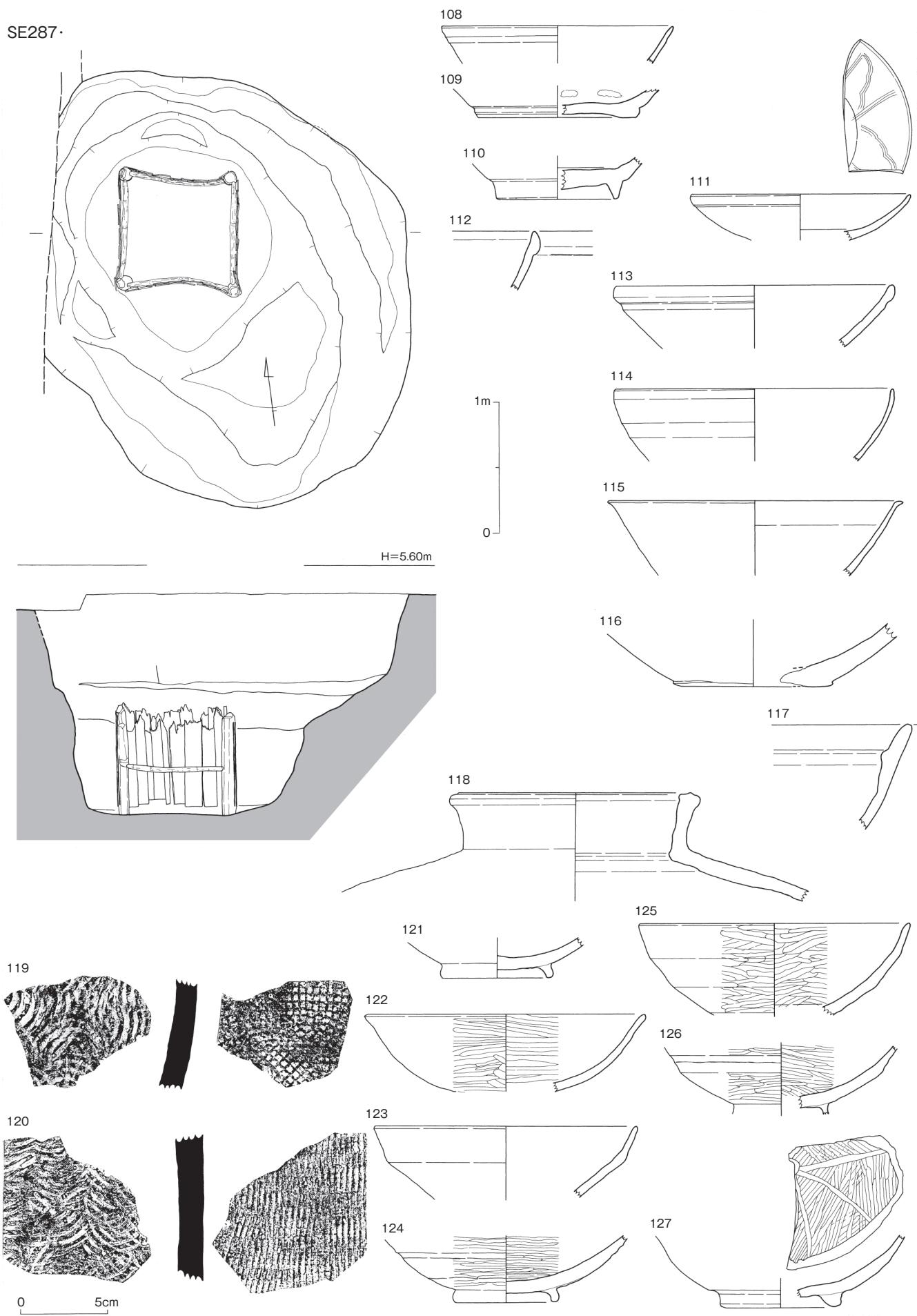
0 1m

第14図 井戸遺構実測図2(1/40・1/30)

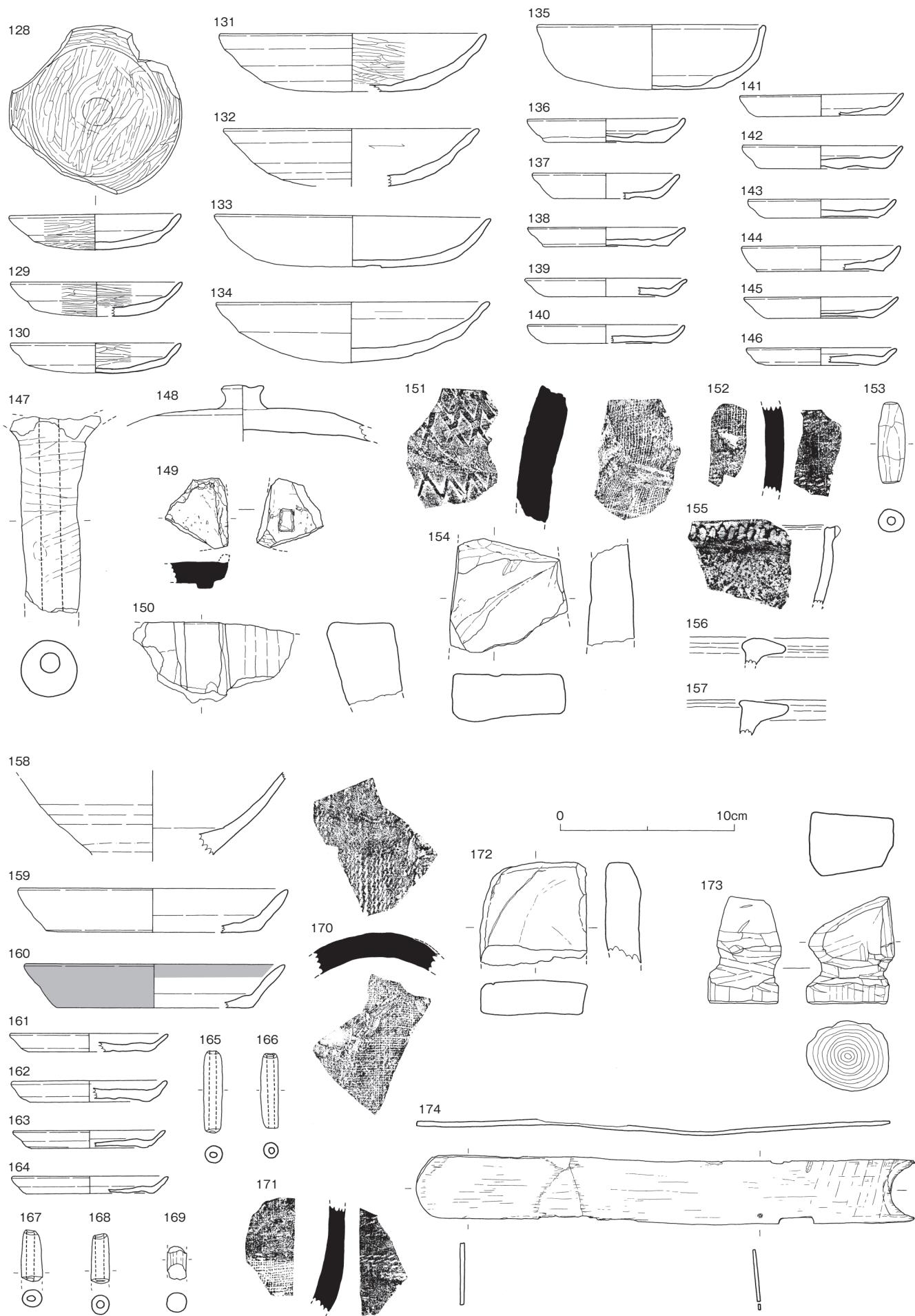


第15図 井戸出土遺物実測図(1/3)

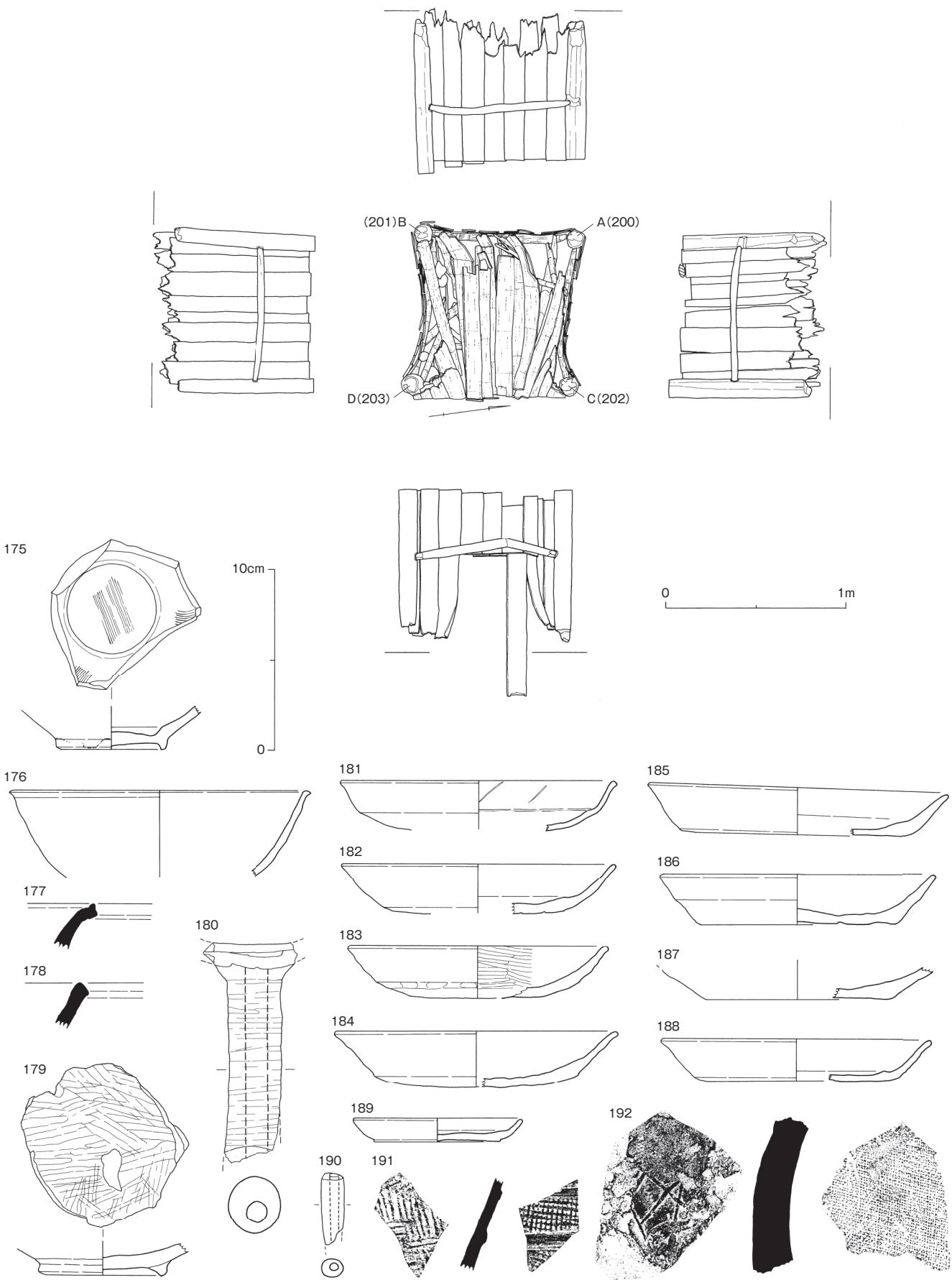
土した。端部は同型の凹凸があり、途中に釘孔と長辺の縁に一部凹みがある。輪にすると凹凸が合わさるため、曲げ物の籠のように卷いて使用したものと思われる。175～192は井筒掘方から出土した。175・176は白磁碗、177・178は須恵器甕口縁である。179は瓦質椀、180は147と同様の土師質で断面円形の棒に粘土を巻き付け横方向のナデを施す。181～188は土師坏である。181はヘラ切りで板状圧痕の上からナデを施す。182～184はヘラ切りで184は板状圧痕が残る。185～188は糸切りで板状圧痕が残る。189は土師皿で底部は糸切り、板状圧痕が残る。190は土錘、191は朝鮮陶器壺で484(第32図)と同一個体の可能性が高い。192は須恵質の平瓦である。凸面に斜格子のタタキを施す。193～195は井戸枠の側板である。193は完形で長さ83.7cm、幅9.5cm、幅1.2～1.4cmを測る。193は上側端部に方形の、195は同じく上側端部に横長の長方形の臍孔があり、建築材を再利用したものと思われる。板材は年輪に沿って割ったもので、表面に凹凸が多くみられる。196～199はSE325から出土した木片である。196～198は刀子による切り込みが見られ、196は平行線、197・198は平行線の



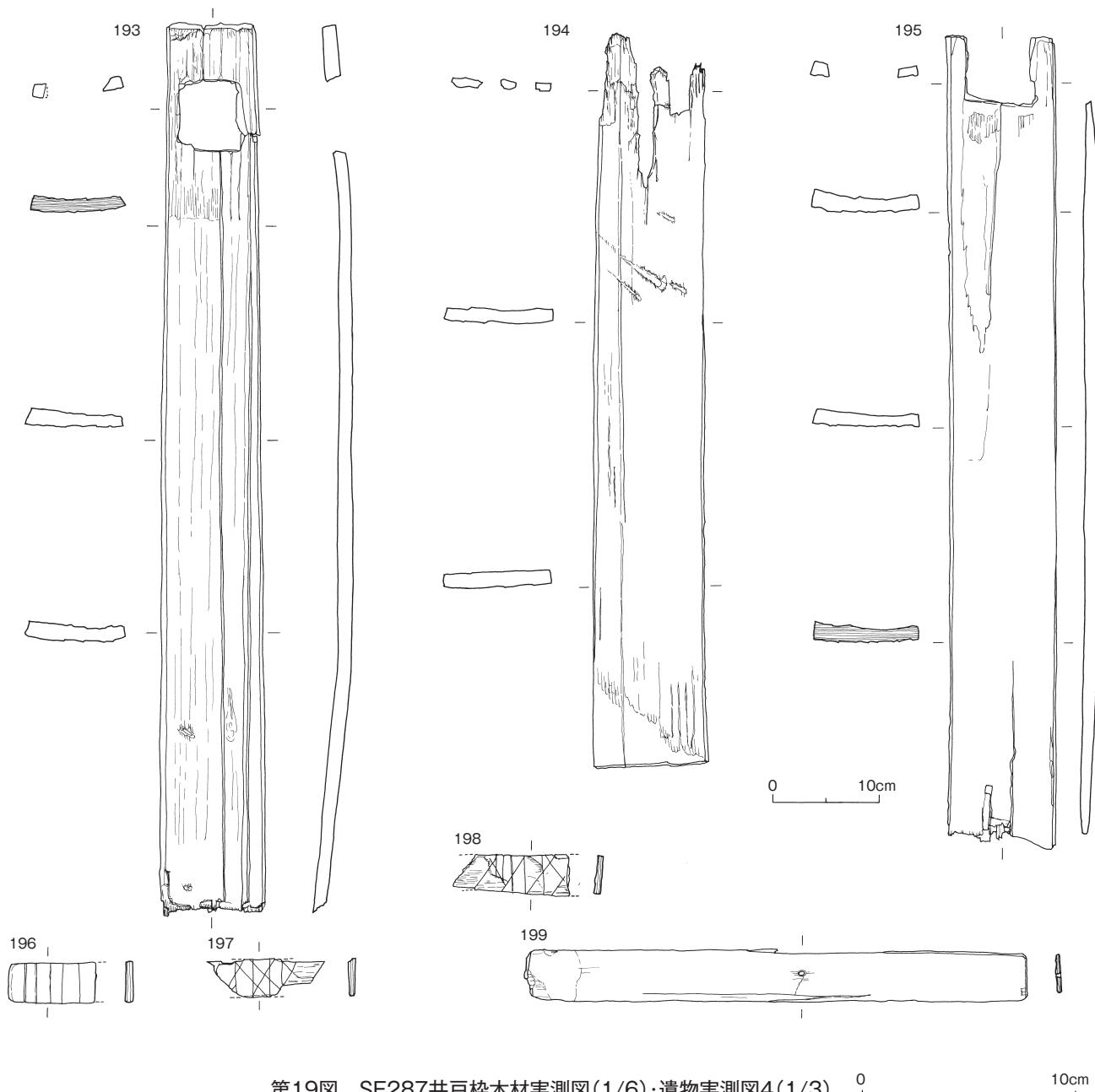
第16図 SE287遺構実測図・遺物実測図1(1/40・1/3)



第17図 SE287遺物実測図2(1/3)



第18図 SE287井筒実測図(1/30)・遺物実測図3(1/3)

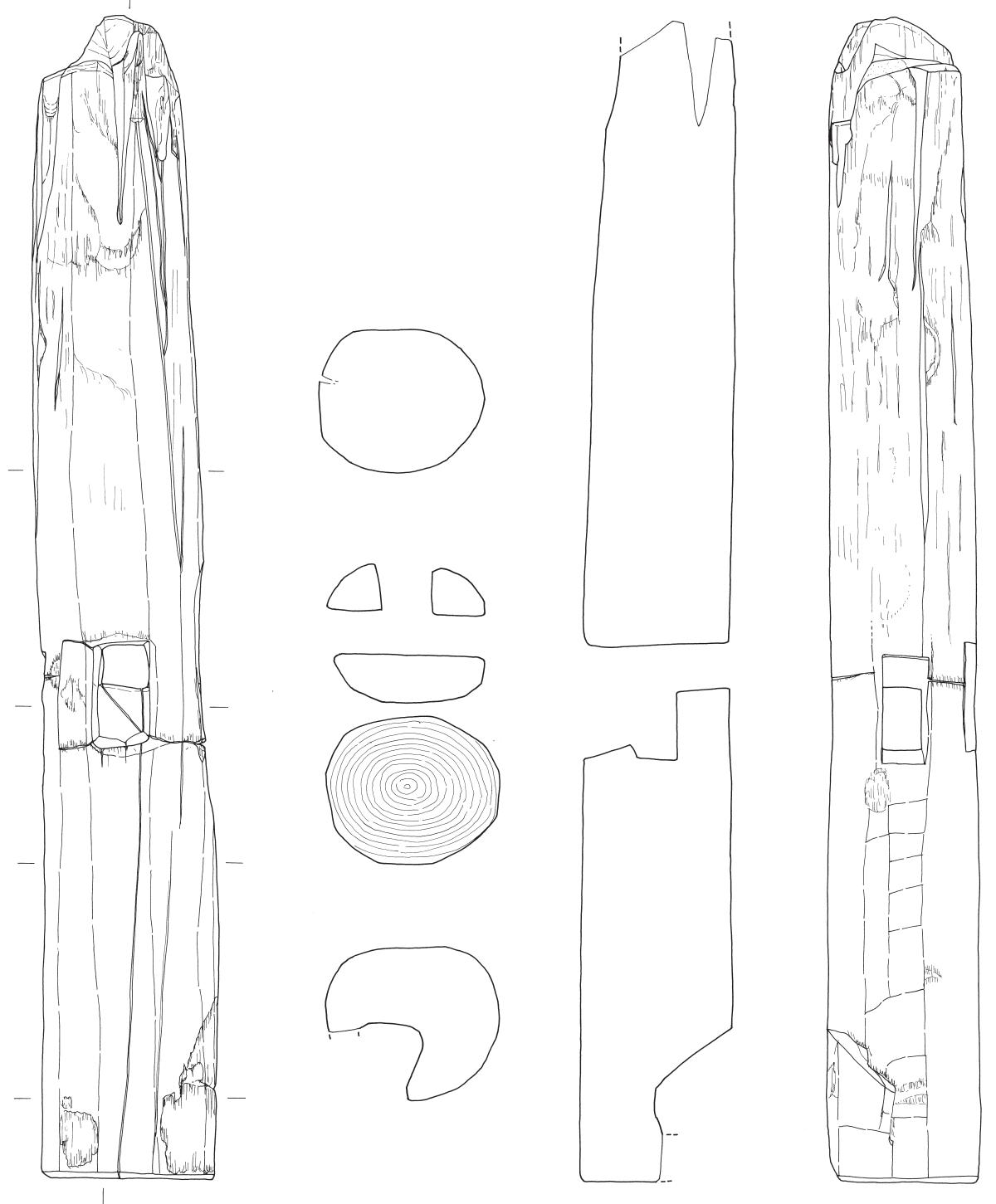


第19図 SE287井戸枠木材実測図(1/6)・遺物実測図4(1/3) 0 10cm

他に斜格子の切り込みが入る。199は長さ23.5cm、幅2.3cm、厚さ2mmを測る。釘孔が1カ所開いている。200～203は井筒の柱である。203はほぼ全面に加工痕が見られるが、他の3本は未加工のまま表面が一部残る。200は北西隅、201は南西隅、202は北東隅、203は南東隅の柱で横木を差し込む臍孔が開く。臍孔は柱を貫通しており、横木の先端は柱から突き出していた。横木は南北方向に比べ東西方向が一段低い。それぞれの臍孔は柱内で繋がっており、横木同士が押し合って抜けにくくなっている。ただ臍孔が大きくなり柱が構造的に弱いためか、調査時には4本とも1段目の横木の臍孔から約40cm上の2段目の臍孔の部分で折れて出土した。204～210は横木で204は完形で長さ1mを測る。第24図の断面で細い線で囲んだ部分が人為的な加工部分である。両端の一部のみ加工したものが多い。

SE297(第25図) 調査区西側に位置し、SE320に切られる。平面は東西に長い楕円形を呈し、長径246cm、深さ145cmを測る。掘方下端は礫層に達する。検出面から60～100cm前後に多くの平坦面を持ち、複雑な掘方を呈す。平坦面からの掘方は楕円形を呈す。井筒は残っていなかったが、井戸廃棄時に抜い

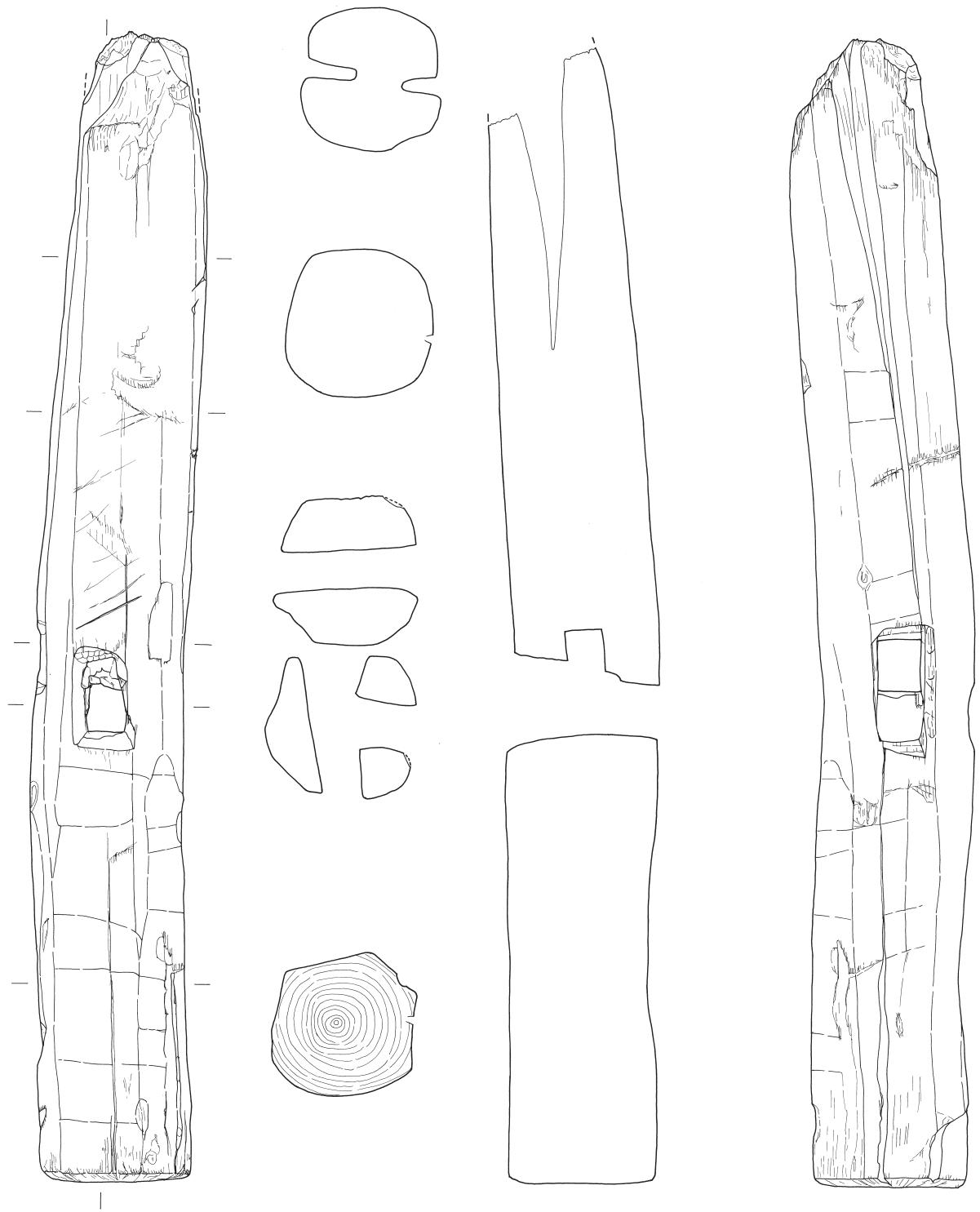
200(A)



0 10cm

第20図 SE287井戸柱実測図1(1/4)

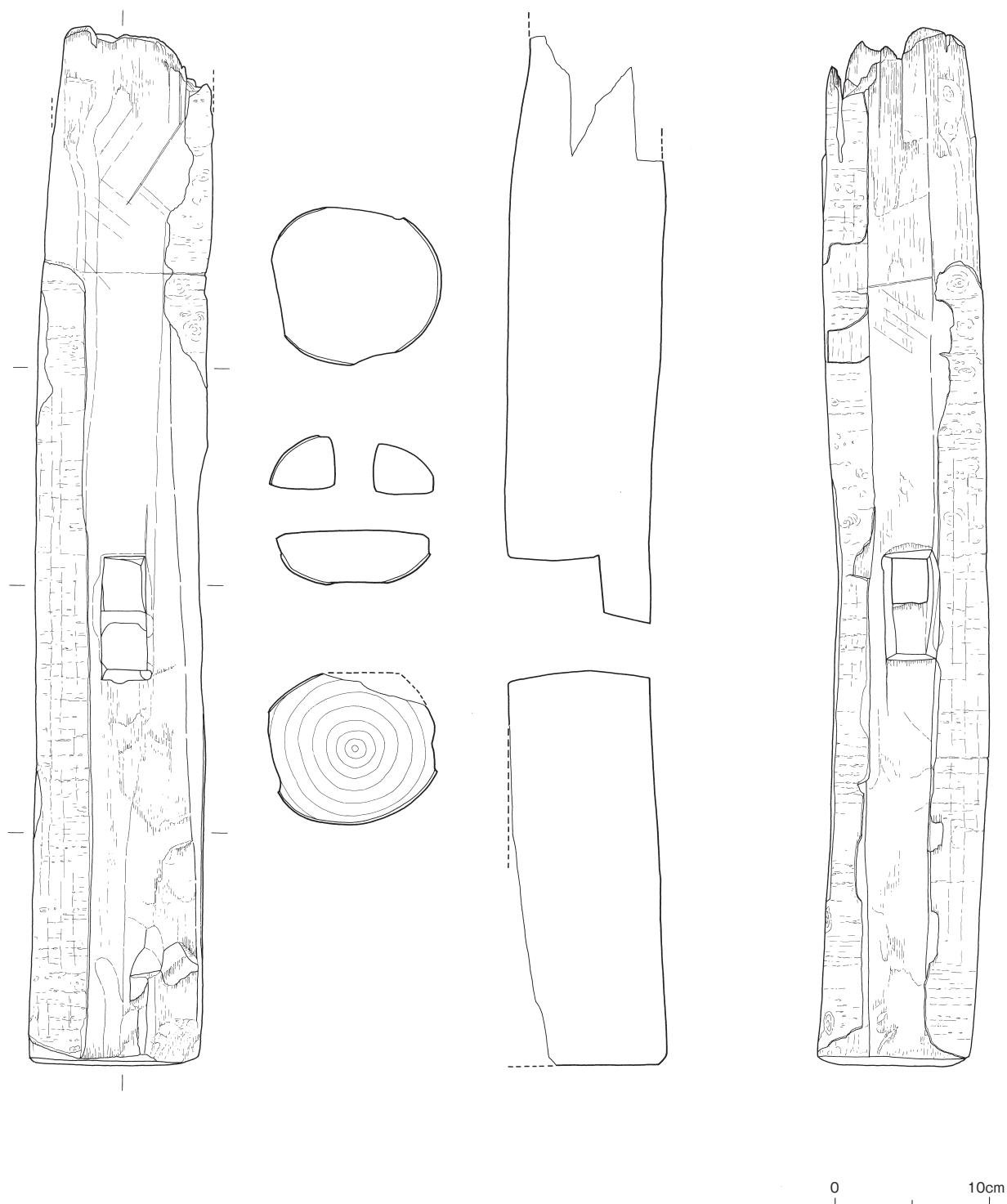
201(B)



0 10cm

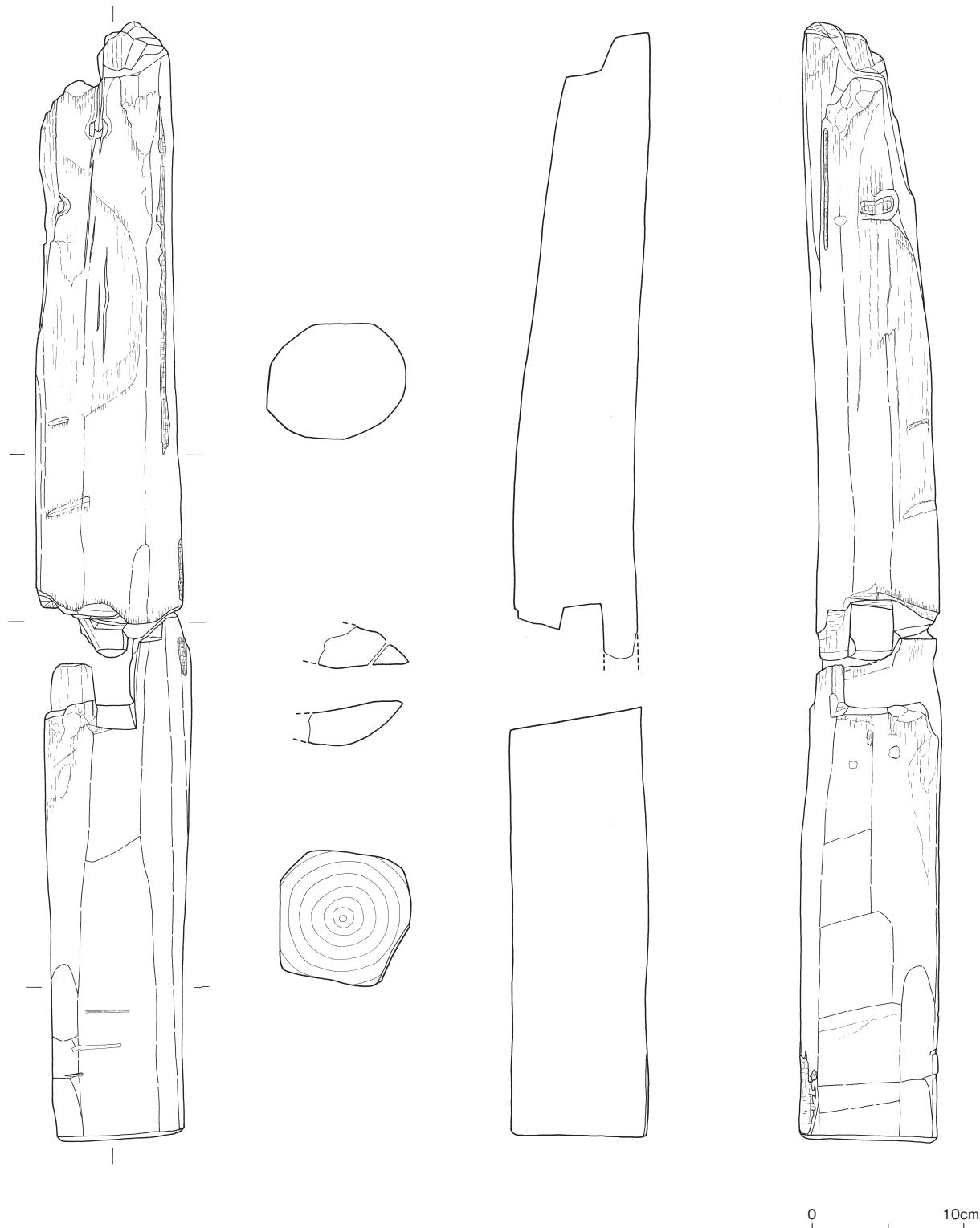
第21図 SE287井戸柱実測図2(1/4)

202(C)

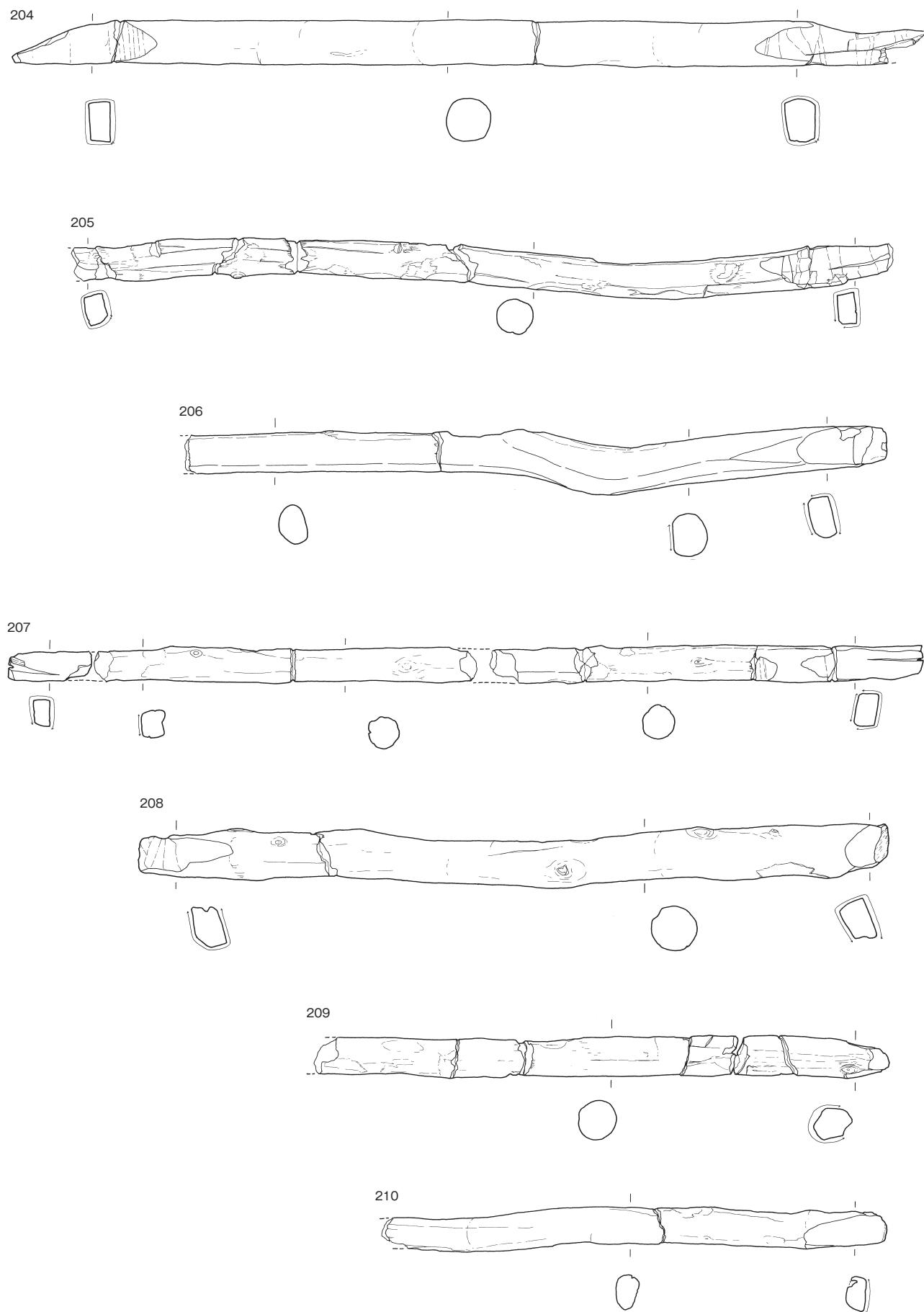


第22図 SE287井戸柱実測図3(1/4)

203(D)



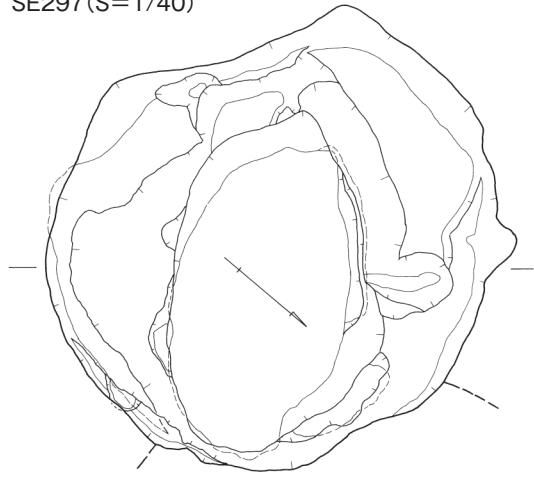
第23図 SE287井戸柱実測図4(1/4)



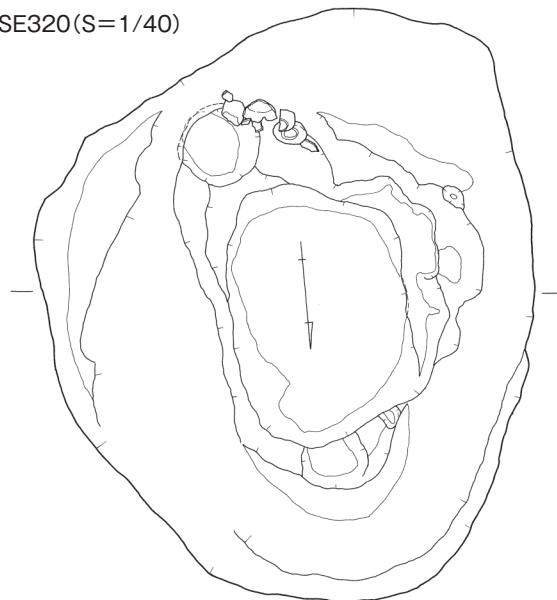
※矢印の範囲は加工部分を表す

第24図 SE287井戸枠横木実測図(1/6)

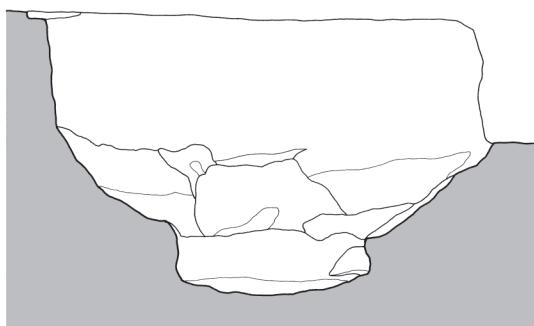
SE297(S=1/40)



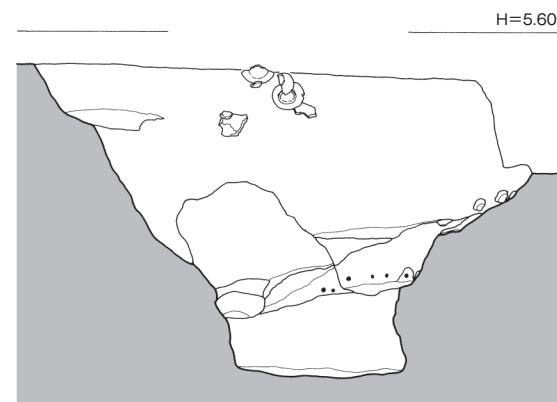
SE320(S=1/40)



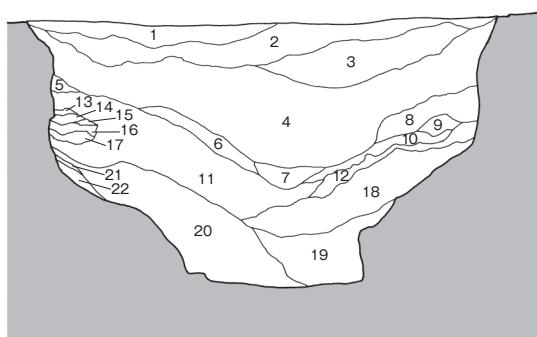
H=5.60m



H=5.60m



H=5.60m



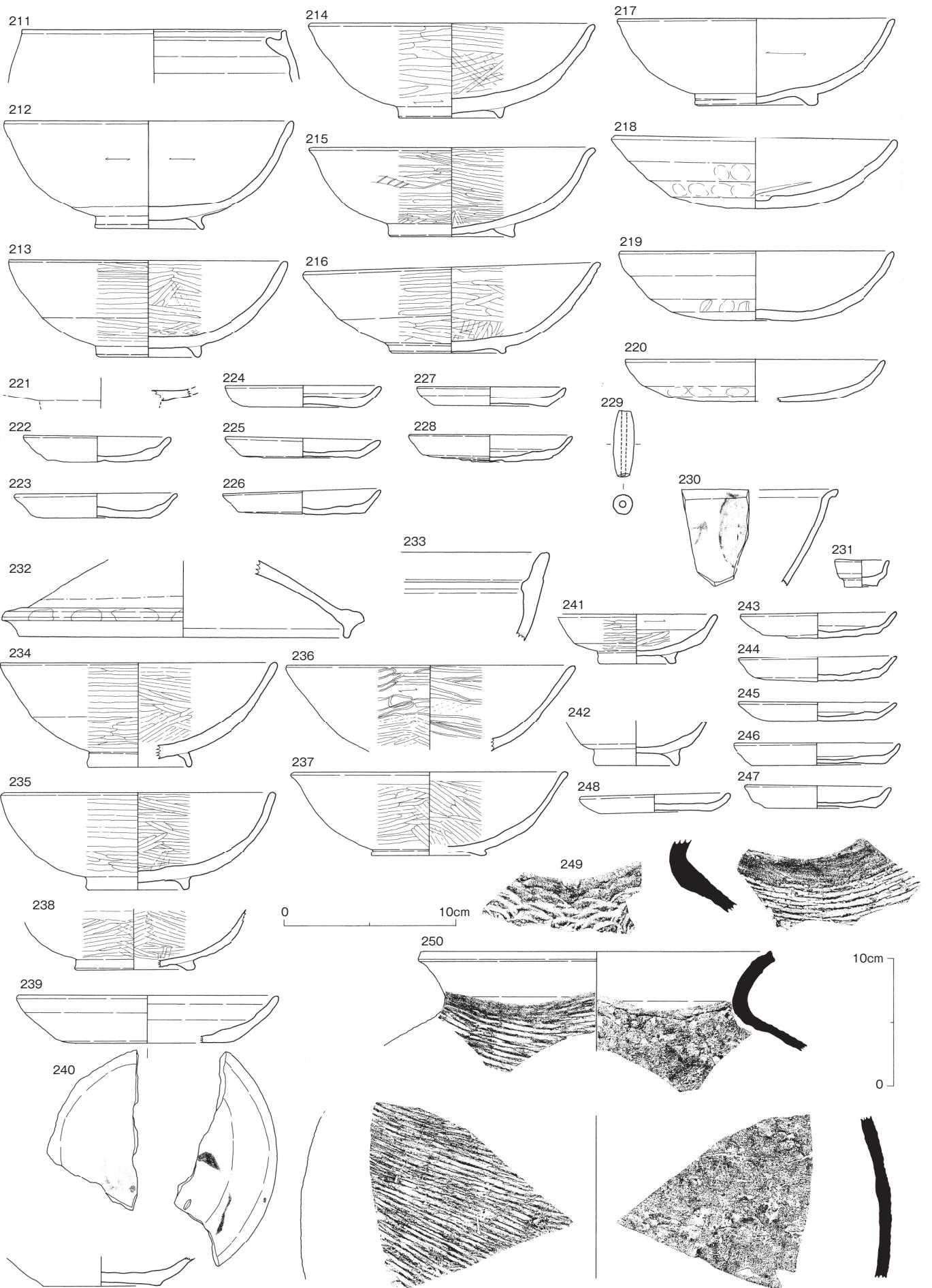
SE297 A=黄褐色シルト  
 1暗茶褐色土 白色砂を多く含む  
 2茶褐色土 A(2~15cm)と白色砂を多く含む  
 3茶褐色土 白色砂(多量)と炭化物(少量)を含む  
 4茶灰褐色土 A(2~5cm)をレンズ状に含む  
 5黑褐色土  
 6灰褐色土 A(2~7cm)を少量含む  
 7灰褐色土 A(1~5cm)を少量、白色砂を多量に含む  
 8黑褐色土 黑褐色土ブロックを含む  
 9褐色土

10灰褐色土 A(5mm)と白色砂を多く含む  
 11灰茶褐色土 白色砂多く含む 堆積は右下がり  
 12黑褐色土 13 黑褐色土 14 暗褐色土  
 15 黑褐色土 16 暗褐色土 17 黑褐色土  
 18茶褐色土 A(0.5~4cm)と白色砂を少量含む 堆積は左下がり  
 19暗灰色粘土 青灰色粘質土ブロック含む  
 20暗灰色粘土 青灰色粘質土ブロック(1cm)を少量含む  
 21黄褐色シルト  
 22黑褐色土

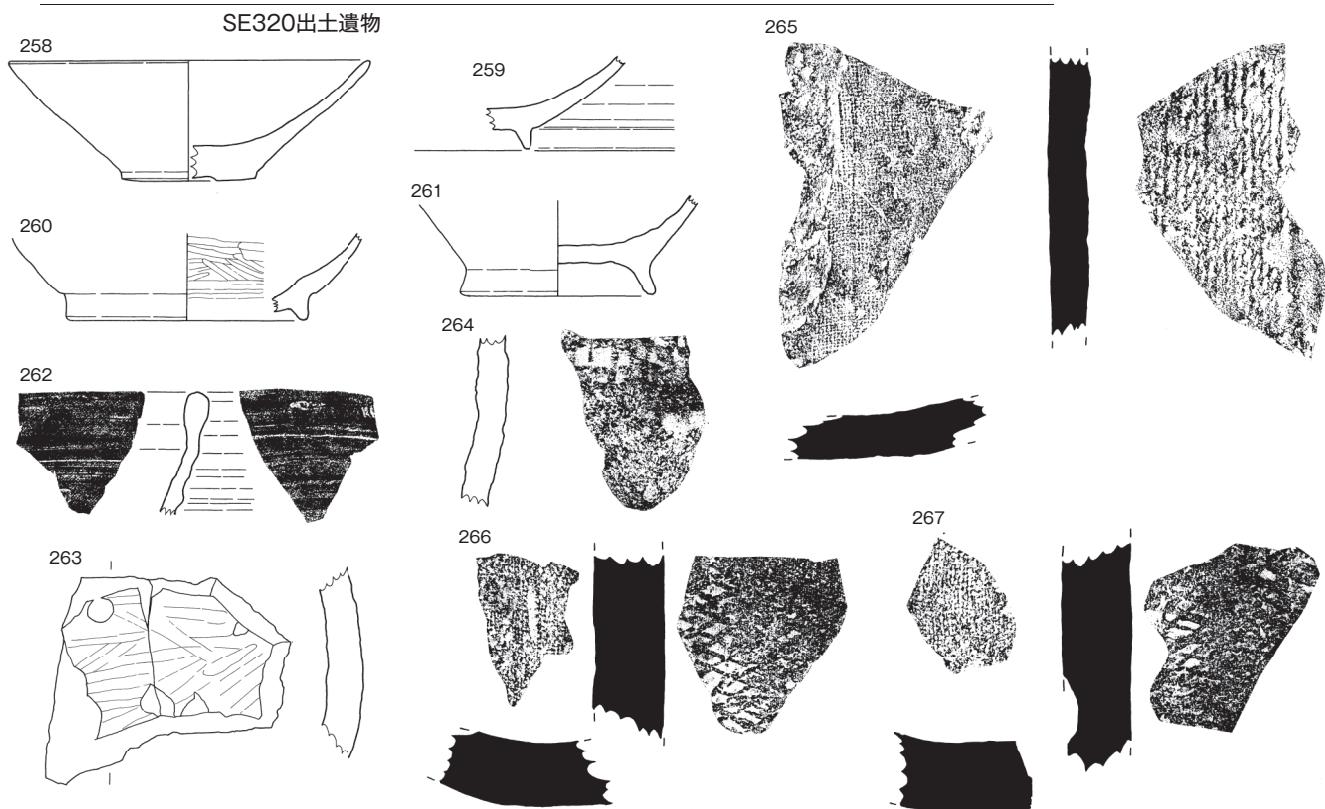
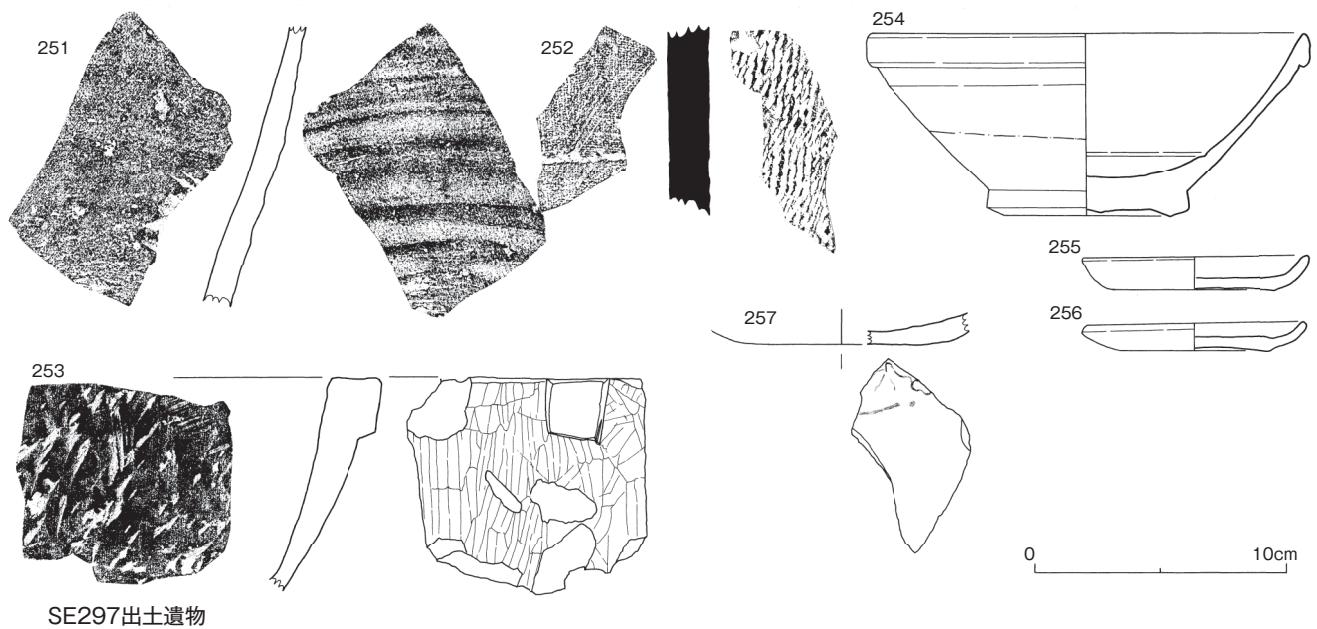
SE320 A=黄褐色シルト  
 1暗茶褐色土 炭化物小片を全体に含む  
 2暗茶褐色土 白色砂とA小ブロックを多く含む  
 3暗茶褐色土 Aを右下がりの層理状に含む  
 4暗褐色土 A小ブロックと砂を多く含む  
 5暗褐色土 粗砂とAを少量含む  
 6暗灰色粘土 青灰色粘質土ブロックを少量含む  
 7暗灰茶褐色土 A(5cm)と白色砂を含む 6層より灰色が強い  
 8暗灰褐色土 青灰シルトを少量含む  
 9暗灰褐色土 砂を多く含む  
 10青灰粘土  
 11黑褐色土 青灰シルトブロックを少量含む  
 12黑褐色土 粗砂を多量に含む  
 13黑褐色粘質土  
 14暗褐色土

0 1m

第25図 SE297・SE320遺構実測図(1/40)



第26図 SE297遺物実測図1(1/3・1/4)



第27図 SE297・SE320遺物実測図(1/3)

たものと思われる。出土遺物等から12世紀中頃と考えられる。出土遺物(第26・27図 211~256)。211~229は平坦面から上で出土した。211は陶器甕、212~216は瓦器椀、217は土師椀である。218~220は土師坏で、底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。221は緑釉陶器である。小片であるが高台付の皿である。222~228は土師皿で222と223はヘラ切りで板状圧痕が残る。224~228は糸切りで板状圧痕が残る。229は土錘である。長さ3.7cm、径1.1cmを測る。230~253は平坦面より下の井筒掘方で出土した。230は白磁碗、231は白磁の蓋で径3.2cmを測る。232は陶器蓋、233は陶器鉢口縁である。234~237は瓦器椀、238は土師椀、239・240は土師坏で239は底部切り離し後ナデを施す。

板状圧痕が残る。240は糸切りで内底部に墨痕が残る。241・242は高台付の瓦器皿である。243～248は土師皿で243から245はヘラ切りで板状圧痕が残る。246～248は糸切りで、248は板状圧痕が残る。249・250須恵器甕である。外面全体に密な平行タタキを施す。251は須恵質の甕もしくは瓶である。252は須恵質の平瓦である。縄目のタタキを施す。253は滑石製の石鍋である。254～256は井筒内から出土した。254は白磁碗IV類、255・256は土師皿である。底部は糸切りで板状圧痕が残る。257は土師壊片である。外底部にはナデを施し、板状圧痕が残る。外底部に墨痕が残る。

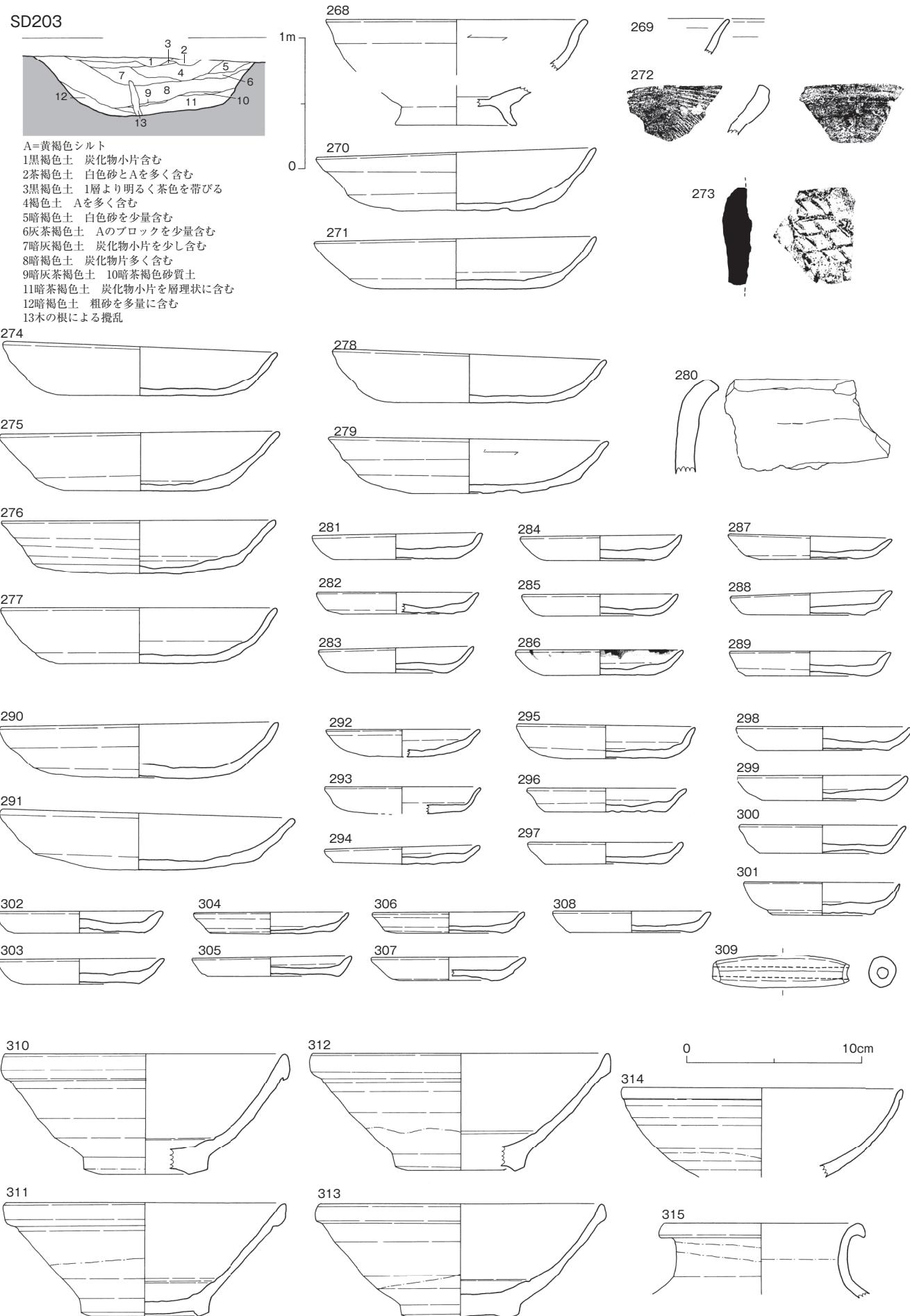
SE317(第14図) 調査区中央北西寄りに位置する。平面は東西に長い楕円形である。現状で径1.4m、深さ168cmを測る。壁面には多くのテラスが見られる。井筒の痕跡はなく素掘りである。掘込みが礫層まで達していないが、若干の湧水が見られた。出土遺物(第15図099・100)099は土師壊である。切り離しは不明で板状圧痕がある。100は黒色B類碗である。底部中央に焼成後の穿孔がある。貿易陶磁等は出土していない。土師壊の切り離しが判るのは小片であるがヘラ・糸が1点ずつ出土している。焼けた粘土塊や鉄滓が出土している。11世紀中頃から後半か。

SE318(第14図) 調査区中央西寄りの北端に位置する。平面は若干東西に長く、径89cm、深さ119cmを測る。掘り込みは垂直に近く、底面から25～60cm上の壁面は北東側を除いて大きくえぐれている。井筒の痕跡は無く素掘りである。掘方が浅く礫層に達していないため、調査中に湧水はなかった。出土遺物は貿易陶磁等は出土していない。時期不明の須恵器鉢の他、土師椀や土師壊が出土した。土師壊は切り離しが判る5点は全てヘラ切りである。鉄滓が2点出土した。時期は11世紀後半頃か。

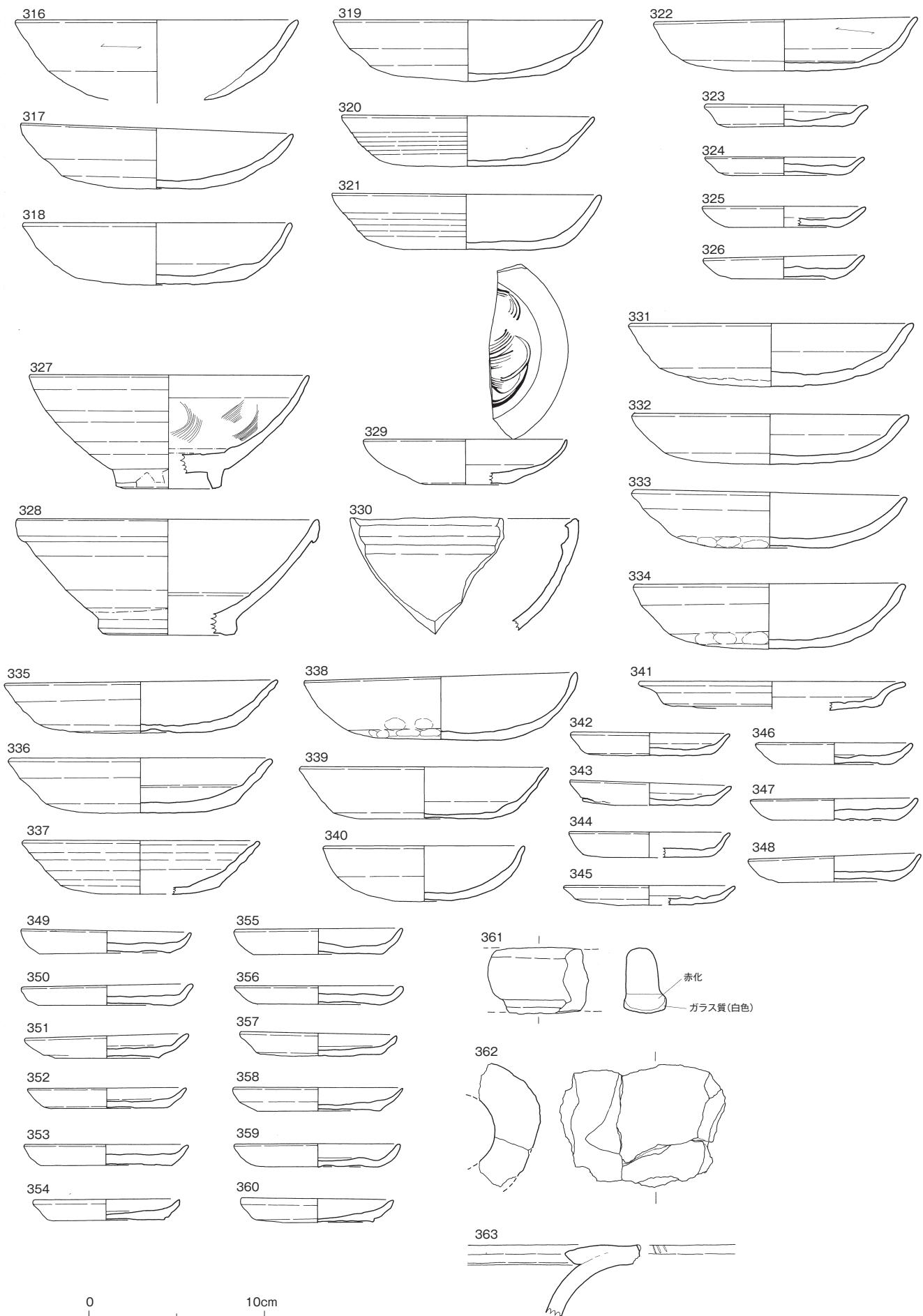
SE320(第25図) 調査区西側に位置しSE297を切る。平面は南北に長い不整楕円形で長径3.2m、深さ1.65mを測る。断面は検出面から1.2mは緩やかにすぼまりながら所々に平坦面を持つ。1.2mから下はほぼ垂直に掘り込む。平坦面から下の掘り込みは長径1.8mの楕円形を呈す。平坦面の上の壁面に径2cm程の孔が並ぶ。井筒を支える棒の痕跡か。井筒の痕跡は見られなかった。出土遺物(第27図258から267)。258・259は越州窯系青磁碗である。260は黒色A類碗、261は土師椀、262は陶器鉢である。263は黒色土器である。外面は摩滅著しい。器種は不明だが器壁が1.5cmと厚く緩やかなカーブを描く大型の器である。264は土師器甕である。外面にタタキの痕跡が残り、煤が附着する。266～267は須恵質の平瓦である。265は縄目、266・267は斜格子のタタキを施す。

## 2) 溝

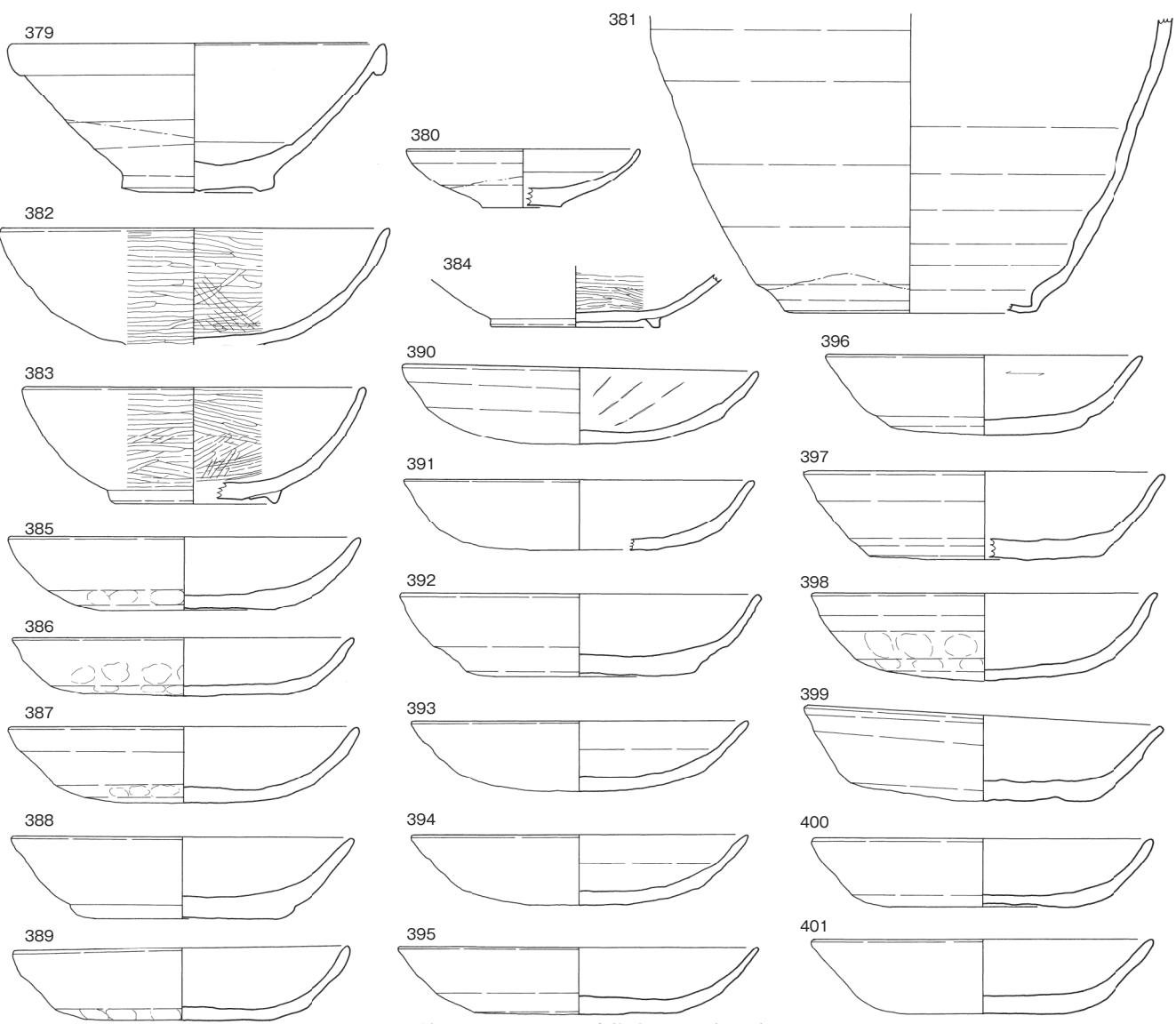
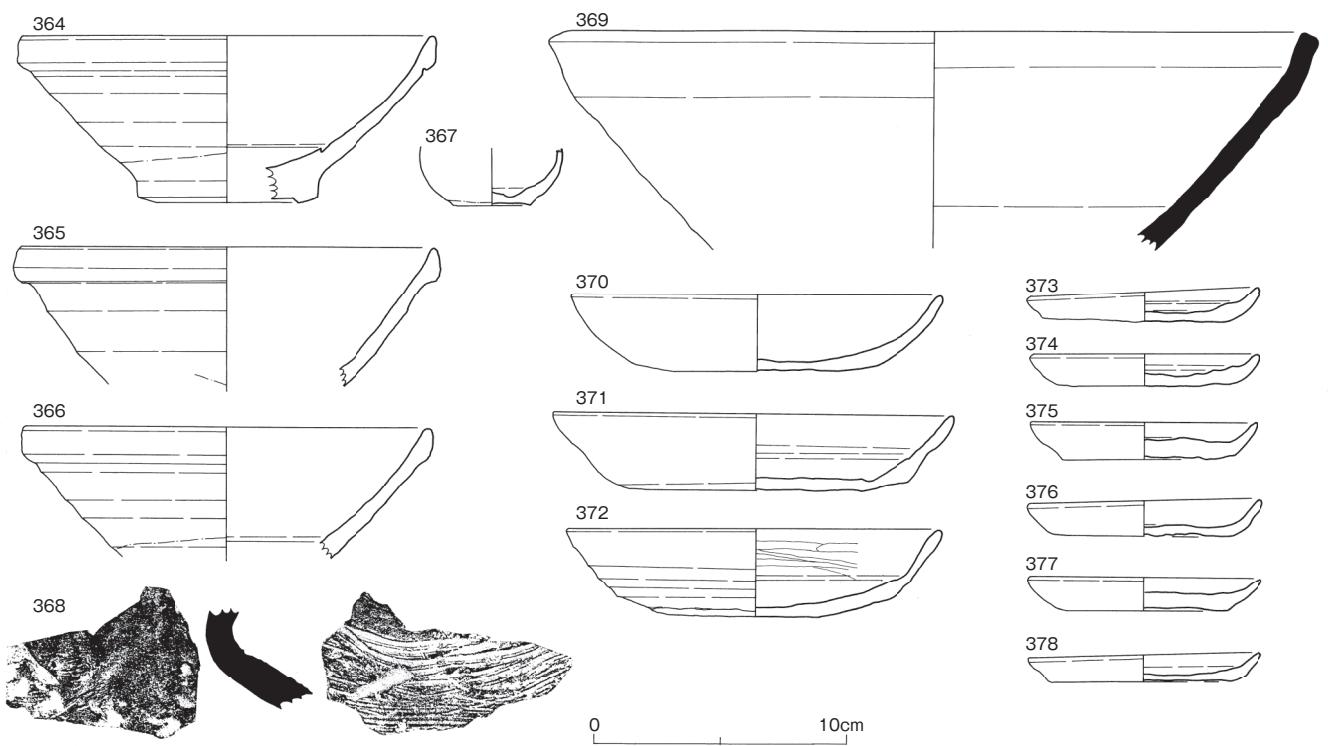
SD203(第28図) I区SD086の続きである。近世の溝で3つに寸断されており、東から203-1、-2、-3とする。特に203-2と-3からは白磁碗や土師壊・皿等多くの遺物が出土した。出土状況から多くは南側から廃棄されたものである。出土遺物(第28~32図 268~487)。268~273は203-2の上層から出土した。268は黒色A類椀、269は黒色B類椀、270・271はヘラ切りの土師壊で板状圧痕が残る。272は瓦質鉢、273は須恵質の平瓦である。274～289は203-2中層から出土した。274～279は土師壊である。底部切り離しはいずれもヘラ切りで板状圧痕が残る。281～289は土師皿である。底部切り離しは281がヘラ切りで板状圧痕が残る。282～289は糸切りで284～289は板状圧痕が残る。286は灯明皿として使用され、口縁部数カ所に煤が付着する。290～309は203-2の中～下層から出土した。290・291はヘラ切りの土師壊で板状圧痕が残る。292～308は土師皿である。292～296はヘラ切りで295と296には板状圧痕が残る。297～308は糸切りで302～308は板状圧痕が残る。309は土錘である。長さ2.7cm、径1.8cmを測る。310～326は203-2の下層から出土した。310～314は白磁碗、315は白磁壺、316は瓦器椀である。317～322はヘラ切りの土師壊で320～322は板状圧痕が残る。323～326は土師皿で323はヘラ切り、324はヘラ切りで板状圧痕、325・326は糸切りで板状圧痕が残



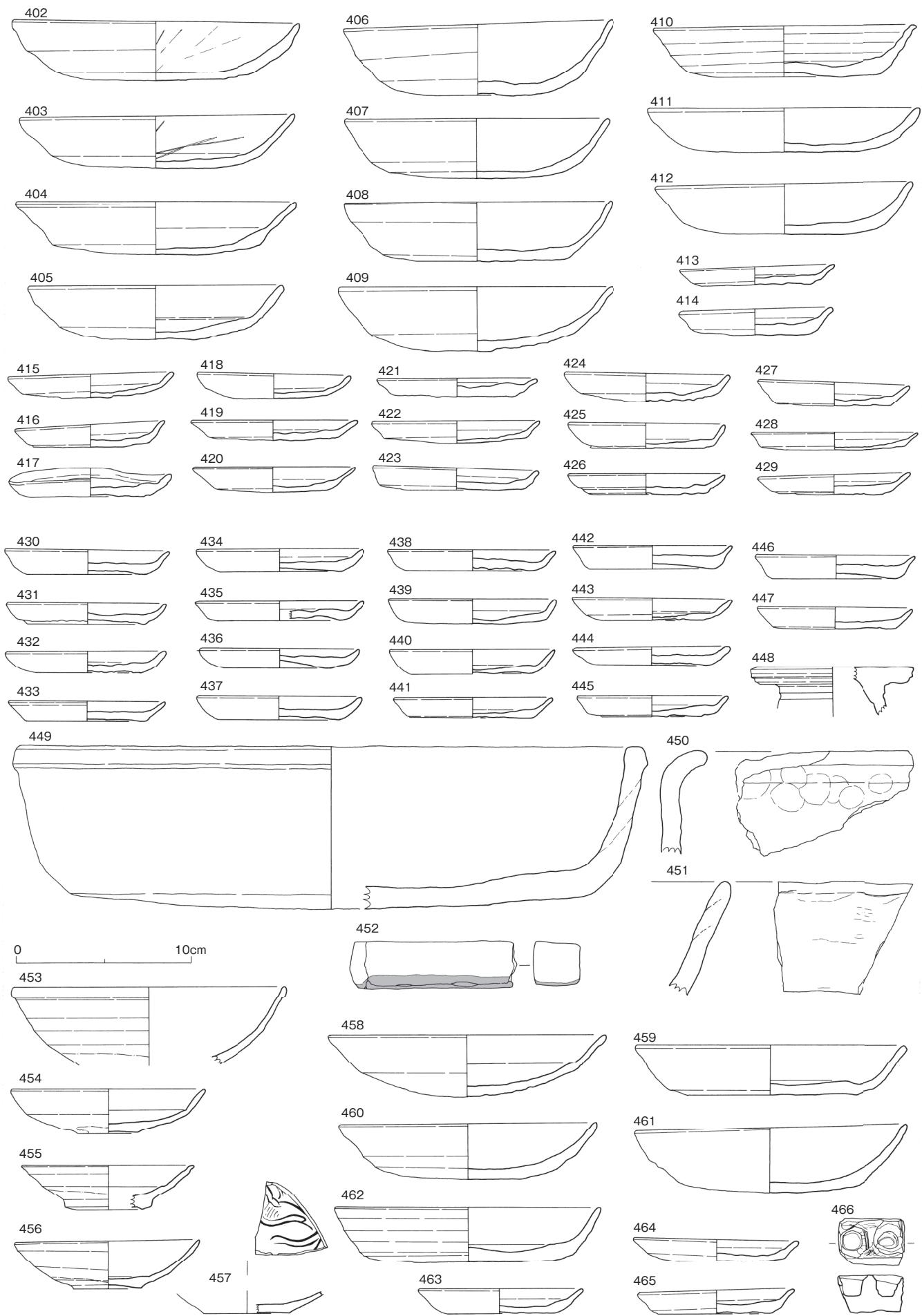
第28図 SD203遺構実測図(1/40)・遺物実測図1(1/3)



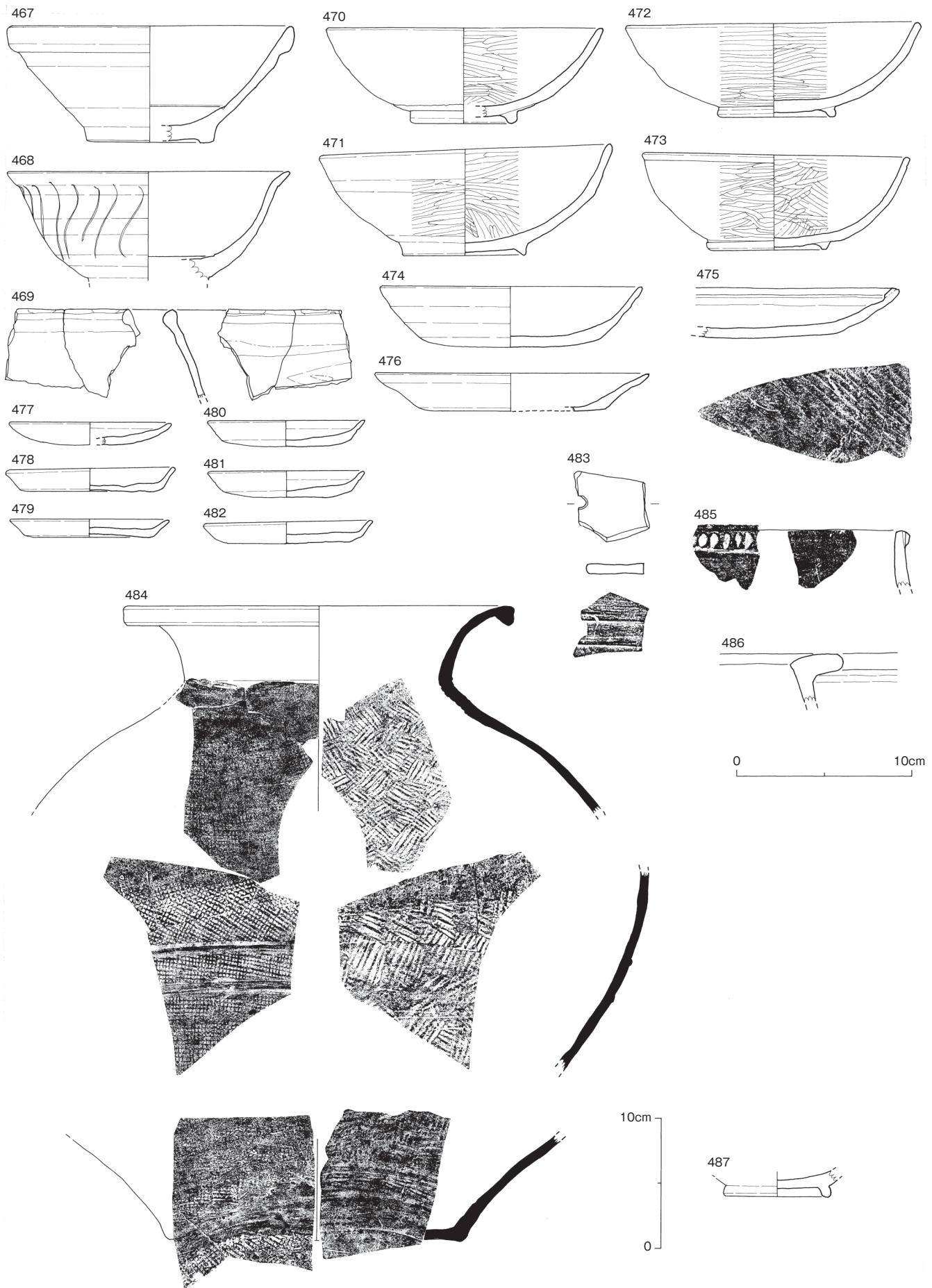
第29図 SD203遺物実測図2(1/3)



第30図 SD203遺物実測図3(1/3)



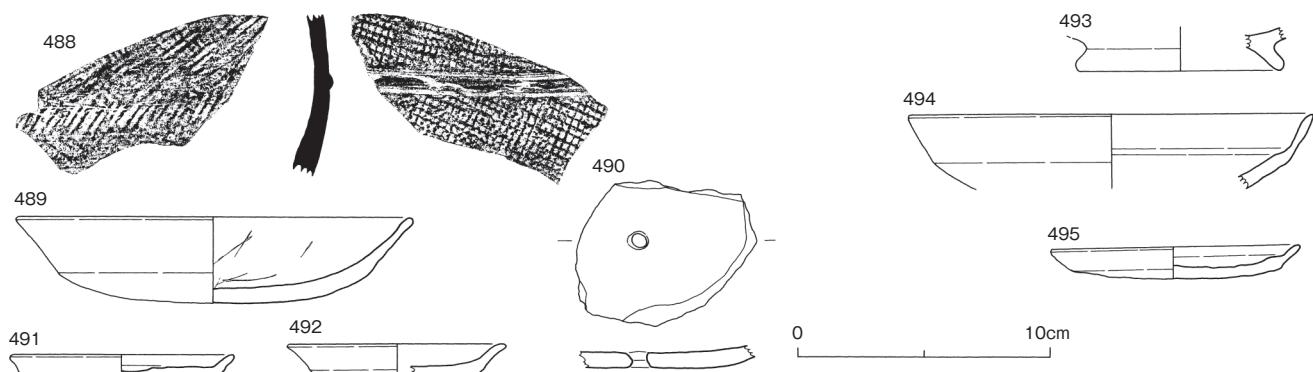
第31図 SD203遺物実測図4(1/3)



第32図 SD203遺物実測図5(1/3・484のみ1/4)

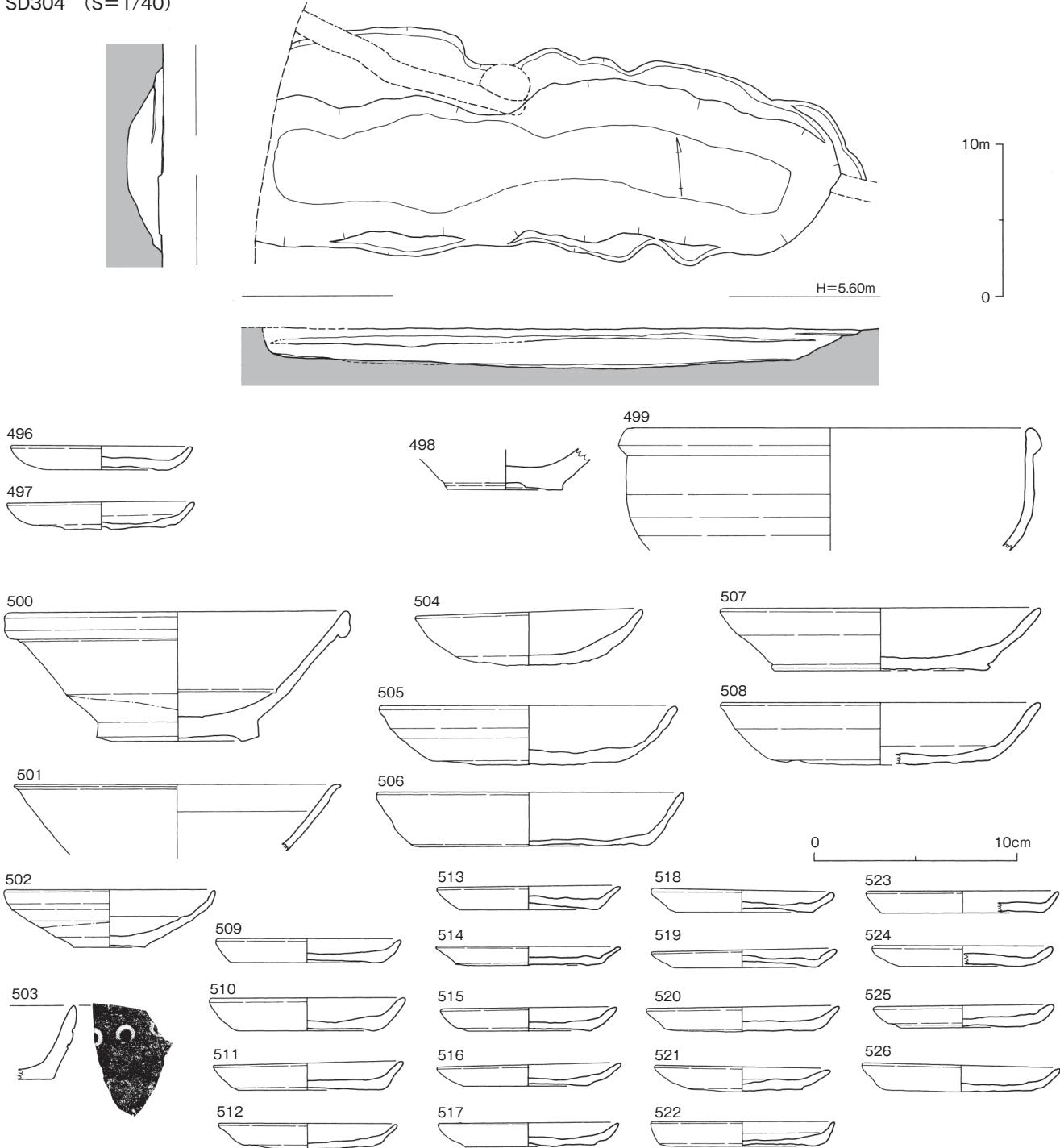
る。327～363は203-2全体から出土したものである。327・328は白磁碗、329は白磁皿、330は陶器鉢である。331～340はヘラ切りの土師坏で335～340は板状压痕が残る。341～360は土師皿である。341～345はヘラ切りで345は板状压痕が残る。341は復元口径15cmを測る。346～360は糸切りで349～360は板状压痕が残る。361は棒状の土製品で積み上げて炉壁として使用したため、図の下側が被熱している。362は羽口、363は弥生時代中期の壺である。364～378は203-3上層から出土した。364～366は白磁碗、367は白磁小壺、368は須恵器甕、369は須恵質鉢である。370～372はヘラ切りの土師坏で371と372は板状压痕が残る。373～378は土師皿で373・374はヘラ切りで板状压痕が残る。375～378は糸切りで375以外は板状压痕が残る。379～452は203-3の中層から出土した。379は白磁碗IV類、380は白磁皿VI-1b、381は陶器壺、382～384は瓦器椀である。385～412は土師坏で底部切り離しは408以外ヘラ切りである(408は糸切りで板状压痕が残る)。396はヘラ切り後ナデを施し、397～407と409～412は板状压痕が残る。413～447は土師皿である。413～429はヘラ切りで413・414以外は板状压痕が残る。417は歪みが大きく、口縁に煤が付着する。430～447は糸切りで438～447は板状压痕が残る。448は器台か。復元口径9.2cmを測る。449～451は土師質の鉢である。449は口径39cmを測る。外側に煤、内側に炭化物が附着する。452は断面方形の棒状土製品で図の下面が被熱のためガラス化している。361と同様に積み上げ炉として使用する。453～466は203-3の中～下層から出土した。453は白磁碗類、454～457は白磁皿である。458～463は土師坏である。全てヘラ切りで462以外は板状压痕が残る。463～465は土師皿で、全てヘラ切りで板状压痕が残る。466は滑石製の容器である。467・468は白磁碗、469は陶器鉢、470は土師椀、471～473は瓦器椀である。474～476は土師坏である。474・475はヘラ切りで、475は板状压痕が残る。476はナデを施しており、不明。477～482は土師皿である。477～481はヘラ切りで477以外は板状压痕が残る。482は糸切りで板状压痕が残る。483は土師坏の底部で焼成前の穿孔あり。484は朝鮮陶磁の壺である。破片は203-3の上層から中層にかけて出土した他、周囲の遺構からも出土している。内外面に胴部全面にタタキを施すが、外面は胴部中央を除きナデ消し、内面は胴部は軽いナデ、底部近くは強くナデを施す。内外面とも暗青灰色で胎土中央は赤茶褐色を呈す。485は突帯文の甕、486は弥生時代中期の甕口縁である。487は白釉陶器碗である。

SD246・272(第12図) 調査区中央に位置する東西方向の溝である。調査区中央に位置しSD203を切る。幅50～80cm、深さ21cmを測る。SD247と同じ溝の可能性がある。SD203が埋没した後にそれに沿う様に掘られており、深さは浅いものの区画用の溝と思われる。12世紀後半から13世紀前半か。出土遺物(第33図488～492)。488は朝鮮陶磁壺の破片で484と同一個体と思われる。489・490は土師坏である。489はヘラ切りで板状压痕が残る。490は摩滅のため不明で中央に穿孔がある。491・492は土師皿である。491は糸切りと思われるが摩滅のため不明瞭。492はヘラ切りである。



第33図 溝出土遺物実測図(1/3)

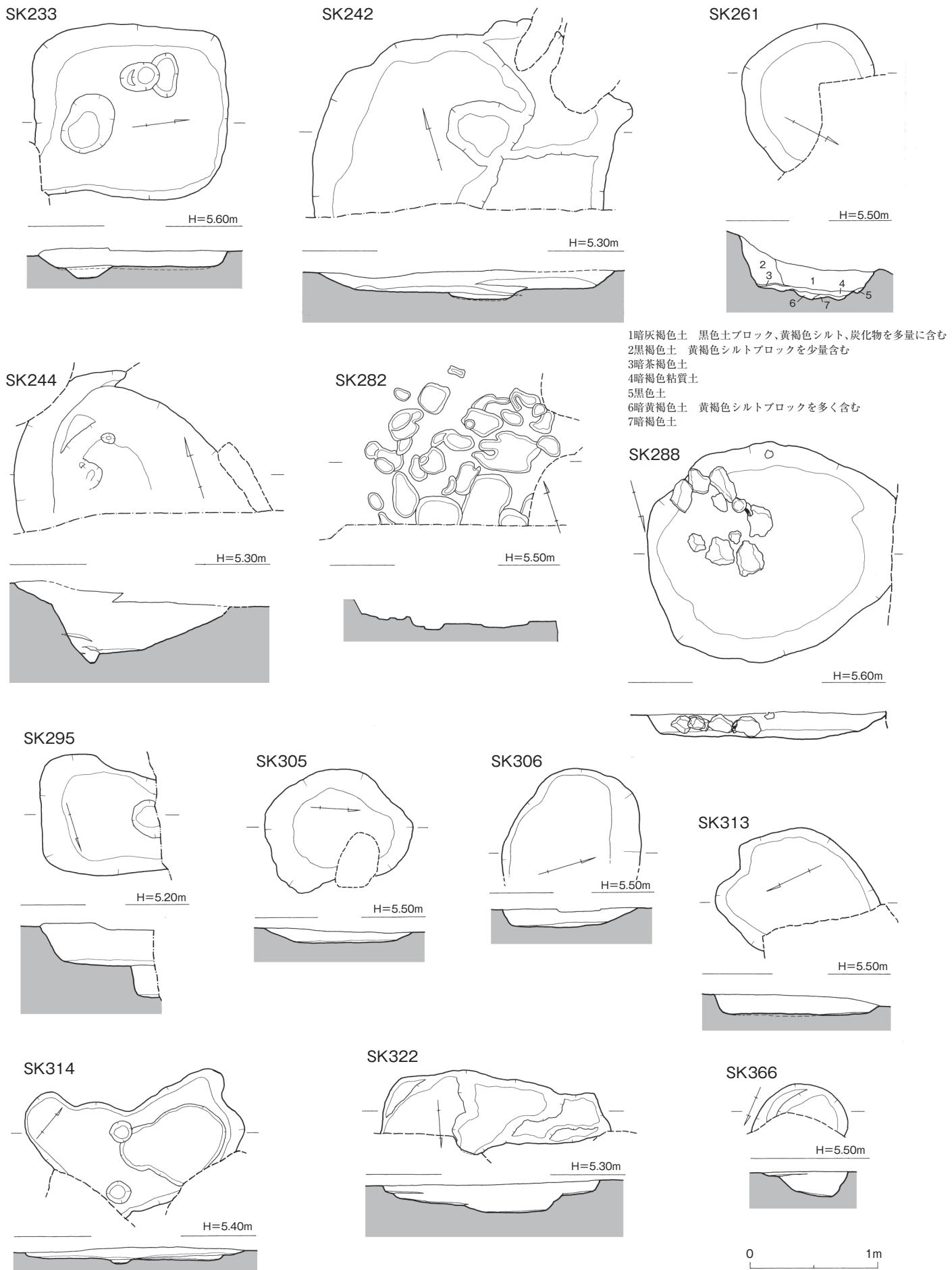
SD304 (S=1/40)



第34図 SD295遺構実測図(1/40)・遺物実測図(1/3)

SD247(第12図) 調査区中央西側に位置する東西方向の溝で西端をSE287に切られる。幅は最大で80cm、深さ16cmを測る。須恵器壺等が出土した。土器はいずれも細片である。

SD304(第34・35図) 調査区北西に位置する東西方向の溝である。長さ約4m、幅は最大で1.5m、深さ25cmを測る。出土遺物(第33図493~495)。493は黒色B類碗の底部である。494は土師椀、495は土師皿でヘラ切りである。その他須恵器壺、土師壺・土師皿(いずれもヘラ切りが多い)が出土した。11世紀後半~12世紀初め頃と考えられる。



第35図 土坑実測図(1/40)

### 3) 土坑

SK233・331(第35図) 調査区中央に位置する。主軸をN - 8° - E にとる。隅丸長方形を呈し、長径1.5m、深さ15cmを測る。底面南側に柱穴状の掘り込みがある。16世紀頃か。

SK242(第35図) 調査区南端に位置し、遺構の南半は調査区外に延びる。現状で東西2.3m、南北1.4m、深さ15cmを測る。底面中央に浅い掘り込みがある。12世紀後半頃か。出土遺物の496・497(第36図)は糸切りの土師皿である。497には板状圧痕が残る。その他陶器壺、白磁碗等が出土した。

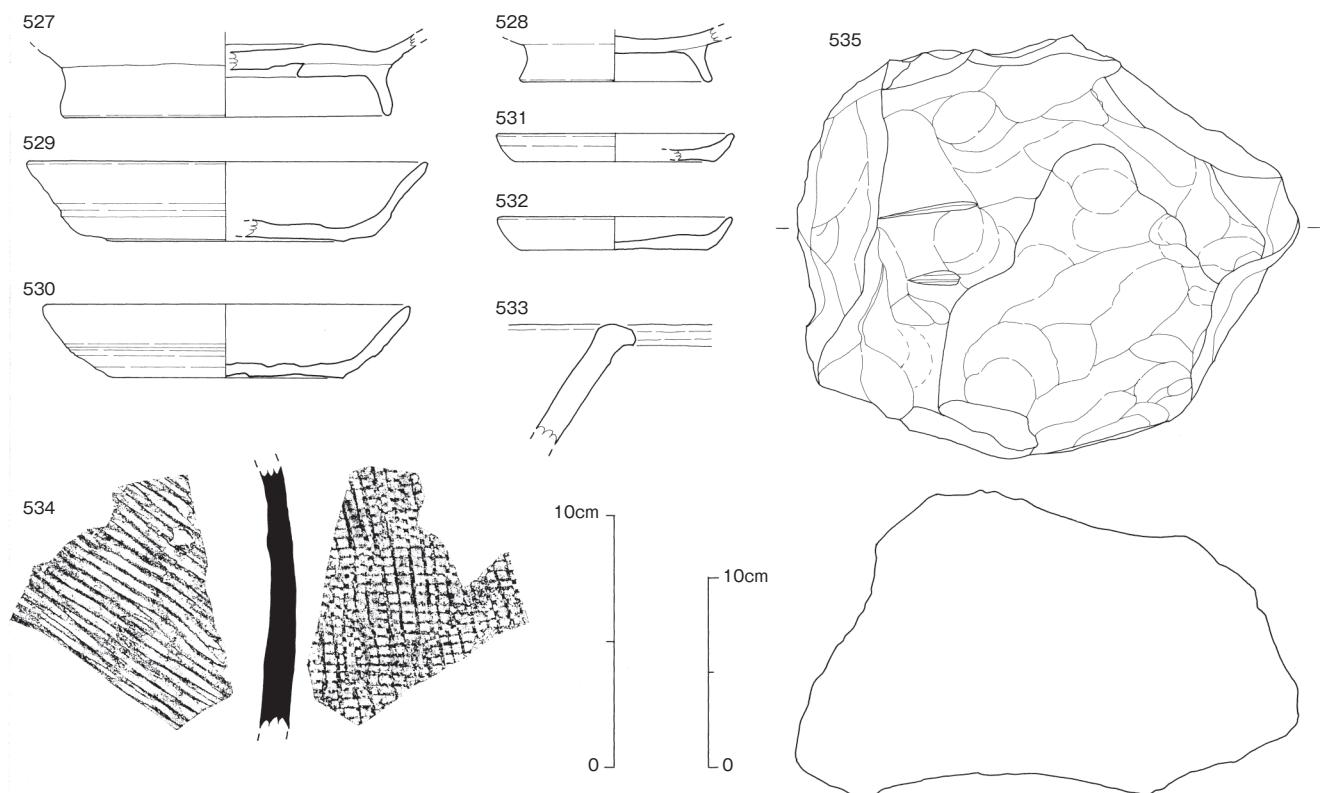
SK244(第35図) 調査区南東端に位置し、遺構の南半が調査区外に延びる。現状で南北1.1m、東西2m、深さ65cmを測る。白磁碗、土師壺等が出土した。12世紀代か。

SK261(第35図) 調査区中央に位置する。攪乱に切られ、規模は不明である。龍泉窯系青磁碗や白磁類が出土した。12世紀後半から13世紀頃か。

SK282(第35図) 調査区南端中央部に位置する。こまかな凹凸が集中する。SD 203の西端に近く、関連する遺構の可能性がある。遺物は陶器片や土師皿が出土したがいずれも小片である。

SK288(第35図) 調査区南西側に位置する。楕円形を呈し長径2m、深さ20cmを測る。底面上で10～30cm程の礫が11個出土し、そのうち4個が熱により赤変していた。同安窯系青磁碗や陶器大甕等が出土しており、12世紀後半から13世紀前半頃と思われる。出土遺物(第36図 527～535)。527は土師椀、528は黒色A類椀である。529・530は糸切りの土師壺で板状圧痕が残る。531・532は糸切りの土師皿である。533は土師質の鉢、534は須恵器の甕である。535は砂岩製の砥石で表面は熱を受け全体が剥離している。

SK295(第35図) 調査区西端に位置し遺構の西半が調査区外に延びる。現状で東西1m、深さ32cmを測る。底面に柱穴状の掘込みがある。越州窯系青磁碗や白磁碗が出土した。12世紀中頃～後半か。出土遺物(第35図 498・499)。498は越州窯系青磁碗である。499は白磁鉢で口径20.6cmを測る。



第36図 SK288出土遺物実測図(1/3 · 535は1/4)

表2 原遺跡第28次出土動物遺存体

地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考	時代
001	II 区 203-3 中層	哺乳類	イノシシ・シカ	肋骨	不明	遠位部		不明	細かな擦痕あり	白色化		12世紀中頃
002	II 区 SE287 挖方	哺乳類	シカ	上顎	左	M2と肩歯槽		歯冠高約4mm	なし	なし		
003	II 区 SE287 挖方	哺乳類	シカ	下顎	左	P2～M3	下顎体	P2, P3, M3萌出中	内外面に擦痕有り	なし		
004	II 区 SE287 挖方	哺乳類	ウマ	中足骨	右	近位部	外側を欠損	骨化済み	不明	なし	イヌの咬痕あり	12世紀中頃
005	II 区 SE287 挖方	哺乳類	ネコ	下顎	右	臼形	切歯、牙抜け落ち	成獣	なし	なし		～後半
006	II 区 SE287 挖方	哺乳類	ネコ	長骨	不明	幹部	小片	不明	不明	不明	遺存不良 細片化	
007	II 区 SE287 挖方	哺乳類	イノシシ・シカ	肋骨?	不明	近位部		未骨化	あり	なし		
008	II 区 SE297 上層	腹足類	ホソウミニナ	殻		体層部	殻頂部欠損	不明	なし	なし		
009	II 区 SE297 上層	哺乳類	ウシ	下顎歯	不明	歯		歯冠高4cmほど	なし	なし	細片化	
010	II 区 SE297 井筒	哺乳類	ウシ	大腿骨	左	幹部		不明	あり	なし	ビビアナイト析出	
011	II 区 SE297 井筒	哺乳類	ウシ・ウマ	長骨	不明	幹部		不明	不明	不明	表面ほとんど剥落	

SK305( 第35図 ) 調査区中央に位置する。楕円形を呈し、長径 1.2 m、深さ 10cmを測る。土器小片が 20 点程出土したが弥生時代前期～中期ものである。弥生時代の可能性がある。

SK306( 第35図 ) 調査区中央部に位置する。II - 1・2 区にまたがっていて II - 1 区では確認できなかった。出土した土師壺・土師皿とも糸切りが多く 12 世紀後半から 13 世紀頃と思われる。

SK313( 第35図 ) 調査区西半に位置する。平面は不整形を呈す。12 世紀後半から 13 世紀か。

SK314( 第35図 ) 調査区西端に位置する。青磁片や土師壺等が出土した。12 世紀後半か。

SK322( 第35図 ) 調査区西端に位置する。長径 1.8 m、幅 70cmを測る。白磁片などが出土した。

SK366( 第35図 ) 調査区北西に位置し、SE317 に切られる。

SK372( 第12図 ) 調査区東側に位置し SD203・246 を切る。土師皿が集中して出土した。最初 SD203 との切り合いで分からずに掘り下げたため遺構の輪郭は不明である。12 世紀後半から 13 世紀初めか。出土遺物( 第34図 500～522) 500～502 は白磁、503 は 質の鉢である。504～508 は土師壺である。504～506 はヘラ切りで 505・506 は板状圧痕が残る。507・508 は糸切りで板状圧痕が残る。509～526 は糸切りの土師皿で 513～526 は板状圧痕が残る。

#### 4 出土動物遺存体

SD203、SE287、SE297 から動物遺存体が出土した。古代の溝と井戸については土壤の水洗洗浄を行い、若干の動植物遺存体が出土した。植物遺存体についてはP48 以降の報告に含まれており、動物遺存体については現在分析中である。今回は目視により確認して取り上げたものについて報告する。SD203 からはイノシシ・シカの肋骨片が出土した。解体時に擦痕があり被熱のため白色化している。SE287 挖方からはシカ、ウマ、ネコ、イノシシ・シカが出土した。シカは上顎片と下顎が出土しているが、上顎は成～老獣、下顎は臼歯が萌出中の若獣である。ウマは解体痕はないものの骨にイヌの咬痕と思われる傷があり、死後埋葬されずに解体後放置されていた可能性がある。

ネコは当時中国から輸入された貴重種で全国的に出土数は少ない。お経を鼠の害から守るため遣唐使が持ち込んだとされ、近隣では太宰府、博多遺跡群、箱崎遺跡などで出土している。SE297 からはホソウミニナ、ウシ等が出土した。ホソウミニナは海棲の巻貝で食用に持ち込まれたものである。ウシは解体痕はないものの井戸に廃棄されていることから食用にされたと考えられる。

この時期出土数が少ないネコが出土したことは 12 世紀頃の原遺跡で書類等を守るためにネコが飼われていた事を示している。このことからも 12 世紀中頃には書類を多く保存する施設があり、それは官衙的施設であった可能性が高いと考えられる。

#### 5 小結

28 次調査では縄文時代末～弥生時代前期、古代末～中世前半、近世の遺構を確認した。特に古代については区画の溝と多量の遺物が出土するなど多くの成果を上げることができた。溝は当初方形に巡る可能性を考えていたが、SD086・203 が II 区中央で立ち上がり、それに対応するように続く溝が無いことから様相が不明であったが、平成 24 年度の調査で II 区西側の第 1 次調査で同時期と思われる南北方向の溝が 2 条出土した。溝は SD203 の延長上で屈曲せずに延びることから SD086・203 は官衙的施設の外周を巡る溝ではなく、中を区画する溝の可能性が出てきた。遺構の様相は想像していたよりも複雑になると思われ、今後の周辺調査に期待したい。

表3 第28次調査遺構一覧1

遺構番号	性格	略号	形状	大きさ	時代	報告	備考
001	I 区 溝	SD	断面逆台形	幅2m以上、深さ1m以上	近世以降	□	磁器(碗、皿、小碗)、陶器鉢輪・瓦質鉢、土師碗・壺(突帯文)、火鉢、炉壁、瓦(須恵器、古代、瓦質近代)
001-1上層褐色土	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	白磁碗、須恵器壺、須恵器瓶、土師質脚付土鍋(大内型?)、土器片、滑石鍋
001-1中～下層	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	磁器小碗、陶器瓶、土管、須恵器壺、土師碗(糸切り)、土師壺・壺(弥生時代前期前半・中期)、土器片(多・弥生時代)、瓦(近現代)、鐵錐
001-1下層	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	土質灰火鉢、黑色土器小碗、瓦質鉢、土師碗(ヘア)、壺(箱突窓)、土器片(弥生時代・古代末)
001-1底面	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	陶器壺蓋(13世紀)、土師質大甕(或大鉢)
001-2	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	磁器皿、陶器壺、須恵器(壺?)、土師碗、土鍋、土師皿、土器片(弥生時代が多い・古代)
001-2下層	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	平瓦(素焼き)、陶器瓶、土管、土器片(10点)
001-2底面	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	平瓦(素焼き)、時期不明、陶器壺蓋(瓦)
001-3	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	陶器瓶(近世以降)、陶器碗、陶器片(壺?)、白磁碗IV類、陶器鉢、土師器碗、(時期不明)、土器片(多・弥生時代・古代)、瓦(近現代)、炉壁
001-3上層	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	ガラス瓶(現代)、土師質鉢、須恵器大甕(古墳～古代)、壺(弥生時代?)、椀(古墳時代?)、土器片(弥生時代・古代)
001-3下層	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	平瓦(近世～現代)、土師皿(高台付)、土師皿(糸切り)、壺(弥生時代中期前半)、土器片(弥生時代・古代)、鉄片(釘?)
001-3底面	I 区 溝	SD	断面逆台形		近世以降	□	陶器壺蓋(近世)、陶器碗、陶器片(壺?)、白磁碗IV類、陶器鉢、土師器碗、(時期不明)、土器片(多・弥生時代)、瓦(近現代)、炉壁
002	I 区 土坑	SK	楕円形	(170+α) × (180+α) × 44	近世以降	□	陶器壺蓋(各時代以降)、陶器壺(茶褐釉)、小型陶器片(茶褐釉)、須恵器大甕(3点)、すべて別個体、土師碗(多・小片)、黒色A類碗(多・小片)、瓦器碗(小片)、土師皿、雷取手・器蓋?、(弥生時代中期)、壺(縄文時代晚期～弥生時代)
003	I 区 土坑	SK	隅丸方形	109×99×22	弥生時代中期	○	土器片(中)、土器片(縄文時代晚期)、土器片(高台付)、土器皿(糸切り)、壺(弥生時代中期前半)
004	I 区 土坑	SK	三角形	138×99×15	縄文時代晚期～弥生時代	○	壺(縄文時代中期)、土器片(縄文時代晚期～弥生時代)
005	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	30×28×22	不明	○	壺(突帯文、複数 小片)、漆鉢(研磨 小片多)、壺(赤色顔料塗布)
006	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径21cm、深さ19cm	不明	○	壺(同一直線の破片7点、その他3点)
007	I 区 井戸	SE	円形		11世紀末～12世紀前半	○	土器片(小片1点)
008	I 区 貯蔵穴	SK	楕円形	218×123×30	縄文時代晚期～弥生時代	○	白磁碗IV類、陶器大甕(茶褐釉)、小型陶器片(茶褐釉)、須恵器大甕(3点)、すべて別個体、土師碗(多・小片)、黒色B類碗(多・小片)、瓦器碗(小片)、土師皿、雷取手・器蓋?、(縄文時代晚期)、壺(縄文時代晚期)、土器片(小片7点、縄文晚期)
009	I 区 柱穴状遺構	SP	六角形	30×28×31	不明	○	土器片(小片2点)
010	I 区 貯蔵穴	SK	長方形?	115+α × 111 ×	縄文時代晚期～弥生時代	○	壺(突帯文、複数個 細片化)、壺(縄文晚期 文)、浅鉢(数個体、破片少ない)、大型壺?(底部のみ)、土器片(壺や鉢と思われる土器片多 細片多く接合不可)、壺(と思われる土器片は少ない)、白磁碗片(粉丸込み)
011	I 区 滝状遺構	SD		59×21×2	近世代	○	瓦(近現代)、壺(縄文晚期)、土器片(小片7点、縄文晚期)
012	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	30×26×27	古墳以降	○	土師碗、土器片(縄文8点)
013	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	58×(24+α) × 23	不明	○	土器片(小片1点)
014	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	38×(35+α) × 7	縄文時代晚期～弥生時代	○	壺(突帯文)、土器片(丹塗り)
015	I 区 掘乱		不整形	200×65×9	近現代	○	瓦(近現代)、土器片(小片多9
016	I 区 掘乱		不整形	96×90×18	不明	○	土器片(小片2点)
017	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	35×33×29	不明	○	土器片(小片1点)
018	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	19×15×11	不明	○	土器片(小片1点)
019	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	31×29×17	不明	○	土器片(小片1点)
020	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	32×30×10	不明	○	土器片(小片1点)
021	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	14×11×27	不明	○	土器片(小片1点)
022	I 区 柱穴状遺構	SP	隅丸方形?	55+α × 76 × 28	古代以降	○	土師皿(糸切り)、壺(突帯文)、壺(縄文文 弥生前期)、土器片(縄文晚期～弥生時代)
023	I 区 掘乱		不整形	54×53×24	古代以降	○	瓦(丸小片)
024	I 区 包含層?		不整形	114×94×4	古代以降	○	土師皿(糸切り?) 1点
025	I 区 滝状遺構	SD		207×17×8	不明	○	土器片(1点)
026	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径27×深さ15	縄文時代晚期～弥生時代	○	土器片(1点 縄文から弥生か)
027	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	43×30×10	不明	○	土器片(小片1点)
028	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径26×深さ21	縄文時代晚期～弥生時代	○	土器片(小片5点)
029	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	27×23×23	不明	○	土器片(小片1点)
030	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	18×14×2	不明	○	土器片(1点)
031	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	26×20×3	縄文時代晚期～弥生時代	△	壺(突帯文 2種)、土器小片(新しそうなのはない)
032	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	23×20×12	不明	○	土器片(4点)
033	I 区 土坑	SK	不整形	207×184×27	縄文時代晚期～弥生時代	○	壺(突帯文)、鉢(夜臼式)、丹塗壺(夜臼式 細片化接合不可)、羽口(紛れ込みか)
034	I 区 柱穴状遺構	SP	隅丸方形?	25×21×52	不明	○	土器片(1点のみ)
035	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	32×17×51	不明	○	土器片(1点のみ)
036	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	32×26×27	古代	○	土師皿(糸切り?)
037	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	33×26×27	不明	○	土器片(小片2点)
038	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	33×33×35	古代	○	土師碗?、丹塗磨研土器片(小片1点)、土器片(小片2点)
039	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	32×25×深さ22	不明	○	土器片(小片2点)
040	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	28×28×深さ22	不明	○	土器片(小片2点)
041	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	45×45×深さ9	不明	○	土器片(小片1点)
042	I 区 土坑	SK	不明	深さ6	弥生時代?	○	土器片(1点のみ)
043	I 区 柱穴状遺構	SP	円形?	29+α × 17 × 28	不明	○	土器片(小片1点のみ)
044	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	39×31×19	不明	○	土器片(小片1点)
045	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	35×19	不明	○	土器片(小片1点)
046	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	51×46×24	不明	○	土器片(小片1点)
047	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	29×24×12	不明	○	土器片(小片2点)
048	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	36×25×22	不明	○	土器片(小片4点)、炭化物1点
049	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	40×38×14	縄文時代晚期～弥生時代	○	壺(突帯文)、土器片(小片4点)
050	I 区 柱穴状遺構	SP	円形?	径22×深さ19	不明	○	土器片(小片1点)
051	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	37×29×21	不明	○	土器片(小片2点)
052	I 区 柱穴状遺構	SP	長方形?	29×21×25	不明	○	土器片(小片1点)
053	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径17×深さ不明	不明	○	遺物なし
054	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	27×21×18	古代	○	土師碗(糸切り?)
055	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径39×深さ40	不明	○	土師碗(糸切り?)
056	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	(20+α) × 19 × 17	古代	○	土師碗(小片1点)、土器片(小片2点)
057	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	36×22×10	不明	○	土器片(小片1点)のみ
058	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	25×24×3	不明	○	土器片(小片1点)のみ
059	I 区 土坑	SK	溝状	39×31×19	不明	○	土器片(小片1点)のみ
060	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	35×19	不明	○	土器片(小片1点)
061	I 区 土坑	SK	溝状	86×39×20	不明	○	土器片(小片1点)
062	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	25×21×9	不明	○	土器片(小片1点)
063	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	29×24×15	不明	○	土器片(小片1点)
064	I 区 滝状遺構	SD		240×19×3	不明	○	土器片(小片1点)
065	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径28×深さ22	不明	○	土器片(小片1点)
066	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	30×27×29	古代	○	土師皿(糸切り)、土器片(2点)
067	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	27×25×25	不明	○	土器片(小片1点)
068	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径17×深さ17	不明	○	土器片(小片1点)
069	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	27×24×40	不明	○	土器片(小片1点)
070	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	34×27×28	古墳以降	○	須恵器壺(小片1点)、土器片(3点)
071	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	37×27×26	不明	○	土器片(1点のみ)
072	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	(27+α) × 28 × 23	不明	○	土器片(1点のみ)
073	I 区 滝状遺構	SD	溝状	202×31×2	不明	○	土器片(3点 土師皿か)
074	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	36×34×23	不明	○	土器片(2点)
075	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	39+α × 26 × 26	弥生時代?	○	土器片(8点 弥生時代)
076	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	16+α × 17 × 22	不明	○	土器片(1点)
077	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	33×25×30	弥生時代中期	○	壺(突帯文)、土器片(弥生時代)
078	I 区 井戸	SE	円形	125×124×	11世紀後半	○	白磁碗、須恵器大甕、土師碗(多・小片)、黒色B類碗、黒色B類器、瓦質鉢、瓦器碗、土師碗(11世紀)、土師碗(ヘア切り)、土師皿(ヘア切り後丁寧なナム)、ヘア切り・板状埴輪、壺蓋(土師質)、瓶(土器)、土器片(弥生土器)、炉壁(焼粘土・多)、砾石(砂岩)、黒曜石(1点)
079	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	56×49×46	古墳時代前期	○	壺(古墳時代前期)、壺(中期前半)、壺(中期前半)、焼粘土塊、土器片(多 ほどんど弥生時代若干古代が混じっている可能性有り)
080	I 区 窪式住居残穴?	SC	円形	約5m 深さ4cm	弥生時代中期	○	土器片(2点)
081	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	60×54×21	不明	○	壺(小片1点 弥生時代)
082	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	(32+α) × 29 × 13	弥生時代	○	土器片(4点 弥生土器)
083	I 区 柱穴状遺構	SP	方形	33×27×34	古代	○	須恵器短口壺、土器片(4点)
084	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	37×32×23	弥生時代	○	土器片(4点 弥生土器)
085	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	32×31×9	不明	○	土器片(2点)
086	I 区 溝	SD		長さ30m×幅160から180cm、深さ	12世紀中頃～後半	○	越州窑青磁碗、白磁碗-II・IV・V-C類、白磁皿(V類、その他)、白磁壺?、白磁碗II類、白磁碗(小片)、瓦器碗、土師碗(11世紀)、土師碗(ヘア切り)、土師皿(ヘア切り後丁寧なナム)、ヘア切り・板状埴輪、壺蓋(土師質)、瓶(土器)、土器片(弥生土器)、炉壁(焼粘土・多)、砾石(砂岩)、黒曜石(1点)
087	I 区 掘乱(植樹痕)		楕円形	168×162×20	近現代	○	焼粘土塊、須恵器大甕、土師碗、瓦器碗、土器片(多 弥生時代)
088	I 区 土坑	SK	長方形?	63+α × 81 × 30	弥生時代?	○	土器片(多 弥生土器?)
089	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	32×31×9	不明	○	土器片(2点)

表4 第28次調査遺構一覧2

番号	性別	略号	形状	大きさ	時代	報告	備考
089	I 区 坑	SK	不整形	127×72+×20	近世～近代	陶鉢(鉢 近世～近代 土器小片(弥生時代)	SD086に切られる
090	I 区 痕跡?		円形	径11×深さ3	弥生時代	土器小片(弥生時代)	SP039に切られる
091	I 区 柱穴状遺構	SP	長方形	34×19×5	12世紀末～13世紀	土師坏(柱穴分・系切り)	
093	I 区 売乱(植樹痕)		楕円形	232×222×51	現代	土器小片(2点)	113に切られる
093	I 区 柱穴状遺構	SP	円形?	径31×深さ25	不明	土師坏(2点)、土器小片(弥生時代・古代)	
093上層	I 区 柱穴状遺構	SP	円形?	径31×深さ25	不明	近世陶磁器、陶磁片、埴輪片、鉢・土器片(近世・弥生時代)	
094	I 区 売乱		円形	径31×深さ25	不明	播磨鉢?・土器片(7点、弥生時代)	植栽痕
095	I 区 売乱		漫状		現代	土器片(2点のみ 不明)	094の一部
096	I 区 土坑	SK	不明	長さ65以上×深さ39	12世紀中頃	土師坏(3点)、土器小片(古代、弥生時代)	SD086に切られる
097	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	52×37×32	縄文時代晚期～弥生時代 前期初頭	甕(弥生時代前期)	SK003に切られる
098	I 区 潟	SD	断面U字状	幅57×深さ16	12世紀	陶器片、土師碗、土師皿(系切り)、土師坏?	SD001に切られる
099	I 区 潟	SD	断面U字状	長さ124×幅54×深さ16	12世紀	土器小片(2点(古代、弥生時代))	SD098と同一
100	I 区 柱穴状遺構	SP	円形?	径52×(40+α)×20	弥生時代	土師碗、土器片(2点(古代、弥生時代))	SD001に切られる
101	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形?	(30+α)×27×23	不明	土器片(4点)	SP135等に切られる
102	I 区 不明	SX	不整形	深さ7cm	弥生時代	土器小片(12点 弥生時代)	001に切られる
103	I 区 売乱		不整形		不明	土器片(4点)	001に切られる
104	I 区 土坑	SK	隅丸方形状?	82×60+α×41	不明	土器小片(10点)	001に切られる
105	I 区 売乱		不整形		不明	土器小片(5点)	
106	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形?	径35以上×深さ不明	近現代	瓦(近現代)、甕(弥生時代)、土器小片(7点)	
107	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	深さ5cm	古代末～中世	土師坏、土器小片(多、弥生時代・古代)	SK108に切られる
108	I 区 土坑	SK	楕円形	93×71×14	1世紀	越州窯青磁片?・須恵器蓋、土器片(2点)	
109	I 区 売乱		不整形長方形	74×45×11	7～8世紀	須恵器片(2点のみ)	
110	I 区 包含層?		不整形	深さ1cm	不明	土器片(4点)	
111	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	40+α×41×10	不明	土器片(2点のみ)	調査区外に延びる
112	I 区 売乱		漫状		不明	土器片(2点)	094の一部
113	I 区 売乱(植樹痕)		隅丸方形状?		弥生時代前期?	甕(弥生時代前期 繊杉文)、土器小片(多 弥生時代か)	
114	I 区 売乱		隅丸長方形	101×(60+α)×12	近世から近代	近世陶磁器(1点)、土器小片(8点 弥生土器か)	087に切られる
115	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	26×22×4	不明		
116	I 区 潟状遺構			95×20×8	不明	土器片(2点)	
117	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	34×30×26	弥生時代中期前半	須恵器(波田 実測)、土器小片(2点 弥生土器)	
118	I 区 売乱		不整形	32×29×13	不明	土器片(1点)	
119	I 区 売乱		不整形	24×11×6	不明	土器片(1点)	
120	I 区 売乱		不整形五角形	100×89×15	弥生時代?	土器小片(7点 弥生時代)	植樹痕か
121	I 区 売乱		不整形	110×96×13	近世～近代	瓦、須恵器(桔子)、陶器片、黑色A類頸、青磁片、土器片(小片9点)、錦粘土	調査区外に延びる
122	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径17×深さ7	不明	土器片(1点)	
123	I 区 売乱		不整形円形	125×120×17	現代	土師坏、甕(弥生)、甕(弥生)?、土器片(多)	
124	I 区 柱穴状遺構	SP	円形?	径30×深さ16	不明	土器片(1点)	SD086に切られる
125	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径24×深さ22	不明	土器片(1点)	
126	I 区 売乱		円形?	径22×深さ7	不明	土器片(1点)	
127	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	46+α×42×9	不明	土器片(1点)	SD144に切られる
128	I 区 売乱		不整形	78×67×5	古代末～中世	土師坏	
129	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	48×34×9	不明		
130	I 区 柱穴状遺構	SP	隅丸方形状	25×(23+α)×38	不明	土器片(1点 弥生時代か)	093に切られる SB01柱穴
131	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	47×40×42	弥生時代前期?	土器片(1点 弥生前期か)	
132	I 区 潟	SD			近代	土師皿(系切り)	SK156を切る。SD001に切られる
133	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	43×30×26	不明		
134	I 区 柱穴状遺構	SP	不明	深さ10cm	中世以降?	土器片(2点 中世か)、円盤状石製品	SD001に切られる
135	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	40×28×26	不明	土器片(1点 弥生時代か)	SP101を切る
136	I 区 土坑	SK	不明	(10+α)×(42+α)×38	古代	黒色A類頸、甕(弥生?)、土器片(6点)	SD001に切られる
137	I 区 売乱		円形?	径109×深さ18	12世紀以降	土師坏、土師皿(系切り)、土器片(弥生時代・古代末～中世)	植樹痕か
138	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	34×30×11	不明	炉壁片(1点)	
139	I 区 土坑	SK	円形?	119×74+×17	近現代	ガラス(白色)、白磁片、陶器片、土師皿(ヘラ切り?)、土器片	西端が調査区外に延びる
140	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	35×34×27	弥生時代?	甕(弥生時代前期)、甕(弥生時代)、土器片(弥生時代か)、1点新しきな土器片有り。	
141	I 区 潟	SD		長さ226以上×幅76×深さ10	近世以降	須恵器壺、須恵器小片、銅鏡鋳、炉壁片、瓦器盤、土師碗、土師皿、甕(弥生時代前期)、土器片(1点新しきな土胎有り)	東端は埋乱で不明
142	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	27+α×24×23	12世紀	土器片(1点のみ)	SD086に切られる
143	I 区 柱穴状遺構	SP	円形ハチテ	径57+α×深さ21	不明	土器片(2点のみ 土師坏か)	西端が調査区外
144	I 区 潟	SD		327×83×40	12世紀	○ 鉄滓(1点)、土師碗、土師坏、土器片(弥生土器片 多)	SD099と同一
145	I 区 売乱		不整形円形	112×104×14	近現代	甕(弥生時代前期)、甕(弥生時代)、土器片(弥生時代か)、1点新しきな土器片有り。	SD144を切る。
146	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形円形	52×46×23	近代	白磁片(1点)	SP047に切られる
147	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	径30×深さ23	不明	なし	SP047に切られる
148	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	26×23×9	弥生時代中期	甕(弥生時代中期、土器片(弥生時代)	SB01柱穴
149	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径32×33	古代	土師坏	埋乱I45に切られる
150	I 区 売乱		長方形	76×39×9	古代	黒色土器A類頸、土師碗(古墳時代?)	
151	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	47×39×32	古代	須恵器大器(蓋子格子)・圓心印、土器片(2点)	
152	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	(43+α)×33×11	弥生時代	土器片(1点のみ 弥生時代)	SP146に切られる
153	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	(35+α)×33×22	不明	土器片(1点のみ 不明)	
154	I 区 柱穴状遺構	SP	円形?	径40cm弱、深さ46	弥生時代	土器片(1点のみ 弥生時代)	SP072に切られる
155	I 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	21×18×8	弥生時代	須恵器片(弥生時代)	
156	I 区 土坑	SK	隅丸方形状?	深さ 27センチ	近世～近代	陶器盤、甕(素焼き)	SD132等に切られる
157	I 区 柱穴状遺構	SP	円形	径30×深さ17	不明		
158	I 区 柱穴状遺構	SP	不整形	24×21×35	不明		
159	I 区 井戸(瓦組)	SE	円形	130×125	近世～近代	SD001を切る	
201	II 区 売乱		不整形		現代	コノクリート片、陶器碗(近現代)、陶器類(近現代)、土管(現代)、瓦、白磁碗瓦片、陶器掘り出し、瓦器破片(2点)、土師碗、土師坏、土師皿、破片多 系切り)、炉壁	古代の遺物多く、完形に近いものもある
202	II 区 潟	SD	断面逆台形	幅約2.5m、深さ1m	近世	龍泉窯系青磁碗(1・II類)、梨形(7点)、白磁碗(破片多、IV・V類)、褐釉陶器片、陶器掘鉢(近世)、陶器大裏(多)、綠釉陶器碗(3点)、黒色土器B類、須恵器大器(多)、鐵滓(1点)、土師碗、土師坏、土器片(弥生時代)	
203	II 区 潟	SD		幅約2m、深さ	12世紀中頃～後半	○ 白磁碗IV・V・類、白磁皿(11点未～12点)、陶器盤(13世紀前半 細れ込み多)	SP047-048に切られる
203-1	II 区 潟	SD			12世紀中頃～後半	○ 白磁器片(1点のみ)、土師坏(1点)、土器片(1点)	SP047に切られる
203-2	II 区 潟	SD			12世紀中頃～後半	○ 陶器盤(1点のみ)、土師坏(1点)	
203-2中～下層	II 区 潟	SD			12世紀中頃～後半	○ 陶器盤(1点のみ)、土師坏(1点)	
203-3	II 区 潟	SD			12世紀中頃～後半	○ 須恵器大器(3点 全て別個体)、須恵器蓋(3点)、土師皿(1点)	
203-3上層	II 区 潟	SD			12世紀中頃～後半	○ 須恵器蓋(3点)、須恵器蓋(12世紀)、土師盤(1点)	
203-3中～下層	II 区 潟	SD			12世紀中頃～後半	○ 甕(1点)、土師坏(1点)、土師皿(1点)	
203-3下層	II 区 潟	SD			12世紀中頃～後半	○ 甕(1点)、土師坏(1点)、土師皿(1点)	
204	II 区 売乱		不整形	287×250×80	現代	コノクリート、模様木札、埴輪片、土師坏(多)、土師皿(多)、土師片(多)	
205	II 区 売乱		不整形	119×135×15	現代	甕(近現代)、陶器皿大皿、陶器碗、陶器燭台、白磁片IV類、土器皿、須恵器皿(2個体)、須恵器鉢(12世紀前)、絲織土器小片、黑色B類頸、瓦器盤、土師碗、土師坏(多 ハラ切りが多)、土師皿(1点)	白磁片、須恵器鉢、土師皿、瓦など大きな破片が多い
206	II 区 売乱		方形	153×(60+α)	現代	磁器皿(近現代)、陶器皿大皿、陶器碗、陶器燭台、白磁片、土質質火鉢(瓦近代)、土師坏(ヘラ切り)、器皿(1点)	
207	II 区 売乱		方形	169×134×36	現代	土師坏(ヘラ切り)、土器皿(系切り)、甕(1点)	
208	II 区 売乱		楕円形	38×28×20	現代	土器皿(1点)、土器片(1点 弥生)	
209	II 区 売乱		楕円形	119×91×13	現代	白磁片、陶器盤片、土師片(ヘラ切り)、甕(1点)	
210	II 区 土坑	SK	楕円形	98×90×5	不明	土器皿片(5点)	
211	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	34×31×6	古代末～中世前半	土師坏(系)、土師皿(系)	
212	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	40×19×4	不明	土器皿片(1点)	
213	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	36×35×5	弥生時代?	土器皿片(2点 同一個体 弥生時代か)	
214	II 区 売乱		漫状	幅11cm	現代	土器皿片(1点)	
215	II 区 柱穴状遺構	SP	不整形		古代末	土器皿片(7点 弁持文)、滑石製石鍋片	
216	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	34×31×3	近世～近代	陶器盤片(1点)	
217	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	(30+α)×27×2	不明	土器皿片(1点)	
218	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	53×36×33	古代末	瓦器皿、土師碗(ヘラ・糸)、土師皿(系切り)、土器小片(多)	土器は小片多く摩滅している
219	II 区 売乱		長方形	190×180×32	現代	土師坏(系切り)、土師皿(糸切り)、黒色土器B類、甕(突蒂文)、土器小片(弥生土器)	
220	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	31×30×5	古田末	土師質(糸)、甕(1点)	
221	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	36×29×25	弥生時代?	土器片(1点 弥生時代)	
222	II 区 売乱		楕円形?	140×(121+α)×51	現代	土師坏(ヘラ切り)、土師皿(糸)	
223	II 区 柱穴状遺構	SP	隅丸方形状?	22×(19+α)×11	不明	土器片(1点)	
224	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	33×26×16	不明	須恵器蓋(1点)、土器片(5点)	SP226を切る
225	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	38×30×23	不明	白磁碗 II類(1点)、白磁片(1点)、須恵器(1点)、土師坏(1点)、弥生土器(2点)	根石あり SP253を切る
226	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	58×52×38 柱痕径14cm	11世紀末～12世紀	土師坏?、土師皿(糸)	II-1区、II-2区にまたがる SP330と同一遺構
227	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	54×45×11	不明	土器片(1点)	
228	II 区 柱穴状遺構	SP	楕円形	(30+α)×30×10	不明	土器片(1点)	
229(330)	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	41×37×17	古代末	土師坏?、土師皿(糸)	
230	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	43×35×20	13世紀	龍泉窯系青磁碗 II類、白磁碗IV類、陶器盤片、土師坏(ヘラ・糸)	
231	II 区 柱穴状遺構	SP	円形	36×35×5	12世紀	白磁碗 IV類(1点)、土師坏(1点)、甕(1点)、土器片(1点)	

表5 第28次調査遺構一覧3

表6 第28次調査遺構一覧4

遺構番号	性格	略号	形状	大きさ	時代	報告	○は遺構報告有り。△は遺物のみまたは文章のみ、□は平成25年度報告予定	備考
289	II 区 土坑	SK	隅丸方形容	114×106×100	近代		陶器(瓶、皿、碗、近世)、白磁碗IV類、磁器紅皿、陶器蓋、陶器鉢、瓦器碗、土師碗、土師杯(多、ヘラ切り)、土師皿(多、糸切り)、土師質火鉢?、土器片(弥生土器)、土鐘	SP362を切る
290	II 区 包含層?		不整形	約270×200×5	近世以降		越州窯系青磁碗(点)、須恵器大皿、須恵器蓋、土師碗、土師杯、土師皿(糸切り)、黒色B類頬、甕(突蒂文)、土器片(縄文時代晚期~「弥生時代前期・小片多、瓦・近世以降」)	
291	II 区 溝	SD		現代	土師碗、土師皿(瓦・近世?)、土器片(3点)			
292	II 区 溝	SD	最大幅76、深さ21	近世?	□	白磁碗(近世)、磁器碗(近世)、攝り鉢(近世)、陶器鉢、陶器蓋、須恵器鉢(12世紀)、土師碗、土師皿、土器片(縄文時代~弥生土器か)		
293	II 区 溝	SD	最大幅70cm、深さ9cm	近世		土師鉢(3点、同一個体)		
294	II 区 潜乱			現代				
295	II 区 土坑	SK	長方形	(90+α)×92×32	12世紀中頃~後半	○	越州窯系青磁碗、白磁碗V類、「白磁碗?・瓦(土師質)、土器片5点)	
296	II 区 潜乱		方形	79×71	現代		陶器蓋? (現代)、瓦質鉢、瓦質碗、黒色B類頬、土師碗、土師杯、土師皿、甕(弥生時代)、土器片(弥生時代・古代)	
297	II 区 井戸	SE	横円形容		12世紀前半	○	白磁碗IV類、V類、須恵器大皿(桔子・平行)、須恵器蓋、陶器鉢(12世紀中頃?)、陶器片(多)、須恵器皿、瓦質碗(12世紀前半?)、瓦質小碗、土師碗(多)、土師杯(多、ヘラ切りが多)、土師皿(多、多くがヘラ切り)、弥生土器片(小片多、何は違う)、甕(追加)、甕(突蒂文)、土器片(中期後半)、石器片、黒色A類頬	SE320に切られる
297上層	II 区 井戸	SE	横円形容		12世紀中頃	○	白磁碗IV類(多)、V-4C、圓頬、白磁碗、線輪土器(小片)、陶器鉢、陶器蓋、須恵器大皿、須恵器皿、瓦質皿、瓦質碗、椀(小片多)、黒色B類頬、土師碗(12世紀)、土師杯(多、ヘラ切りが多)、土師皿(多、ヘラ切りが多)、土師鉢、石鍋、甕、弥生土器(中期後半)、中期後半甕(追加)、赤色顔料塗布(小片)	
297井筒	II 区 井戸	SE	横円形容		12世紀中頃	○	白磁碗IV類、瓦白小片、土師碗、黑色B類頬、土師皿(ヘラ切り)、糸切り半々)、瓦器碗、弥生土器片(小片)	
297掘方	II 区 井戸	SE	横円形容		12世紀中頃	○	瓦器碗(1点のみ)、土師碗(ヘラ切り)、土師皿(小片多)	
297下層	II 区 井戸	SE	横円形容		12世紀中頃	○	瓦器碗(12世紀)、黒色土器類頬、土師皿(ヘラ切り)、瓦器碗、土師杯(ヘラ切り)、須恵器皿、土器片(1点)、石鍋片	
297一段下げる	II 区 井戸	SE	横円形容		12世紀中頃	○	土師碗、土師皿、土器片、弥生土器片(小片のみ)、1点赤色顔料塗布)	
298	II 区 潜乱			現代			磁器片(現代)、弥生土器片(4点)	
299	II 区 井戸(瓦組)	SE	横円形容	135×114	近現代		磁器皿(1点 近現代)	
300	II 区 土坑	SK	不整形横円形容	159×117×39	近代		七輪、土師碗(ヘラ切り)、土師皿(多 糸切り)	
302	II 区 潜乱		長方形	131×(44+α)	現代		土師碗(?)、1点)、甕(突蒂文)	
303	II 区 潜乱(埋設管)		溝状	最大幅50cm	現代		須恵器(甕か)、土師碗、土師杯、土師皿(多、ヘラ切りが多)、土師鉢、石鍋、甕、弥生土器(中期後半)、中期後半甕(追加)、赤色顔料塗布(小片)	
304	II 区 溝	SD		長370+α、幅103、深25	11世紀末~12世紀初め	○	白磁碗V類、V類、須恵器大皿(桔子・平行)、須恵器蓋、陶器鉢(12世紀中頃?)、陶器片(多)、須恵器皿、瓦質碗(12世紀前半?)、瓦質小碗、土師碗(多)、土師杯(多)、土師杯(多、ヘラ切りが多)、土師皿(多、多くがヘラ切り)、弥生土器片(小片多、何は違う)、甕(追加)、甕(突蒂文)、土器片(中期後半)、石器片、黒色A類頬	
305	II 区 土坑	SK	不整形横円形容	113×102×7	弥生時代中期前半?	○	土器片(20点、弥生時代前半後半~中期前半)	
306	II 区 土坑	SK	不整形?	(84+α)×107×17	12世紀後半~13世紀	○	白磁碗V類、陶器類、須恵器鉢、土師碗(多 糸)、土師皿(多 糸)	土師皿の小片多い。
307	II 区 包含層?		不整形	187×74×7	古代末~中世前半		瓦器碗、土師皿(小片多 糸切り)、甕(縄文晚期~弥生時代前期)、土器片(多 繩文晚期~弥生時代)	
308	II 区 柱穴状遺構	SP	方形?	52×(24+α)×10	古代末~中世		瓦器皿(1点)、土師碗(1点)、土器片(4点)	
309	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	31×19×8	不明		陶器片(1点)	
310	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	41×31×8	古代末~中世		土師杯(2点 糸切り)、土師皿(1点 糸切り)、土器片(4点)	
311	II 区 溝?	SD		最大幅34 深さ6cm	古代末~中世		土師碗(?)、土師皿(?)、甕(弥生中期)、甕(突蒂文)、土器片(多くは弥生前期か)、鉢、铁滓、黑曜石(2点)	
312	II 区 包含層?	SX	不整形	(172+α)×(130+α)×2	弥生時代		土器片(1点 いずれも弥生時代か)	
313	II 区 土坑	SK	不整形横円形容	(113+α)×98×21	12世紀後半~13世紀	○	土師碗(?)、土器片(小点)	
314	II 区 土坑	SK	不整形	168×78×13	12世紀後半	○	青磁碗、土師碗(ヘラ)、土師皿(糸切り)、黒色B類頬、弥生土器片	
315	II 区 潜乱			現代			ガラス(現代)、土師碗(ヘラ)、土器片	
316	II 区 潜乱		隅丸長方形	145×(86+α)×14	現代		陶器片、土師碗(破片多 糸切り)、瓦質土器、土器片	
317	II 区 井戸	SE	不整形形容		11世紀中頃~後半	○	須恵器鉢?、土師碗(底部はナゲが点、ヘラ切りが点)、黒色B類頬、土師碗(破片多)、鉢、铁滓、黑曜石(2点)	
318	II 区 井戸	SE	円形容	93× ×	11世紀中頃~後半	○	須恵器鉢?、土師碗(5点、ヘラ切り)、土師碗、土器皿、甕(突蒂文)?、甕(弥生時代前期)、土器片(现代)、铁滓(2点)	
319	II 区 土坑?	SK	不整長方形	177×143×8	古代		土師碗、土師杯、弥生式土器(破片多數、ほとんどが前期の甕)、黑曜石	SE287-SD247に切られる
320	II 区 井戸	SE	横円形容		12世紀中頃	○	越州窯系青磁碗(1-Ⅱ類)、白磁碗(1-Ⅱ類?)、須恵器皿(4個体以上)、須恵器蓋、須恵器皿(丸)、須恵器皿(?)、須恵器皿(4個体以上)、須恵器皿(?)、須恵器皿(?)、須恵器皿(?)、土器片(多 弥生土器、土器質土器)、鉢(刀子型)	SE287を切る
321	II 区 潜乱		長方形	141×85×8	現代		土器片(3点)	
322	II 区 土坑	SK	溝状		古代	○	白磁片、須恵器大皿、土師碗、土師杯、弥生土器片、黑曜石	いずれも小片
323	II 区 土坑	SK	不整形	147×75×18	近現代		磁器片(近現代)、陶器製土管(近現代)、須恵器蓋、土師碗、土師杯、土器片(弥生土器片、土器片(1点)、土器片(1点)、土器片(1点))	擾乱に切られる
324	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	31×29×11	古代末~中世		土師皿(1点)、土器片(1点 弥生時代)	SE297を切る
325	II 区 井戸	SE			12世紀中頃	○	白磁碗 II-IV類、白磁碗(IV-2a~不明 小片)、白磁片(小片)、陶器皿(?)、甕(?)、甕(突蒂文)、土器片(5点)	SE229と同一遺構
326	II 区 潜乱		方形	71×(61+α)×16	現代		弥生土器片(7点)、土器片(2点 古代か)	
327	II 区 潜乱		隅丸形容		現代		土器片(小片)	
328	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	43×(18+α)×46	不明		土器片(1点)	
329	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	(42+α)×(26+α)×30	不明		土器片(2点)	
330(229)	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	41×37×17	古代末		土師碗(2点)、土師皿(1点)、土器片(5点)	SP229と同一遺構
331(233)	II 区 土坑	SK	方形	148×135×16	16世紀		白磁碗(1点)、瓦器皿(2点 古代か)	SK233と同一遺構
322	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	22×19×29	古代末~中世		土器片(小片)	
323	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	28×21×10	古代末~中世		土師碗(1点 糸切り)、土器片(不明)	
324	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	(32+α)×16×15	不明		土器片(1点 土師碗口縁付)	
325	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	26×20	古代末から中世		土師皿(多 糸切り)、土器片(古代末~中世)	いずれも小片
326	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	25×23×52	古代末~中世		陶器片(1点)、土師碗(1点)、土器片(1点)	SE287に切られる
327	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	26×20×12	不明		土師碗(1点)	
328	II 区 潜乱		旧水道管		現代		モルタル、陶器(現代)、土器片(弥生土器)	
329	II 区 潜乱		旧水道管		現代		陶器片、白磁碗?、須恵器鉢(時期不明)、土師碗、土師杯(糸切り)、瓦器碗、甕	
340	II 区 柱穴状遺構		不整形		古代末~中世		甕(突蒂文)、土器片(6点)	根石あり
341	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	26×21×5	弥生時代前期後半~中期前半		龍泉窯系青磁碗(1点)、土師碗(4点 糸切り)、土師皿(1点 糸切り)	SE287-SP344に切られる
342	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	23×20×10	弥生時代		土器片(1点 弥生時代?)	
343	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	31×28×9	不明		土器片(1点)	
344	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	38×26×19	古代末~中世		土師碗(1点 糸切り)、土器片(7点)	
345	II 区 柱穴状遺構	SP	隅丸形容	(57+α)×56×5	不明		須恵器片(1点)、土器片(10点)	SE287-SP344に切られる
346	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	24×23×8	12世紀中頃		龍泉窯系青磁碗(1点)、土師碗(4点 糸切り)、土師皿(1点 糸切り)	
347	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	25×22×20	古代末~中世		土師碗(1点 糸切り)、土師皿(1点 糸切り)、土器片(10点)	SP348を切る
348	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	(22+α)×24×17	古代末~中世		土師碗(2点)、土師皿(2点)、土器片(2点)	SP347に切られる
349	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	21×18×18	古代末~中世		土師碗(1点)、土師皿(1点)、土器片(1点)	
350	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	65×(51+α)×4	不明		土師碗(1点 糸切り)、土師皿(糸切り)、甕(弥生時代前期)、土器片(1点)	
351	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	42×37×8	近世以降		磁器碗(2点)、近世以降、土器片(1点)	
352	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	30×29×39	不明		土器片(6点)	
353	II 区 潜乱		長方形	149×92×29	現代		染付碗(多)、白磁片、白磁碗 V類、白磁紅皿、陶器蓋、瓦器碗、急須(陶器)、土師杯(糸切り)、土器片、土器皿、鉢、銚子	
354	II 区 現代水道管理設営				現代		白磁(時期不明)、陶器片(近現代)、陶器大皿、瓦(現代)、土師碗、土師杯(糸切り)、土師皿(糸切り)、板(板付式)、甕(破片多 突蒂文、その他)、土器片(弥生土器)、土質質土器	
355	II 区 土坑(便所裏)		不整形円形容	99×100×58	近代		磁器小碗、土師碗(糸切り?)、土師皿(糸切り)、土器片	
356	II 区 柱穴状遺構		横円形容	(29+α)×21×23	古代末		土師碗(3点 糸切り)、土器片(4点)	
357	II 区 柱穴状遺構	SP	方形	39×31×19	近世以降		白磁片(1点 近世?)	
358	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	(58+α)×48×8	弥生時代		甕(弥生時代)	
359	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	17×16×4	不明		土器片(1点)	
360	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	43×42×16	不明		土師碗(1点 糸切り)、土器片(不明)	
361	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	62×32×48(柱掘り込み2方所)	近世		陶器片(1点)、土師皿(1点 糸切り)、土器片(弥生前期甕)	柱痕跡(径7cm)
362	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	(32+α)×26×17	中世		陶器片(1点)、瓦器碗(1点)、土師碗(1点)、土器片(7点)	
363	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	(26+α)×29×40	不明		土師碗(1点)、土器片(4点)	
364	II 区 柱穴状遺構	SP	横円形容	33×21×15	近現代		土師碗(1点)、土師皿(1点 糸切り)、瓦(1点 近現代)、土器片(3点 弥生か)	
365	II 区 柱穴状遺構		横円形容	64×43×25	近世			
366	II 区 土坑	SK	円形容?	(52+α)×(58+α)×20	11世紀中頃以前	○	土師碗?、甕(?)、甕(?)、土器片(1点)、土器皿(糸切り?)、土器片(1点)、土器皿(糸切り)	SE317に切られる
367	II 区 柱穴状遺構		円形容?	(32+α)×45×40	近世以降		青磁片(1点 時期不明)、土器片(4点)	361-365に切られる
368	II 区 柱穴状遺構	SP	直径37cm、深さ11cm		古代末			
369	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	28×25×4	弥生時代中期		須恵器蓋、土師碗	
370	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	18×17× × 不明	不明		大型甕(弥生時代中期)	
371	II 区 柱穴状遺構	SP	円形容	32×29×40	弥生時代前期		土器片(4点)	
372(203-3区上層土器溜まり)	II 区 土器皿集中出土土坑	SK	不整形	140×80×	12世紀中頃~後半	△	甕口縁(突蒂文)、土師碗(多 糸切りが多い)、土師皿(多 糸切りが多い)、須恵器底部小片、陶器片、白磁碗 V類	SD203-272を切る

## 6. 原遺跡第28次調査出土井戸枠材の樹種同定

黒沼保子・佐々木由香（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

福岡県福岡市に位置する原遺跡の第28次調査で出土した井戸枠の樹種同定を行った。

### 2. 試料と方法

試料は、3基の井戸枠に使用されていた木材である。1基ごとに任意に2試料を選び、樹種同定試料とした。試料の内訳は、SE235の桶1段目No.5と桶2段目No.19、SE236の井戸枠No.1とNo.30、SE387の井戸枠No.7とNo.8、計6点である。SE235とSE236の井戸枠は桶、SE287は木組みであり、時期は3基とも12世紀中頃～後半で13世紀までは下らないと考えられている。これらの試料から、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。光学顕微鏡で観察・同定と写真撮影を行った。

### 3. 結果

樹種同定の結果、試料はすべてスギであった。また、木取りはすべて板目であった（表7）。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真をFig1に示す。

- (1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1 1a-1c(SE287 No.7)、2c(SE235 No.5)、3c(SE235 No.19)、4c(SE236 No.1)、5c(SE236 No.30)、6c(SE287 No.8)

仮道管と、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急か穏やかで、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。スギは暖帯から温帯下部に生育する常緑高木である。比較的軽軟で切削加工は容易であり、割裂性が大きい。

### 4. まとめ

本遺跡で同定された井戸枠材はすべてスギであった。この3基に使われている他の井戸枠材もスギの可能性が高い。九州地方における中世の井戸用材としては、刳貫き井戸では広葉樹のクスノキ、曲物井戸では針葉樹のヒノキとモミ属が多く確認されている。また、福岡県中村遺跡から出土した板組井戸では、隅柱と桟木はすべてシイ属、側板はシイ属主体でクスノキが少数確認されていた。福岡県内から出土した井戸枠では、弥生時代中期の有田遺跡3次と、古墳時代末期～平安時代初期の東那珂遺跡、鎌倉時代から室町時代前半の下月隅C遺跡でスギの利用が確認されているが（伊東・山田編、2012）、本遺跡のSE235とSE236のような桶の井戸枠でスギの利用は確認されていない。今後、分析例が増加すれば井戸枠の形状ごとに木材利用の傾向がより明確になる可能性がある。

表7 樹種同定結果

遺構	No.	樹種	木取り
SE235	5	スギ	板目
	19	スギ	板目
SE236	1	スギ	板目
	30	スギ	板目
SE287	7	スギ	板目
	8	スギ	板目

### 引用文献

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－、449p、海青社。

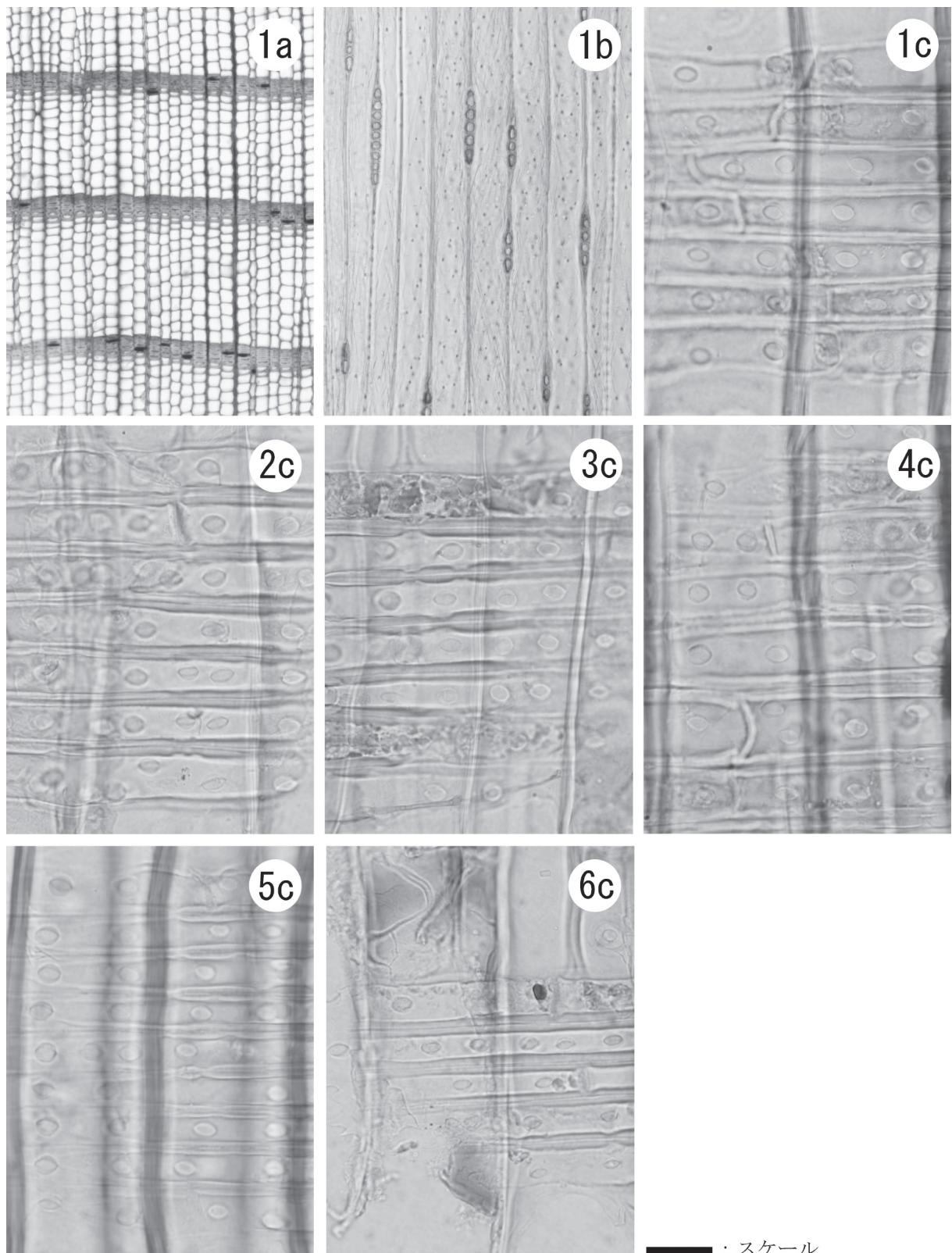


Fig1 原遺跡出土井戸枠材の光学顕微鏡写真

1a-1c. スギ (SE287 No.7)、2c. スギ (SE235 No.5)、3c. スギ (SE235 No.19)、4c. スギ (SE236 No.1)、5c. スギ (SE236 No.30)、6c. スギ (SE287 No.8)

a:横断面(スケール=250  $\mu$  m)、b:接線断面(スケール=100  $\mu$  m)、c:放射断面(スケール=25  $\mu$  m)

## 7. 原遺跡第28次調査から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

福岡市早良区に位置する原遺跡は、金屑川と油山川の間の狭い微高地上に立地する複合遺跡である。ここでは、古代～近代初頭の井戸などから出土した種実を同定し、周囲の植生や利用植物を検討した。

### 2. 試料と方法

試料は、水洗試料12試料と水洗済み試料1試料、現地取り上げ試料3試料である。いずれも井戸や溝などの遺構内から採取された。遺構の時期は、井戸であるSE007が11世紀末～12世紀前半、SE078が11世紀後半、SE236が12世紀中頃～後半、SE271が近世、SE286が近世後半～近代初頭、SE287（井筒と井筒内として採取された2試料）が12世紀中頃～後半、SE297が12世紀中頃、SE317が11世紀後半、SE325が12世紀中頃、溝であるSD202と、SD202からつながる池状遺構のSX263が近世と考えられている。

水洗試料の堆積物水洗量は最大300cc（SE007のみ2試料相当分の550cc）とし、300ccに満たない試料はほぼ全量を水洗した。水洗は、最小0.5mm目の篩を用いてパレオ・ラボで行った。それぞれの試料について、肉眼および実体顕微鏡下で大型植物遺体の抽出と同定、計数を行った。計数が困難な試料は、記号（+）で示した。試料は、福岡市教育委員会に保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物では針葉樹のスギ葉とクロマツ球果、マツ属複維管束亞属葉の3分類群、広葉樹のエノキ核と、クワ属核、ヒサカキ属核、サンショウ属種子、モモ核、アカメガシワ種子、センダン核、クロガネモチ核、ツタ種子、タラノキ核、チシャノキ種子、オオカメノキ種子、ガマズミ属種子の13分類群、草本植物ではアサ核と、カラムシ属果実、ミズ属果実、ミズヒキ果実、ヤナギタデ果実、イヌタデ果実、ボントクタデ果実、サナエタデー・オオイヌタデ果実、タデ属A果実、タデ属B炭化果実、ギシギシ属果実、スペリヒュ属種子、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、ミドリハコベ種子、アカザ属種子、キケマン属種子、タネツケバナ属種子、キジムシロ属果実、ハギ属炭化種子、シャジクソウ属種子・炭化種子、カタバミ属種子、エノキグサ属種子、トウダイグサ属種子、ノブドウ種子、スミレ属種子、メロン仲間種子、ヒヨウタン仲間種子、カラスウリ種子、アリノトウグサ属種子、ヤブジラミ総苞、オカトラノオ属種子、キランソウ属果実、メハジキ属果実、シロネ属果実、イヌコウジユ属果実・炭化果実、シソ属果実、ナス種子、ナス属種子、メナモミ属果実、コナギ種子、ヘラオモダカ果実、メヒシバ属果実、ヒエ炭化種子、イヌビエ属有ふ果・炭化種子、イネ穀殼・炭化穀殼・炭化種子、エノコログサ属有ふ果、オオムギ炭化種子、オオムギ・コムギ炭化種子、イネ科炭化種子、スゲ属果実、カヤツリグサ属果実、ハリイ属果実、ホタルイ属果実の54分類群の計70分類群が見いだされた。同定の識別点を欠く種実を同定不能炭化種実とした。種実以外には、炭化した子囊菌と生の昆虫遺体がみられたが、同定の対象外とした（表8、9）。

以下に、産出した主な種実について遺構別に記載する（同定不能炭化種実と子囊菌、昆虫は除く）。  
SD202：種実はほとんど含まれていなかった。栽培植物では、メロン仲間とイネがわずかに得られた。  
SE007：アカザ属がやや多く、イヌタデとキケマン属、メヒシバ属が少量得られた。これ以外の分類群は、産出数が10点以下であった。栽培植物ではアサとイネ（穀殼・炭化穀殼・炭化種子）がわ

表8 原遺跡から出土した大型植物遺体1（水洗試料；括弧内は破片数）

分類群	水洗量(cc)	造構名		SD202	SE007	SE078	SE236	SE286	SE287	SE297	SE317	SX263
		層位	底面黒色土	最下層黒色土		井筒下層土	井筒		井筒内	井筒	トレンチ底面	
				近世	11世紀末～12世紀前半	11世紀後半	12世紀中頃～後半	近世後半～近代初頭	12世紀中頃～後半	12世紀中頃	11世紀後半	近世
スギ	葉		葉	170	550	230	300	300	250	250	300	300
マツ属複維管束亜属	葉		葉								1	1
エノキ	核					(1)					5 (3)	2 (2)
クワ属	核											(2)
ヒサカキ属	核	2			(2)		2 (1)			1		1
サンショウ属	種子						1			1 (2)		21 (6)
アカメガシワ	種子						8				2	5
センドン	核										5	3
クロガネモチ	核	1									1	
ツタ	種子										2	1
タラノキ	核										5	3
チシャノキ	種子						1				3 (1)	
オオカメノキ	種子										2 (1)	2 (2)
ガマズミ属	核											
アサ	核		1 (1)			(2)					(5)	
カラムシ属	果実							2				
ミズ属	果実								13 (1)		7	2
ミズヒキ	果実										1	
ヤナギタデ	果実											
イヌタデ	果実	21 (5)	1	12 (1)			1 (2)	(3)		1	1	1
ポンクトクタデ	果実								1 (3)			
サナエタデ-オイヌタデ	果実									(1)		
タデ属A	果実											
ギシギン属	果実	1	2				(1)		1		9 (7)	6 (7)
スペリヒュ属	種子	2		9 (1)			48 (9)	7 (1)			1	
ノミノフスマ	種子	8	2	2			1				13	
ウシハコベ	種子	1	4	4			9	5 (1)	21 (2)	25 (3)	1	2
ミドリハコベ	種子	8 (1)		9 (1)			4 (3)		32 (7)	(1)	1	
アカザ属	種子	61 (10)	21 (9)	7 (3)			3 (2)	2	10 (7)	20 (7)		
キケマン属	種子	20		10			52 (28)	16 (16)	7 (5)	37 (25)		
タネヅケバナ属	種子	1	4	6 (2)				4		30		4
キジムシロ属	果実									1		11
ハギ属	炭化種子											
シャジクソウ属	種子										11	1
カタバミ属	炭化種子											
エノキグサ属	種子	6		2	20		1	4 (5)		2	22 (1)	1
トウダイグサ属	種子	1 (2)		1 (1)						1 (3)		3
ノブドウ	種子											3 (1)
スミレ属	種子		(1)					(1)		1		(1)
メロン仲間	種子	(2)										
カラスウリ	種子		1									
アリノトウグサ属	種子	1						2				
ヤブジラミ	総苞		(4)	1								
オカトラノオ属	種子	4										
キランソウ属	果実		(1)									(2)
メハジキ属	果実										1	
シロネ属	果実										2	
イヌコウジュ属	果実											
シソ属	果実	1 (1)								1 (2)	12 (11)	
ナス属	種子			2			1	(1)		3	3	2
メナモミ属	果実						5					
コナギ	種子	2									1	
ヘラオモダカ	果実											
メビシバ属	果実	10 (4)	1	(1)	1 (1)		2 (2)			4 (1)		1
イヌビエ属	有ふ果											
イネ	炭化種子		1					1				
エノコログサ属	穀殻	(1)	(5)	(30)	1 (2)		(6)	(41)	(8)	(2)	(6)	(31)
オオムギ	炭化穀殻	(1)	(2)	(37)	(3)		(13)	(43)	(48)	(5)		
オオムギ-コムギ	炭化種子	(1)	(1)	(2)	2 (4)		(1)	(7)	3 (3)	2 (3)	1	
スゲ属	果実		5						2 (3)			
カヤツリグサ属	果実											
ハリイ属	果実	1	3				8	5	4	3		1
ホタルイ属	果実						(1)	1	1			
同定不能	炭化種実			(1)	(5)			(9)	(15)			
子囊菌	炭化子囊					1						
昆虫	(++)	(++)	(+)	(++)			(++)	(++)	(++)	(++)	(++)	(++)

1-9+++, 10-49+++, 50-99+++

ずかに得られた。

SE078：アカザ属とイネ（穀殻・炭化穀殻）が少量得られた。これ以外の分類群は、産出数が10点以下であった。栽培植物ではイネ（炭化種子）とオオムギ-コムギがわずかに得られた。

SE236: イヌタデとカタバミ属が少量得られた。これ以外の分類群は、産出数が10点以下であった。栽培植物ではアサとイネ（穀殻・炭化穀殻・炭化種子）がわずかに得られた。

SE271：クロマツが1点得られた。

SE286：同定可能な種実は得られなかった。

SE287：スペリヒュ属とキケマン属、イネ（糊殻・炭化糊殻）がやや多く、ウシハコベとイネ（炭化種子）、カヤツリグサ属が少量得られた。これ以外の分類群は、産出数が10点以下であった。栽培植物ではアサとメロン仲間、ナス、ヒエ、オオムギ、オオムギーコムギがわずかに得られた。

SE297：ミズ属とギシギシ属、ウシハコベ、アカザ属、キケマン属、イネ（炭化糊殻）が少量得られた。これ以外の分類群は、産出数が10点以下であった。栽培植物ではモモとイネ（炭化種子）、オオムギがわずかに得られた。

SE317：キケマン属がやや多く、ウシハコベとミドリハコベ、アカザ属、タネツケバナ属、カタバミ属、シソ属が少量得られた。これ以外の分類群は産出数10点以下であった。栽培植物ではアサとイネ（糊殻・炭化糊殻・炭化種子）がわずかに得られた。

SE325：ヒヨウタン仲間が少量得られた。

SX263：ヒサカキ属が多く、キジムシロ属とシャジクソウ属、イネが少量得られた。これ以外の分類群は、産出数が10点以下であった。栽培植物ではメロン仲間がわずかに得られた。

次に、主要な大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylozon* 葉 マツ科

茶褐色で、側面観は針形、断面形は半円形で、先端は残存していない。2葉が残り、基部は膨らむ。残存長7.0mm、幅1.7mm。完形ならば長さ7～12cmになる。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが含まれる。

(2) クワ属 *Morus* spp. 核 クワ科

赤褐色で、側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形、断面形は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ2.0mm、幅1.4mm。

(3) モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は橢円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。長さ26.5mm、幅20.5mm、厚さ15.3mm。

(4) クロガネモチ *Ilex rotunda* Thunb. 核 モチノキ科

明褐色で、側面観が半円形で上下は尖り、横断面は扇形で角がある。脈状隆線が顕著に入る。長さ5.1mm、幅1.6mm。

(5) チシャノキ *Ehretia acuminata* R.Br. var. *obovata* (Lindl.) I.M.Johnst. 種子 ムラサキ科

暗褐色で、上側面観は倒卵形、断面は狭扇形。縦方向に浅い脈状隆線がある。下端に着点がある。長さ2.7mm、幅2.6mm。

(6) ガマズミ属 *Viburnum* sp. 核 スイカズラ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は先端がやや尖る卵形。表面には縦方向の1本の隆起がある。長さ6.4mm、幅4.3mm。

分類群	時期	表9 原跡から出土した大型植物遺体2（水洗済・現地取り上げ試料；括弧内は破片数）			
		SE271 (SX263の一部)	SE287	SE297	SE325 井筒
クロマツ	球果	1			
モモ	核			1	
アサ	核		(5)		
ヤナギタデ	果実		4 (4)		
イヌタデ	果実		3		
タデ属A	果実		1		
タデ属B	炭化果実				
アカザ属	種子			1	
キケマン属	種子			(2)	
カタバミ属	種子			8 (1)	
エノキグサ属	種子			1	
メロン仲間	種子			3 (1)	
ヒヨウタン仲間	種子			(2)	
ナス	種子				12
ナス属	種子		6 (1)		
ヒエ	炭化種子		4		
イネ	炭化糊殻		1		
オオムギ	炭化種子			5 (12)	
イネ科	炭化種子			1	
ハリイ属	果実			1 (1)	
ホタルイ属	果実			8 (1)	
同定不能	炭化種実			(4)	
昆虫				(++)	
	10-49:++				

(7) アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

明褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端には突出した大きな楕円形の着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ 4.5mm、幅 3.5mm、厚さ 3.5mm。

(8) シヤジクソウ属 *Trifolium* sp. 種子 マメ科

赤褐色で、上面観は楕円形、側面観は腎形。側面中央に円形の臍がある。微細な網目状隆線がある。長さ 1.6mm、幅 1.3mm。

(9) トウダイグサ属 *Euphorbia* sp. 種子・炭化種子 トウダイグサ科

黒色で、倒卵形。基部側面に目立つ窪みをもつ。種皮は硬い。種皮は、内側で屈曲する柵状細胞からなる。長さ 3.1mm、幅 2.4mm。形状がナットウダイやタカトウダイに似ているため、草本植物とした。

(10) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

黄褐色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下（1984）は、種子の大きさからおおむね次の 3 群に分けられるとしている。長さ 6.0mm 以下は雑草メロン型、長さ 6.1～8.0mm はマクワウリ・シロウリ型、長さ 8.1mm 以上はモモルディカメロン型である。今回産出したメロン仲間種子の大きさは長さ 7.9mm、幅 3.7mm で、マクワウリ・シロウリ型であった。

(11) ヒヨウタン仲間 *Lagenaria siceraria* (Molina) Standl. 種子 ウリ科

淡黄褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象、先端は W 字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が 2 本走る。壁はややスポンジ質。長さ 12.4mm、幅 7.8mm。

(12) シソ属 *Perilla* spp. 果実 シソ科

黒褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。エゴマ以外のシソ属である。長さ 1.7mm、幅 1.5mm。

(13) ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

淡褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ 2.8mm、幅 3.3mm。ナス以外のナス属をナス属とした。

(14) コナギ *Monochoria vaginalis* (Burm.f.) C.Presl ex Kunth 種子 ミズアオイ科

茶褐色で、細い俵型の狭楕円体。先端に短い突起があり、基部には小さい着点がある。側面には 7～9 本の縦の隆条が規則的に走る。この隆条間には直行する細い横筋が多数並ぶ。長さ 1.0mm、幅 0.5mm。

(15) ヒエ *Echinochloa esculenta* (A.Braun) H.Scholz 炭化種子 イネ科

側面観が卵形、断面が片凸レンズ形で、厚みは薄くやや扁平である。胚は、長さが全長の 2/3 程度と長く、幅が広いうちわ型。長さ 1.8mm、幅 1.4mm。

(16) イヌビエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果・炭化種子 イネ科

有ふ果は黄褐色で、紡錘形。縦方向に細かい顆粒状の模様がある。壁は薄く弾力がある。長さ 1.8mm、幅 1.3mm。種子は上面観が扁平で、側面観が楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の 2/3 程度と長い。長さ 1.9mm、幅 1.5mm。有ふ果も種子も、栽培種であるヒエよりやや細長い形状で、野生のイヌビエに近い。

(17) イネ *Oryza sativa* L. 粉殻・炭化粉殻・炭化種子 イネ科

粉殻は赤褐色で、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 5.8mm、幅 3.0mm。種子は上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の深い溝がある。長さ 4.1mm、幅 2.6mm。

(18) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子 イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝があるが、溝の両端は欠損している。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は円形となる (Jacomet, 2006)。長さ4.0mm、幅2.0mm、厚さ1.6mm。状態が悪く、側面および断面構造が観察できなかった一群はオオムギーゴムギとした。

#### 4. 考察

古代から近代初頭の井戸や溝などの堆積物に含まれる大型植物遺体を検討した結果、1試料を除き、多数の種実が確認できた。以下、時期別に考察を行う。

##### [11世紀後半～12世紀後半]

この時期の大型植物遺体には遺構ごとの差があまりみられないため、一括して考察する。全体的に木本植物が非常に少ない。12世紀中頃～後半のSE236では、落葉高木のエノキやセンダンなどがわずかに得られているが、遺構周辺にはほとんど林分がなく、草地が多かったと考えられる。当時の原遺跡は溝によって区画された官衙的な集落であったと考えられており、林分が少なく草地が多いという状況は考古学的な所見と整合的である。

栽培植物では、イネの糊殻と種子が全遺構から一定量が得られている。糊殻は多くが炭化しており、糊摺後の糊殻を燃やした可能性や、井戸の祭祀に伴って炭化した可能性などが考えられる。井戸内では、水田や湿地に生育するコナギやヘラオモダカ、シロネ属、ヤナギタデなどもわずかに得られており、これらが井戸内に生育していたか可能性もあるが、水田や湿地からもたらされた可能性もある。ただし、調査区内および周辺遺跡では水田跡は確認されていない。

栽培植物のアサもSE007とSE236、SE287、SE317の井戸から得られており、11世紀後半から12世紀後半にかけて利用されていたと考えられる。周辺に畠地は確認されておらず、遺跡の性格を考えると、アサの纖維を取るために保管されていたのではなく、実自体の油などを利用するために保管されていた果実が堆積した可能性がある。ほかの栽培植物では、12世紀中頃～後半のSE287から得られたメロン仲間があり、マクワウリ・シロウリ型であった。畠作植物では、ナスやヒエ、オオムギも得られており、これらが周辺で利用されていたと考えられる。12世紀中頃のSE297から得られたモモとSE325から得られたヒヨウタンは井戸の祭祀に伴って入り込んだ可能性も考えられる。

草本植物では、道ばたや荒れ地に生育するウシハコベなどのハコベ属やアカザ属、スペリヒユ属、カタバミ属などが目立ち、井戸周辺に生育していた雑草類の種実が流れ込んだと推定される。

##### [近世]

溝であるSD202では、常緑樹であるヒサカキ属やクロガネモチがわずかに得られたものの、大型植物遺体はほとんど含まれていなかった。大型植物遺体が少なかった理由としては、水洗量が少なかった可能性や大型植物遺体が埋蔵されにくい堆積環境であった可能性などが考えられる。ただ、少ない中でも栽培植物のメロン仲間とイネがわずかに得られた。SD202の下流側につながる池状遺構であるSX263では、今回検討した遺構の中で木本植物が最も多く検出された。特に常緑低木であるヒサカキ属が多く、常緑高木のクロガネモチもわずかに得られたが、その他のほとんどは落葉樹であった。草本植物では、林縁に生育するミズ属やミズヒキ、キジムシロ属も確認されており、遺構周辺では落葉樹がある程度の林分を占めていたと考えられる。その他の草本植物では、湿地に生育するボン

トクタデやタネツケバナ属がわずかに得られているものの、量は少なく、ほとんどは遺構周辺の乾いた草地に生育していたと考えられるウシハコベなどのハコベ属やシャジクソウ属（いわゆるクローバーの仲間）などであった。栽培植物ではメロン仲間とイネが得られた。SX263 の一部である SE271 からはクロマツの球果が得られており、針葉樹も混じっていたと推定される。SD202 と SX263 の葉を同定したところ、常緑広葉樹のヤブニッケイとタブノキの 2 種のみが得られた（葉の同定の項参照）。したがって、遺跡周辺は照葉樹林が広がる植生で、池状遺構の周囲にのみ常緑樹に混じって落葉樹がある程度広がっていたと推定される。

近世後半～近代初頭である SE286 からは大型植物遺体は得られなかった。有機物が残存しにくい堆積物であったと推定される。

#### 引用文献

藤下典之（1984）出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法. 渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学－総括報告書」: 638-654, 同朋舎出版.

Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.

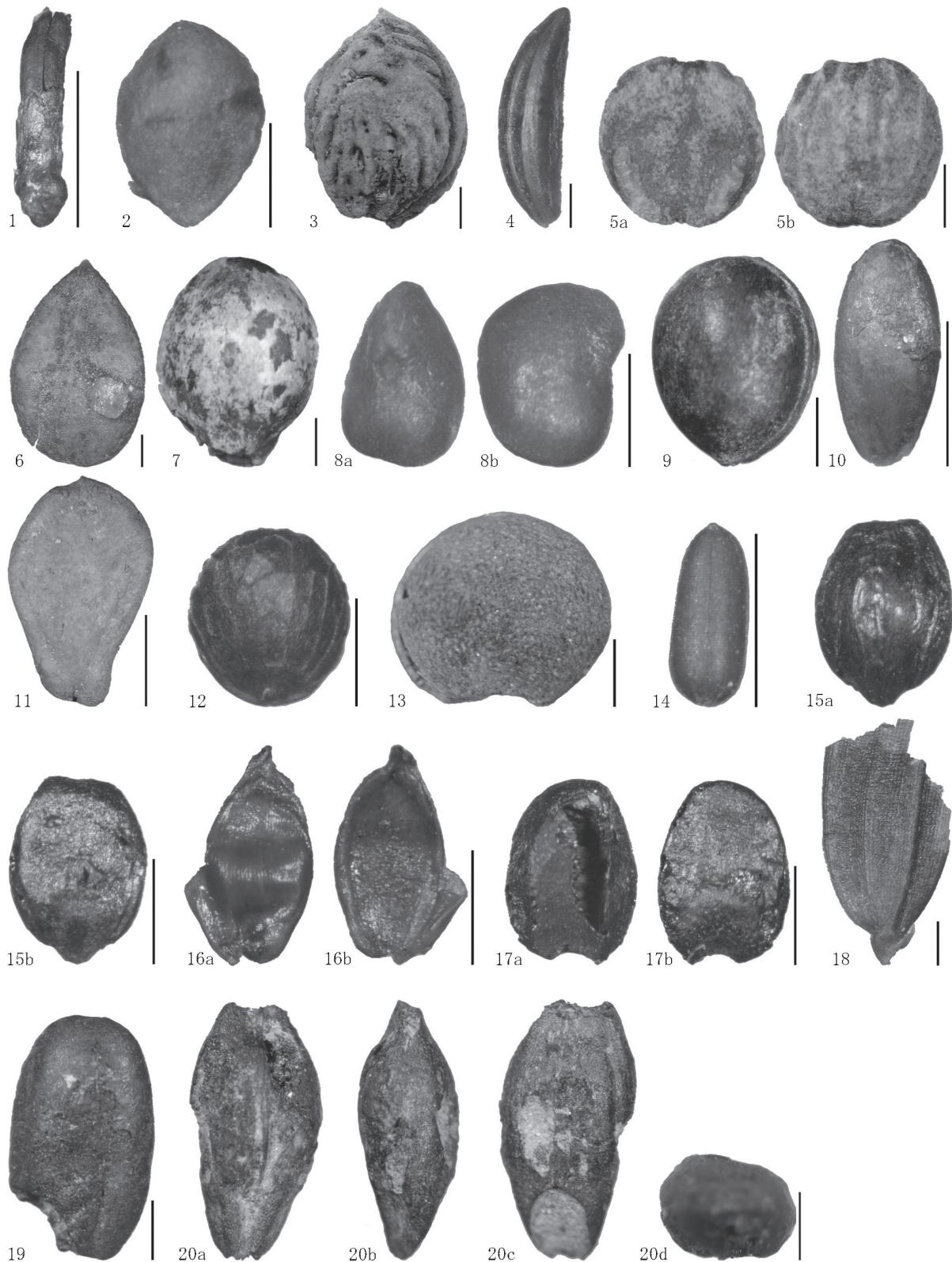


Fig2 原遺跡から出土した大型植物遺体

スケール 1, 3, 10, 11:5mm, 2, 4-9, 12-20:1mm

1. マツ属複維管束亜属葉 (SX263、下層)、2. クワ属核 (SX263、トレンチ底面)、3. モモ核 (SE297、井筒)、4. クロガネモチ核 (SX263、トレンチ底面)、5. チシャノキ種子 (SX263、トレンチ底面)、6. ガマズミ属核 (SX263、下層)、7. アサ核 (SE007)、8. シヤジクソウ属種子 (SX263、トレンチ底面)、9. トウダイグサ属種子 (SX263、トレンチ底面)、10. メロン仲間種子 (SE287、井筒内)、11. ヒヨウタン仲間種子 (SE325)、12. シソ属果実 (SE317)、13. ナス種子 (SE287)、14. コナギ種子 (SE287、井筒)、15. ヒエ炭化種子 (SE287)、16. イヌビエ属有ふ果 (SE317)、17. イヌビエ属炭化種子 (SE287、井筒内)、18. イネ穀殻 (SE236、井筒下層土)、19. イネ炭化種子 (SE297、井筒)、20. オオムギ炭化種子 (SE297、井筒)

## 8. 原遺跡第28次調査出土葉の同定

佐々木由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

原遺跡の第28次調査では、葉の堆積が良好な近世の溝とそれにつながる池状遺構が検出された。ここでは、出土した葉を同定し、周辺の植生について検討した。なお、同一遺構の堆積物を用いて大型植物遺体の同定も行われている（大型植物遺体の項参照）。同定にあたっては千葉大学大学院園芸学研究科百原新准教授のご教示を得た。

### 2. 試料と方法

試料は、溝であるSD202と池状遺構であるSX263（トレンチ底面）から採取された2試料である。葉が層状に集積しており、状態の良い部分を選んで堆積物ごとブロック状で取り上げられた。試料の時期は、近世と考えられている。

葉は、表面をクリーニング後、1試料あたり50枚を限度に同定可能なものを抽出した。1枚単位で任意に試料番号を付し、透明フィルム中にシーリングした。同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、福岡市教育委員会に保管されている。

### 3. 結果

同定の結果、広葉樹でクスノキ科のヤブニッケイとタブノキの2分類群が見いだされた（表10、付表11）。

以下、遺構ごとに記載する。

SD202：ヤブニッケイが3枚（7%）とタブノキが43枚（93%）同定された。

SX263：ヤブニッケイが20枚（40%）とタブノキが30枚（60%）同定された。

次に、各分類群の記載を行い、写真をFig3に示す。

(1) ヤブニッケイ *Cinnamomum tenuifolium* (Makino) Sugim. ex H.Hara 葉 クスノキ科

黄褐色で、長楕円形。先端は短く尖る。全縁で3脈が目立つ。2本の支脈は葉の先端まで達せず、肩のあたりの2/3程度の長さで消失する。革質。葉柄は短い。葉には精油細胞がある。長さ75.5mm、幅20.9mm (Fig1)、残存長65.9mm、幅31.0mm (Fig2)、長さ64.6mm、幅24.8mm (Fig3)、残存長49.7mm、幅18.1mm (Fig4)、残存長48.2mm、幅20.5mm (Fig5)。

(2) タブノキ *Machilus thunbergii* Siebold et Zucc. 葉 クスノキ科

黒褐色で、倒卵形状長楕円形。先端は短く尖る。基部はくさび形。革質で、表面に光沢がある。葉柄は長い。3次脈は併行する。葉には精油細胞がある。長さ90.7mm、幅30.8mm (Fig6)、残存長72.8mm、幅41.5mm (Fig7)、残存長71.5mm、幅34.0mm (Fig8)、長さ74.3mm、幅22.3mm (Fig9)、長さ50.9mm、幅20.0mm (Fig10)、長さ43.0mm、幅16.3mm (Fig11)。

表10 原遺跡から出土した葉遺体

分類群	時期	トレンチ底面	
		SD202	SX263
ヤブニッケイ	葉	3	20
タブノキ	葉	43	30

#### 4. 考察

近世の溝と池状遺構に堆積した葉を同定したところ、常緑広葉樹のヤブニッケイとタブノキの2種のみが得られた。タブノキはシイ属やカシ類とともに照葉樹林を代表する常緑高木である。ヤブニッケイはシイータブノキ林の二次林の構成種として多く見られる常緑高木である。

葉は遺存状態が良く、特に溝であるSD202から採取された葉は全体的に遺存状態が良好であった。そのため、遺構のごく近くには検出された2種の樹木が生育していたと考えられる。ただし、2遺構の堆積物から得られた大型植物遺体を検討したところ、葉遺体はSD202でスギ、SX263でスギとマツ属複維管束亜属（アカマツかクロマツ）が得られているのみで、今回検討した葉の組成とは全く異なっていた。種実遺体ではヒサカキ属やクロガネモチなどの常緑樹が混じる組成であった。SX263では、タラノキやガマズミ属などの落葉樹が比較的多かった（大型植物遺体の項参照）。以上の結果から、遺跡の周囲には常緑広葉樹林が広がっていたと推定され、池状遺構であるSX263の周囲には常緑樹に混じって落葉広葉樹がある程度生育していたと考えられる。

表11 葉遺体の同定結果一覧

試料No.	SD202	SX263
1	ヤブニッケイ	タブノキ
2	ヤブニッケイ	タブノキ
3	タブノキ	タブノキ
4	ヤブニッケイ	タブノキ
5	タブノキ	タブノキ
6	ヤブニッケイ	タブノキ
7	タブノキ	タブノキ
8	ヤブニッケイ	ヤブニッケイ
9	タブノキ	タブノキ
10	タブノキ	タブノキ
11	ヤブニッケイ	タブノキ
12	タブノキ	タブノキ
13	ヤブニッケイ	タブノキ
14	タブノキ	タブノキ
15	タブノキ	タブノキ
16	タブノキ	タブノキ
17	ヤブニッケイ	ヤブニッケイ
18	ヤブニッケイ	タブノキ
19	タブノキ	タブノキ
20	ヤブニッケイ	タブノキ
21	タブノキ	タブノキ
22	タブノキ	ヤブニッケイ
23	タブノキ	タブノキ
24	タブノキ	タブノキ
25	タブノキ	タブノキ
26	ヤブニッケイ	タブノキ
27	タブノキ	タブノキ
28	ヤブニッケイ	タブノキ
29	タブノキ	タブノキ
30	タブノキ	タブノキ
31	タブノキ	タブノキ
32	ヤブニッケイ	タブノキ
33	ヤブニッケイ	タブノキ
34	タブノキ	タブノキ
35	ヤブニッケイ	タブノキ
36	タブノキ	タブノキ
37	ヤブニッケイ	タブノキ
38	タブノキ	タブノキ
39	タブノキ	タブノキ
40	タブノキ	タブノキ
41	ヤブニッケイ	タブノキ
42	タブノキ	タブノキ
43	ヤブニッケイ	タブノキ
44	ヤブニッケイ	タブノキ
45	タブノキ	タブノキ
46	タブノキ	タブノキ
47	ヤブニッケイ	タブノキ
48	タブノキ	タブノキ
49	タブノキ	タブノキ
50	タブノキ	タブノキ

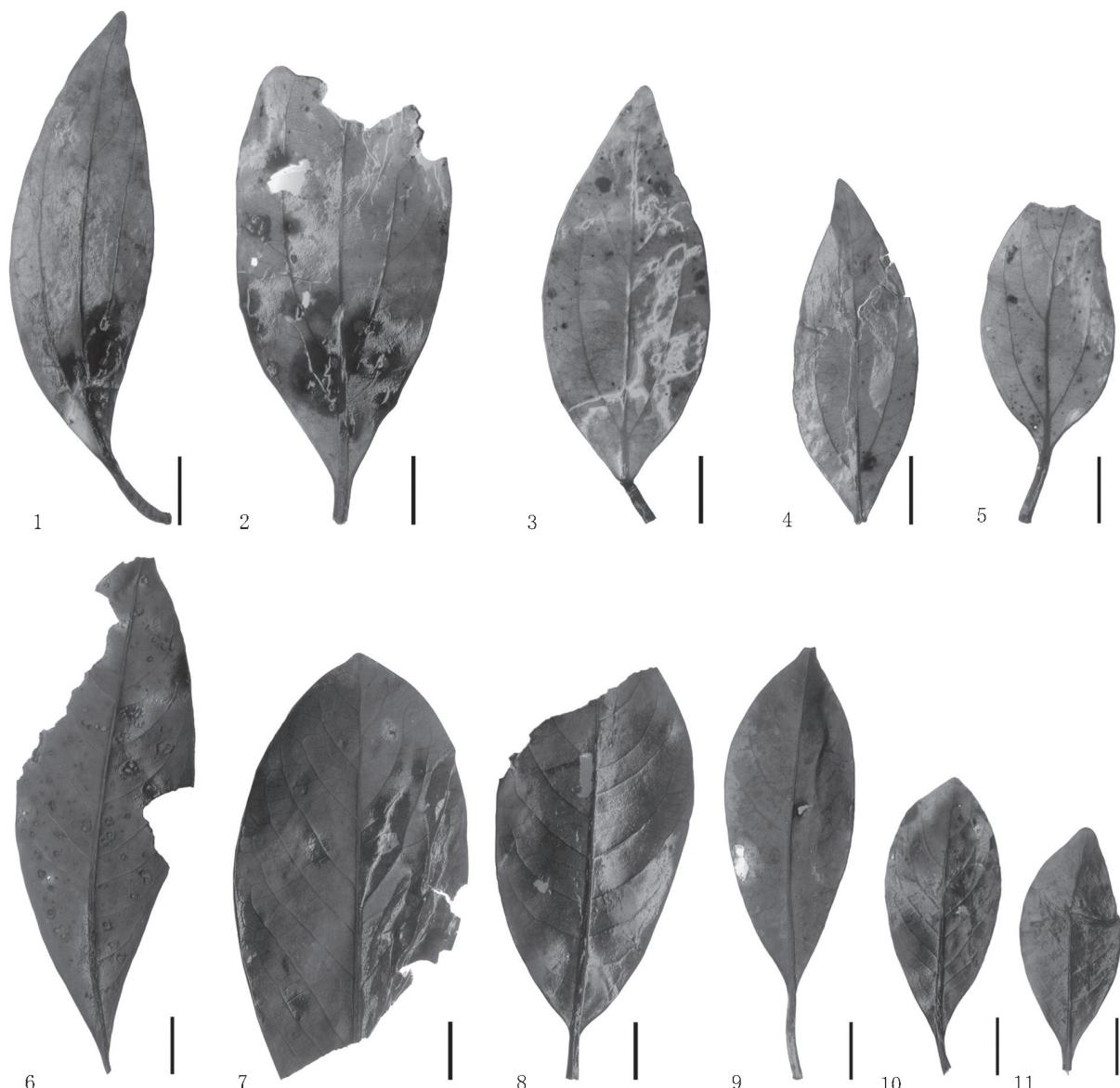


Fig3 原遺跡第28次調査から出土した葉遺体

スケール 1-11:10mm

1. ヤブニッケイ葉 (SD202、No. 26)、2. ヤブニッケイ葉 (SD202、No. 35)、3. ヤブニッケイ葉 (SD202、No. 11)、
4. ヤブニッケイ葉 (SD202、No. 33)、5. ヤブニッケイ葉 (SD202、No. 2) 6. タブノキ葉 (SX263、No. 24)、7. タブノキ葉 (SD202、No. 38)、8. タブノキ葉 (SD202、No. 46)、9. タブノキ葉 (SD202、No. 36)、10. タブノキ葉 (SD202、No. 27)、11. タブノキ葉 (SX263、No. 48)



1. I 区全景（東から）



2.SK004（東から）



3.SK008 土層（西から）



4.SK008（西から）



5.SK033（東から）



1.SK010 遺物出土状況（南から）



2.SK010 完掘（東から）



3.SK003（東から）



4.SC080（東から）



5.SE007（北から）



6.SE078 遺物出土状況（西から）



7.SE078 底面遺物出土状況（東から）



8.SD086（西から）



1.SD086 土層（西から）



2.SD086 土器集中出土（東から）



3.SD144(北から)



4.SD144 土層（西から）



5. II-1 区全景（東から）



1. II-2区全景(東から)



2.SE235(南西から)



3.SE235井筒半裁(北から)



4.SE236(南から)



5.SE236(左)・SE238(右) 北から



1.SE248 (北西から)



2.SE280 (東から)



3.SE317(東から)



4.SE287·325 (東から)



5.SE287 井筒 (北から)



6.SE287 井筒 (東から)



7.SE287 横木出土状況



8.SE287 木器出土状況 (北から)



1.SE318(南から)



2.SE297(左)・320(右) 西から



3.SD203(西から)



4.SD304(東から)



5.SK372 遺物出土状況(南から)



6.SK244 土層(北から)



7.SK261 土層(北東から)



8.SK282(南から)

## IV. 第30次調査の記録

### 1. 概要

今回報告する30次調査地点（第39図）は遺跡のほぼ中央部に位置し、遺跡内の微地形上では微高地Aの西端に立地する。調査前は駐車場として使用されており、標高約6mの平地であった。隣接する南側では31次調査、西側では9・22・25・27次調査が実施されている。

遺跡の層序は、約80cmの表土下に水田耕作土と考えられる鉄分混じりの灰褐色粘質土、灰黄褐色粘質土が堆積し、その下に黒褐色粘質土の包含層が、調査区の一部分において残存する。さらにその下のシルト層において遺構を検出した。このシルト層は東側では黄褐色シルト層、西側では青灰シルト層を呈する。遺構検出面の標高は5.1m～5.3mで、東側から西側にかけて緩やかに低くなっている。南北方向では、顕著な高低差は見られなかった。

調査はI区とII区にわけて実施した。I区の調査は平成23年11月21日に着手した。廃土置き場の関係から、調査区を東側と西側に分けて調査を実施した。まず調査区の西側部分の表土剥ぎを重機で行い、調査区周辺の整備、調査区内杭設定等の後、28日から遺構検出を開始した。その後、遺構掘削や遺構の実測、周辺測量、遺物の取り上げなどの作業を進め、高所作業車による写真撮影終了後、12月6日に重機で調査区の反転を行い、東側の調査を開始した。西側同様、人力掘削の後、実測等記録保存作業を行い、高所作業車による写真撮影ののち、I区の調査を終了した。

II区の調査は、平成24年2月2日に着手した。まず、重機で表土を剥ぎ、調査区周辺の整備、調査区内杭設定等を行った。遺構検出、遺構掘削や記録保存作業の後、ローリングタワーによる写真撮影を行い、3月7日にII区の調査を終了した。I区、II区を合わせた調査実施面積は610m<sup>2</sup>である。



第37図 30次調査区位置図(1/1,000)

## 2. 遺構と遺物

30次調査では、I区において溝（SD）、掘立柱建物跡（SB）を、II区において自然流路（SR）を検出した。そのほか、土坑やピットを多数検出したが、遺構内から出土した遺物は、摩耗した土器小片がほとんどで、時期を特定することは困難である。以下、SD、SB、SRの内容について遺構毎に述べる。遺構番号は、原則として調査時の遺構番号を用いている。

### 1) 溝（SD025 第38図）

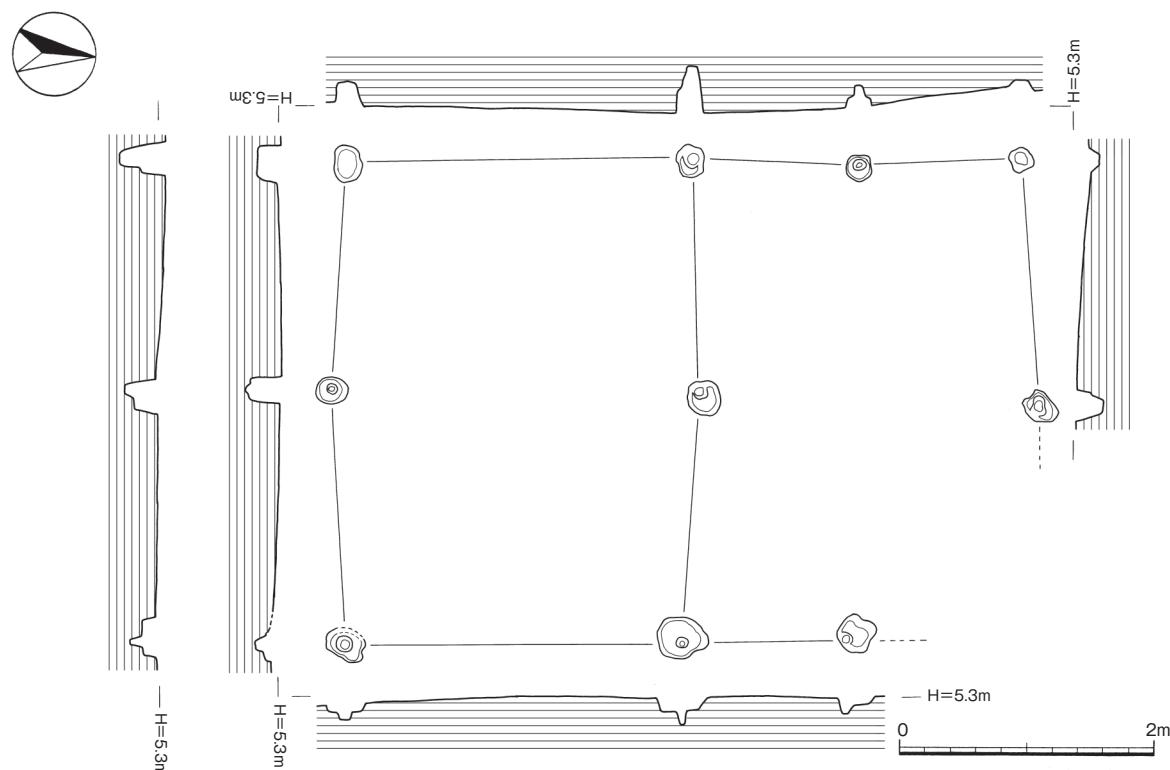
I区調査区西側において、南西から北東方向に向かって延びる溝を1条検出した。さらに調査区の北側・南側にも延びる。幅は35cm～40cm、深さは5cm～15cmで、断面はU字状～逆台形状を呈する。埋土の堆積状況は、やや鉄分混じりの暗褐色粘質土～灰黃粘質土である。水が流れている形跡は観察できない。溝内の北側部分からは弥生時代の土器小片が数点出土しているが、図化できるものはない。南側に隣接する31次調査においてこの溝の延長（31次調査SD066）が検出されており、さらに南西方向に向かって延びていく状況が確認されている。

### 2) 掘立柱建物跡（SB070・071）

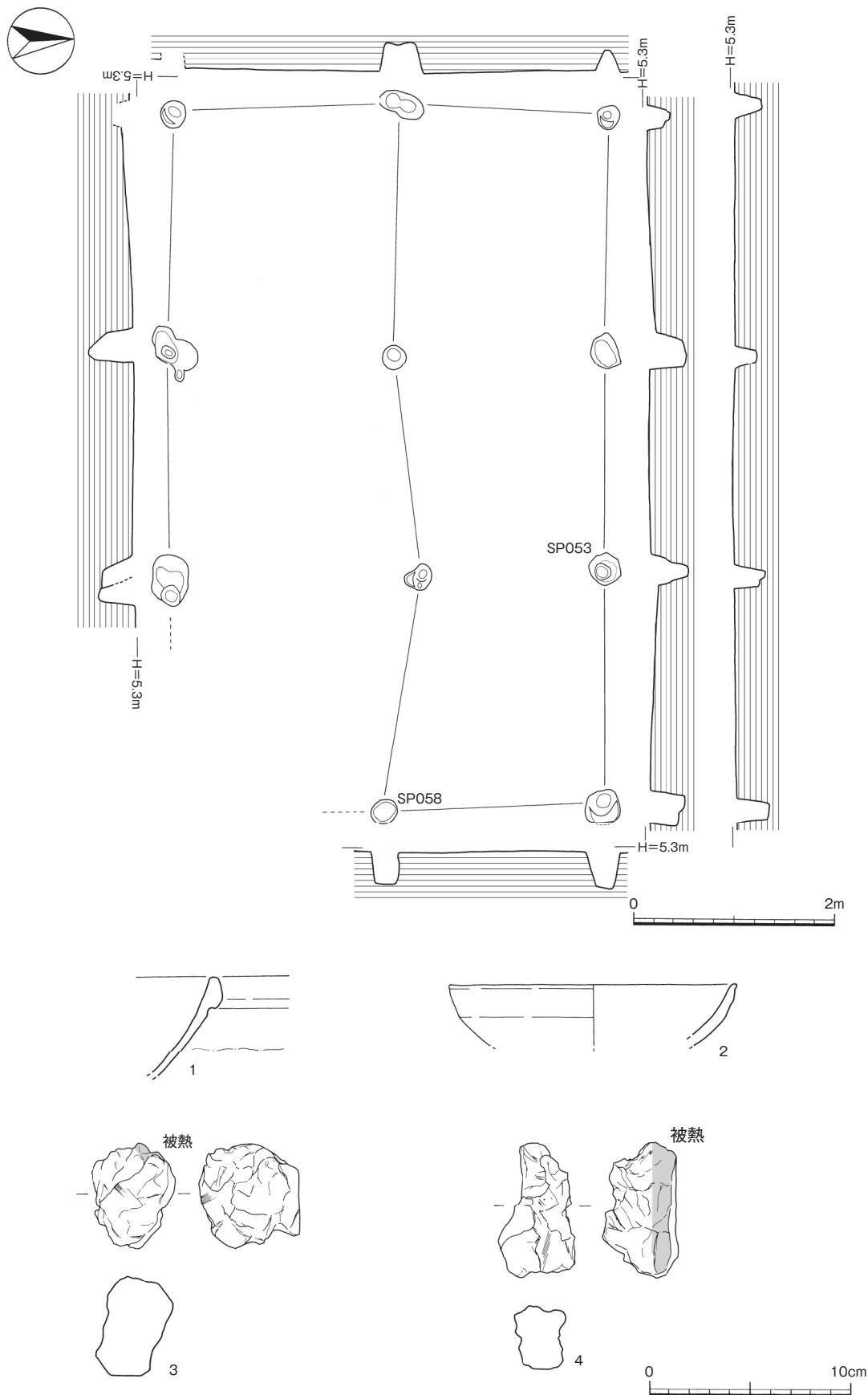
I区では東側でピットが多数検出され、その中央で1棟、またI区とII区の境で1棟の建物跡を復元することができた。

**SB070（第39図）** 調査区中央で検出された。2×3間で、1間の長さは1.3～2.1m。北東隅は調査区外であったので、ピットの確認はできなかった。ピット内から遺物の出土はない。

**SB071（第40図）** 調査区東側で検出された。2×3間で、1間の長さは1.8～2.4m。南東隅は調査区外であったので、ピットの確認はできなかった。ピットの埋土は、暗茶褐色粘質土である。



第39図 SB070実測図(1/60)



第40図 SB071実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（第40図） SP053からは1・3・4が、SP058からは2が出土した。1は白磁碗IV類の口縁部から胴部である。胴部下部は露胎である。2は土師器碗である。3・4は炉壁の一部であると考えられる。スサ混じりの胎土は淡黄色～浅黄色を呈するが、表面に赤く変色した部分が見られる。

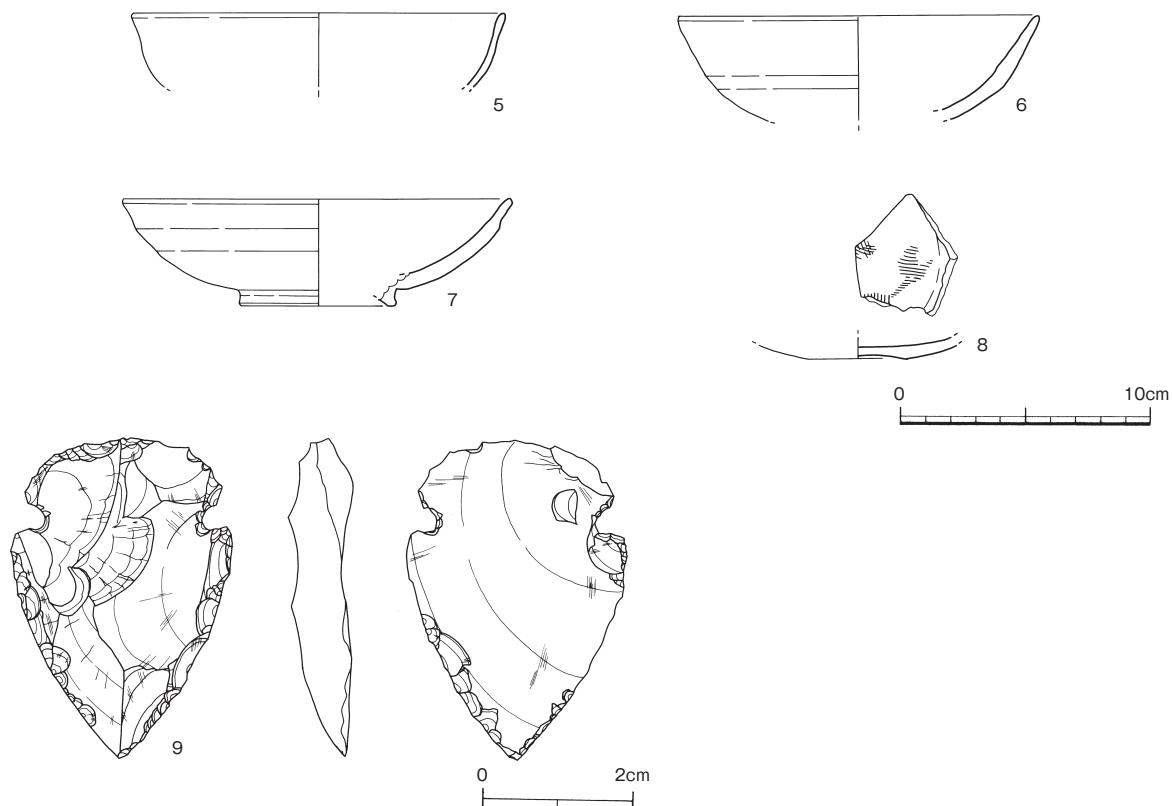
### 3) 自然流路 (SR072～074 第38図)

II区の西側において自然流路と見られる遺構を3条検出した。SR072とSR074はSR073に切られている。SR072の最大幅は約2m、深さは8cm。SR073の最大幅は約3m、深さは10cm。SR074の最大幅は約3m、深さは28cmである。SR073、SR074の下層には粗砂の堆積が確認された。このうち、SR073は弥生時代後期～古墳時代の甕の破片が複数個体出土しているが、古墳時代の遺物は摩耗が少なく、この遺構の時期を示す可能性が高いと考えられる。SR074の粗砂層からは古墳時代前期の土器が出土しているが、SR072は、土器片が数点出土したのみで明確な時期は不明である。

また、この自然流路内および周辺において、動物の足跡の可能性がある小さな凹みを多数検出した。大きさは5～15cm程度で、深さは浅い。円形や橢円形のほかに、蹄状を呈するものも見られる。

### 4) その他の出土遺物 (第41図)

5は土師壺、6・7は土師器碗である。8は同安窯系青磁Ⅲ類である。胴部全面施釉で底部は釉を剥ぎ取っている。内面に櫛描きの文様が入る。9は縦型の石匙である。表採資料である。石材はにぶい黄橙色を呈する頁質岩もしくは粒子の粗いチャートである。刃部は左右とも表裏両面から剥離調整を行っている。左右の抉り部分を横から観察すると、縦方向のすり切り痕が見て取れる（石匙に関しては、吉留秀人氏の御教授による）。



第41図 その他の出土遺物実測図(1/3, 1/1)

### 3. 結語

今回の調査では、縄文時代から近世までの遺物・遺構を検出した。時期を特定することができる遺構は少ないが、これまでの調査成果で周辺に中世の集落が展開していたことがわかつており、本調査区は中世の集落の一部であったと考えられる。また、今回の30次調査地点は、北側に位置する1次調査地点が低地であることや、土地条件図、航空写真、現在の水路の位置等から低地であると推定されていたが、今回の調査で調査区の地形は、微高地の端に位置し、西側は自然流路が形成される低い立地であったことがわかつたことも調査成果のひとつと言えよう。

今回、出土遺物として縦型の石匙（第41図9）を掲載した（右写真）。これまで、原遺跡では、2次・9次・12次・17次・22次・26次・31次において縄文時代草創期～晚期の黒曜石製、サヌカイト製の石鏃が出土しているが、当該期の明確な遺構は確認されていない。今回の石器も表採資料であり、調査区内において同時期の遺構は検出されなかった。原遺跡内における今後の調査による縄文時代の遺構の検出を期待したい。



9



1. I 区西側全景（東から）



2. I 区東側全景（西から）



1. II区全景（東から） 2. I区SDおよびSB071（西から）  
3. I区SB070（北から） 4. I区SD025土層断面（南から） 5. II区SR周辺（南から）

報告書抄録

ふりがな	はらいせき16							
書名	原遺跡16							
副書名	—第28次・30次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1199集							
編著者名	屋山洋・福菌美由紀							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8620 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2013年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらくはら6ちょうめちない 早良区原6丁目地内	40130	20311	33° 33' 46"	130° 20' 38"	20110920 ～ 20120307	628 m <sup>2</sup>	道路拡幅 記録保存	
ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 さわらくはら7ちょうめちない 早良区原7丁目地内	40130	20311	33° 56' 28"	130° 34' 16"	20111121 ～ 20120307	543 m <sup>2</sup>	道路拡幅 記録保存	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
原遺跡第28次調査	集落	弥生時代・中世・近世	溝・井戸・土坑	弥生土器・貿易陶磁・土師器・近世陶磁	11世紀末の東西方向の溝を確認した。拠点集落を囲む溝の一部である可能性がある。			
原遺跡第30次調査	集落	弥生時代・中世	溝・掘立柱建物	弥生土器・土師器・石器	—			
要約	第28次調査では11世紀末から12世紀にかけての溝と井戸を検出した。貿易陶磁等の遺物が多量に出土し、当該期の拠点集落であった可能性がある。また中世末～近世と思われる池状遺構とそれに伴う石組みを検出した。周辺には南屋敷などの小字があり、中世末から近世の遺構が確認されている。池状遺構はこの屋敷に伴う可能性が考えられる。その他に弥生時代初頭の土坑を数基検出した。今回の調査で確認できた弥生時代初頭の遺構は少なかったが、後世の遺構から遺物が数多く出土しているため、後世に削平されたものの本来は遺構が密に分布していたものと考えられる。 第30次調査においては、調査区を南北方向に走る弥生時代の溝、および中世の掘立柱建物跡2棟、自然流路を検出した。							

はらいせき16

## 原遺跡16

—第28次・30次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1199集

2013(平成25)年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

(092) 711-4667

印刷 会社名 I・WA・MI 株式会社

住所 福岡市博多区博多駅南6-8-30

電話 092-415-2717





